
アカシックドミネーター

丸尾 ナオキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アカシックドミネーター

【Nコード】

N9899W

【作者名】

丸尾 ナオキ

【あらすじ】

新作MMORPG「アカシックドミネーター」^{リアルマネー}。クエスト達成者には賞金まで付けられて一躍その知名度を上げるが、ゲームにはとんでもない呪いがかけられていた！ 呪いのキャンペーン終了まで2週間。普通の大学生（ゲーム内では魔法使いの少女）の主人公は果たして生き延びることが出来るのか！？（ファンタジーかつライトホラーなお話です。短めのストーリーですが、ご感想や誤字脱字の指摘大歓迎です）

オープニングは大事ですね

「デュラハンだ！」

「後ろからとかそんなのアリかよ！？」

水滴と僅かな足音のみが響いて響いていた洞窟に突如として、不気味な轟音が鳴り響く。病的なまでに逞しい体と、不気味な黒い目を響かせる黒毛の馬に股がる、禍々しい装飾の鎧を着込んだ騎士。手に構えるランスは真っ赤に染まっており、これまで数多の侵入者を仕留めて来たという勲章になっていた。全長3mはあるうかと言う巨大な悪魔に立ち向かうのは小さな4人の戦士達。

かち合う金属音、所々に飛び交う火柱。彼らは一步も引くことが無かった、やがて火柱が馬の足元を掠め、僅かにバランスを崩した所を、戦士の剣が彼の者の首を貫く。唸り声を上げながらランスを振り回すが、その腕ももう一人の戦士に斬り落とされる。

「止めだ！」

戦士が首に斬りつけた剣を振り上げもう一度、首に斬りつける。

今度は首が跳ね跳び軽い金属音を鳴らしながら地面を転がりまわる。

「よし！」

「よし、じゃない！ シエル、首を逃がすな！」

「わかってるよ！ フレームレーザー！」

それまで後方から援護していた、一回り小さい人間の杖からより収束した熱線が放たれる。その光線は転がった首を逃がすことなく捉え、すぐに鉄の兜を赤白く染め上げる。やがて物々しい断末魔が響き渡り、洞窟内に再び静寂が訪れた。

「まったく… デュラハンは元々首が取れてるもんですよ？」

「ありや、そうだったの？ 恥ずかしい。『止めだー！』なんて」

若い男戦士は笑いながら剣の血を拭く。

隣にいた法衣に身を包んだ男が何やら呪文を唱えると、仲間の擦り傷はみるみる塞がっていく。

「よし！ 特に被害も無いし、再度出発だ！」

地底深くに眠るお宝を求めて、命知らずの4人の冒険者は今日も行く。

陽気な性格のリーダー、戦士YASU。

チーム1の力持ちながら癒し系でもある、獣戦士Pon太。

貴重な回復役でチームのブレイン的存在、僧侶まるちー。

そして、パーティーの可愛い紅一点、魔法少女シエル。

今日も四人は命がけの探索を行っていた。でも、もうこんな慣れっこだ。みんながこの状況を楽しんでいる。まるで死の淵こそが生の充足を満たすと言いたげに。冒険者とはこうでなくてはやってられないのだ。

たった、一人を除いて。

「上からだYASUううーっ!!!」

少女の甲高い絶叫が洞窟に響き渡る。YASUは瞬時に右方に飛びのき、その斬撃をすのでのところでかわす。

長い爪を持った不気味な魔物は、口惜しそうに仕留め損ねた獲物を睨んでいた。

「いてて… 助かったぜ、シエル」

「今度は上からガーゴイルか！ 向こうも頭使って来てるよ！」

「流石に深層は手強いモンスターが多いですね」

冒険者たちは笑う。強敵を前にして、その状況を楽しむ。

「みんな！ 油断しないで！ 死んだら何にもならないよ！」

一人、少女の悲痛ともいえる声が木霊する。

「怖いのか？ シエル」

「まあ、小さい女の子だし」

「とにかく前衛は任せろ！ シエルは距離を取って後方から援護を！」

人と魔獣の声が反響し、洞窟の中は一転修羅場と化す。

「増援だ！」

「ガーゴイルが2、3…4体！？」

次々に表れては容赦なく侵入者に襲いかかる魔物たち。

「シエルさん！ 2人が引き付けているうちに一網打尽に！」

まるちーの言葉に頷き、少女は魔法の詠唱を始める。

（死なせるか…！）

味方は強い。数の多いガーゴイル相手に互角以上に戦っている。しかし敵もやるもので人数差を利用したヒットアンドアウェイの戦法を取り、互いに決定打を打てずにいた。

戦士だけのパーティーなら長期戦必至だが、こんな時のための魔法使いなのだ。シエルの詠唱が終わりに近づく、それを確認したまるちーが味方に合図を送る。ガーゴイル達が気づいた時には既に手遅れ。自分達は距離を取っていたつもりだったが、実際はその逆。二人の戦士によって効果範囲内まで完璧におびき寄せられていたのだ。

「ファイヤーウォール！」

ガーゴイル達の周りを文字通り炎の壁が取り囲む。壁は次第に狭

まっで行き、やがてガーゴイル達を包みこむ。

「ギヤアアーツ！」

燃え盛る魔物たちを見て、味方が歓声を上げる。だがシエルは油断することなく、さらに気合を入れて魔力を集中させる。ガーゴイル達は既に動きを止めているが、それでもなお炎は燃え盛るばかりであった。

「シエルさん。もうその辺で十分です。これ以上は魔力の無駄ですよ」

まるちーの声で我に帰ったシエルは魔力を切る。既に魔物の肉体は存在せず、黒焦げた骨が残っているだけであった。脂汗をかいて息を荒らげる少女を見てまるちーは心配そうに声をかけた。

「おい！ また増えたよ！」

間髪いれずに叫んだpon太の剣の先には更なる魔物の群れ。数は10匹… いや、もつという。

「ここが山場…かな？ シエル、まだ行けるか？」

「大丈夫…！」

飛びかかって来る魔物の先陣に再び二人の戦士が立ち向かう。シエルは今度は一点集中型の魔法の詠唱を始めた。敵がまだ狭い通路にいるうちならこれで一網打尽に出来る。

「くそっ！ 流石にそろそろきついぜ！」

「シエルは？」

少女の周りに大きな魔法陣が完成し、その拡散と共に味方はその場を跳んで離れる。異常に気付いた魔物たちが一斉にシエルに向かって襲いかかる。

（「俺」だつてまだ… 死にたくねえんだよ！）

魔物の爪が今にもシエルの腕を斬り裂こうとした時、彼女の杖から鋭い閃光が伸びた。

1話 何となくそのゲームが気になったんです

大学一年の夏。俺は特に何をするでもなく、だらだらとネット三昧を続けていた。趣味と言えばせいぜい読書とゲームくらいだが、バイトも特にやっていない俺には自由に使える金はあまりない。で、無料のネットゲばかりやっているのだが…

「はあゝあ、もうこのゲームも潮時か…」

巷のネットゲはどこも無料無料と言っているが、本当に楽しみたいのなら課金しろと言う所が大半だ。というか最近のはもはや課金前提のゲームバランスになっている気がする。たかだか学生の身分の俺にはちと辛い。

…いや、払えないことも無いんだけどさ。ネットゲなんて長く保つたとしても精々数年程度。据え置きของเกมに比べて面白いかと聞かれると首をかしげてしまうようなものに果たして金をつぎ込んで良いものか。そんな葛藤が常にあった。

結局はいつもほどにやって退会して、また新しいのってサイクルになるんだけどね。その時だって何気なく広告に目を通してしまったんだ。

「新世代のネットゲーム『アカシックドミネーター』? …まあ、いかにも厨臭そうな名前だな。10人協力プレイとか、凄いだろうけどパソコンのスペック的に大丈夫か?」

最近のは名前すら似ているものが多くて混乱することがある。つか、もうちょつと捻ってくれよ製作者。

『本稼働に先駆けて、応募者の中から抽選で版をプレイすることが出来ます』って… 要はテストプレイヤーってことだろ? ま

つたく、上手い具合に経費削減してますね。まあどうせ暇だし無料だし、一応応募しておきましょう。フリーメールのアドレスだけでいいのなら特に問題なしと。

3日後。

「メール？『あなたは 版のプレイヤーに選ばれました』って、この前のネトゲのテストプレイの奴か。随分早いんだな」

単に応募者が少なかっただけだったりして。まあいいか。

さてさて、Webサイトからゲームをダウンロードし、ゲーム開始。

まずはキャラ登録。

性別は… 女で行こう。ネカマ楽しいもんね。名前はシエルつと。女キャラを作るときはいつもこの名前だ。単に語感がいいだけで特に深い意味は無い。

次は職業。

近距離型のファイター。遠距離型のアーチャー。攻撃魔法のソーサラー。回復魔法のプリースト。こちら辺は鉄板か。後はシーフ、ドクター、トレーダー、アルケミスト、クリエイター、ファーマー… なんだこりゃ。無駄に職業多くないか？

ドラ エとかF みたいにいっぱい職業作りたかったんだろうが、

明らかに地雷臭がしてきたぞ。なんか色々固有スキルとかあるみたいだけど。大体回復役はプリーストがいるのにドクターとかいらないだろ。せめてどっちかにまとりよ。

うーん。どうせテストプレイなんだろうし、適当にソーサラーで女の子だしな。

アバターは緑髪のおかつぱ頭に、いかにも魔女っぽい帽子と服、そして古びた木の杖を持った少女だ。俺は好みだけど逆にありきたりすぎる気もするなあ。

ゲーム内容かというと、これもよくある話でまずは冒険者ギルドに登録し、各地のクエストをどんどんこなしていくといったものだ。ゲーム画面は日本人好みの2D。戦闘にはアクション要素があつて、位置取りも重要で戦略的要素が高く、なかなか面白い…のだが、結構難易度が高い。

始めてから2時間。既に3回死んでいる。どうやらパーティーを組むこと前提のバランスになっているようだ。単に調整できてないだけかもしれないが。

早くもソロプレイに限界を感じた俺は適当なパーティーを探すことにした。これがネトゲの醍醐味であり、最も煩わしいところなんだよな。町に戻ってみると早くもパーティー募集のチャットが飛び交っていた。アクション要素が強いとはいえ、感想はみんな同じか。抽選で選んでる割には結構人はいるみたいだな。

どれどれ、お客様の中に私とパーティーを組んでくれる方はいらっしゃいませんか？ 出来ればファイターの方！

うん。なんだかんだで楽しんでいたんだよ。この時は。

2話 結構面白かったんですよ

まるち「すまん、俺は明日早いからそろそろ抜けるわ」

YASU「おう、お疲れ」

シエル「回復役が抜けるときついね。今日は解散にする？」

Pon太「うん、そうしょー」

版の稼働から一週間。俺達は主に4人でパーティーを組んでいた。まだ少ししかやっていないがパーティーバランスは割といいと思う。

まるち「はプリーストで貴重な回復役なのだが、リアル社会人っぽく結構早い時間に抜けることが多い。

YASUはリーダー格のファイター。ネット上だというのに細かい気配りが出来る人で、最初に俺をパーティーに誘ってくれたのもこの人だ。

Pon太も同じくファイターなのだが、彼（女？）は何故かアバターが獣人になっている。何か弄ったとかではなく最初からそうだったらしい。どうやらこのゲームでは初期アバターはランダムに決定されるみたいだ。今のところ変更できる機能はない。おそらく正式稼働版で課金することで色々弄れるようになるってところだろう。最後に、画面上は紅一点のソーサラー、シエル。つまり俺。中身は男って… 薄々みんな勘付いてるだろーな。

YASU「じゃあ自分も今日は抜けますね。それでは」

Pon太「シエルさんはどうする？」

シエル「私はしばらく個人ショップを見て回ります」

個人ショップというのは、他のプレイヤーに自分の武器や道具を自由に売ることのできる機能だ。時々クエスト用の重要アイテムまで売ってたりするので意外と侮れない。

Pon太「そうかー。僕の友達が新しく始めたんで、今度暇があったらこっちのパーティーにも来てくれないかな？」

シエル「まだ募集やってたんですか？ テストプレイみたいなものなのに」

Pon太「そう言えばそうだよー 抽選って言ってる割にはどんなでもウエルカムって感じ」

シエル「運営のことですからよく分かりませんね」

Pon太「シエルさんは、本稼働になっても続けるつもり？」

シエル「課金しないと詰まるといったことが無い限りは」

Pon太「実は 版からのプレイヤーは本稼働時に色々特典があるらしいよ。特殊クエストとかもあるみたい」

シエル「それは初耳ですね」

Pon 太「僕もまた聞きただけなんだけどね。それじゃ、仲間から呼び出しにかけてるから。時間あったらよろしく!」

シエル「はい、それじゃまた」

テストプレイの方には色々特典ね… まあ別にそこまで珍しいことでもないだろうけど。初めて聞いた情報ではある。攻略サイトや某巨大掲示板もよくチェックしてるけど見たこと無かったし。今夜中にでも出るのかな?

それからしばらく俺は個人ショップを見て回っていた。その中でちょうどクエスト達成に必要なアイテムである精霊石がまとめ売りされていたので、それを見て悩んでいた。

くそ、俺が欲しいのは後8個なんだ。20個でまとめ売りなんて残酷すぎる。精霊石が取れるダンジョンは魔法耐性が高い敵ばかりだから、単騎だと余裕で全滅の恐れがある。個人のクエストのために他の人を連れ回すのは申し訳ないし。

5000G…高いなあ。これは完全に俺達ソーサラーの足元を見ていやがる。というか金が足りない。あと943G足りない。今から単騎駆けしてくるか? でも一人でクリアできる程度のダンジョンじゃ、金溜めんのにどれだけ時間がかかることやら… ちくしょく

ん? おっと、チャットコールだ。

Gilly「ちょっといいかな? 今、時間ある?」

シエル「はい、大丈夫ですけど。どうしました?」

Gillyさん…? 見た所職業はシーフか、珍しいな。

早いうちに出来た攻略サイトを色々見て回っているが、このゲームは鉄板の職業、つまりファイター、アーチャー、ソーサラー、プリーストの4職以外は初心者は手を出さない方が無難とまで書かれている。

理由は戦闘能力がこの4種に比べて圧倒的に低いこと。初期段階の固有スキルは見たところ面白そうなのが揃っているのだが、それをまともに使いこなせるレベルになるまでが大変らしい。前半はともかく、中盤以降は戦闘面で完全にお荷物になるため、転職システムが後に実装されるであろう… という期待まで書いてある始末。シーフも素早さは高いが攻撃力が低過ぎて敵が倒せない、との悲痛な叫びが掲示板に書かれてあった。実際、ゲーム上でもこの鉄板4種以外の職業はほとんど見かけない。

Gilly「ちょっと協力してほしいクエストがあるんだけど。いいかな？」

シエル「私に出来ることでしたら、内容にもよりますけど」

Gilly「これなんだけど」

そう言っただけで彼が提示したクエストを見て俺は自分の目を疑った。だが、この時のGillyさんとの出会いが後の俺の運命を決定づけたと言っても過言ではない。

3話 それはある意味運命の出会いでした

【クエスト】

『サンマイト遺跡深層（地下50F）にある「ミュールの赤石」をゲットせよ！』

（攻略のヒント）

「ミュールの赤石」の前には強力なボス、ワイバーンが立ちはだかる。炎耐性の装備は必須だろう。また40Fに続いて状態異常攻撃を仕掛けてくる敵も多いので要注意だ！

シエル「いや、無理ですってこれ！ 私全然レベル足りてませんかー！」

サンマイト遺跡というのは割と序盤からお世話になるダンジョンだ。俺も何度も通ったことがある。遺跡自体は果てしなく下の階層まで続いているらしく、レベル〓攻略出来る階層というのが今のところ知られている大体のバランスである。

ちなみに今の俺のレベルは16。この前パーティー4人の力を合わせて何とか20Fのボスを倒して、みんなで画面越しに祝杯をあげたばかりだ。うん、50Fとか普通に考えて無理。

そう言うGillyさんのレベルは31。俺よりはやりこんでいるみたいだが、それでも全然足りない。ましてや戦闘能力の低いシーフでは。むしろよくここまで育てたものだ。

シエル「他にレベル高い方がパーティーにいらっしゃるんですか？」

G i l l y「いや、俺一人。ちょうど単騎のソーサラーを探してたところ」

シエル「どう考えてもクリアできる気がしないんですけど。遺跡50F制覇とか、掲示板で普通に自慢出来るレベルですよ？」

G i l l y「まあ聞けよ。まともにはクリアしないし、ワイバーンとやらと戦う必要もない」

彼の戦略はこうだ。シーフの特殊スキル「戦闘回避」を駆使して、ミュールの赤石だけ取って帰る… というもの。なるほど、確かにクリア条件は「赤石の獲得」だから、無理してボスと戦う必要も無いということだ。彼はこの方法を駆使して既に40Fまでは単騎でクリアしたらしい。クエスト達成でボーナス経験値を獲得できるから、彼のレベルはそれで上がったものだろう。すげえ、本当の話ならもはやプロの領域。ボス回避なんて誰が考え付くんだ。

シエル「それに何で私が必要なんですか？」

G i l l y「流石に50Fともなってくると、戦闘回避だけではきつくてな。攪乱要因を探していたところ」

シエル「攪乱、ですか」

G i l l y「ああ、まだ稼働したてだからレベル50近い奴なんて

ほとんどいないし」

シエル「いないことはないでしょうけど」

Gilly「シーフは戦闘ではつきり言っ足手まといにしかないからな。パーティーに加えてくれる奴がいらないだよ」

確かに、シーフは攻撃力低いし、他に戦闘に役に立つような能力は見つかっていない。レベル30まで上げた彼の言の限りではおそらく存在すらないのだろう。初期の特殊能力『鍵開け』は一見魅力的だが、鍵のかかった宝箱はあまり見かけないし、入っている物も（序盤のダンジョンでは）そこまで大した代物ではない。

なので掲示板でもボロクソに言われていたのだが…なるほど、単騎での低レベル攻略向けの職業だったのか。パイオニアマジパネエツす。

シエル「でも攪乱って…できますかね？」

Gilly「そのレベルだともう広範囲魔法は覚えてるだろ？^{ファイヤウォール} だったら大丈夫。作戦はちゃんと練ってある。なあと、失敗しても経験値がちよつと減るだけ。成功したら互いにガツポリだ。悪くない話だろ？」

流石は盗賊。口も上手い。このゲームの序盤はパーティーを組んでないとほとんど死にゲーとまで言われるバランスだったため、いまさらクエスト失敗なんて気にもならないし。

シエル「わかりました。協力しましょう。今からでも行くんですか？」

G i l l y「おう。助かったぜ！ そんじや準備が出来たらすぐにも遺跡の前に来てくれ。それとアイテム欄は可能な限り空けておいてくれよ。回復アイテムもいらないぞ。どうせ敵の攻撃くらったら即死だしな！」

なんと物騒な。だが、これはこれで楽しくなってきたぞ。

俺の頭の中で若かりし頃の記憶が蘇って来る。小さい頃はレベル上げとか面倒くさくて、とにかく無闇に突撃していたものだ。低レベルでのギリギリのボス戦。あれこそが本来のRPGの楽しみではなかったろうか。最近はやっと詰まると攻略サイトに頼ったりして… 今思えば本当に損してるよなあ。先が見えない展開を開拓するのがゲームの楽しみだろうに。ネタバレされると面白さは半減、いやそれ以下だ。

だからこそ、彼の話に乗ってみたくなったのだ。まだ日本中の誰もが知らない作戦。提案した本人も知らない成功率。少なくとも何度かは失敗しているみたいだし。これから二人で新しい遊びを開拓してくのだ。

くうゝ たまらない。男の子だねえ！（アバターは少女だけど）
これぞRPG！ これぞゲーム！ アイテム整理をしながら俺の
テンションはかなり上がっていた。

ほんと一人暮らしで良かったと思う。

3話 それはある意味運命の出会いでした（後書き）

一話当たりの字数の乱れは自重しません

4話 でも同時に世の中の怖さを知りました（前書き）

文字数が前回の倍だなんてよくある話です

4話 でも同時に世の中の怖さを知りました

俺は不要アイテムを売っぱらい、彼の言った通り可能な限りアイテム欄を空けて来た。ソーサラーは元々あまり荷物持てないけど。もう午前1時半過ぎだと言うのに、遺跡の前には結構人がいた。レベル30越えの人は結構いるんだな。40過ぎもちよくちよく見る。いやゝみんないい感じに廃人ですな。

Harida (Lv. 42) 「今から40Fに挑むのでパーティー募集中です」

うつへ、どんどん周りに人が集まってる。このゲームのパーティーの最大人数は10人だけど、当初から危惧されていた通りパソコンや通信のスペックが追いつかない人が多いようだ。アクション要素があるだけに戦闘時のラグや回線落ちはかなり痛い。だから普通はみんな4〜6人くらいで組んでいる。

ぱる (Lv. 38) 「今日こそクリア目指しましょう！」

レーベン (Lv. 40) 「石化回復アイテムたっぷり持って来ましたよ」

うえー 石化とかあのかよ。みんなレベル40前後なのにクリア出来てないってどんだけ。あれを本当に単騎で行けんのか？

そう言うGillyさんはと…いたいた。

Gilly 「よしよし。来てくれたな。アイテム欄はちゃんと空けて来たか？」

シエル「はい、言われたとおりに限界まで減らしました。回復一つ持ってません。これって深層アイテムを回収するためですか？」

G i l l y「いや、悪いがダンジョン内のアイテムは基本全無視で頼む。モンスターに気づかれるし、40F以降はアイテム自体がトラップって時もあるからだ。俺は前々回それでやられた」

シエル「ということは、目標は例の赤石だけですか？」

G i l l y「ああ、詳しい話は中でしょう」

サンマイト遺跡は10F毎のフロアボスを倒すと、近道が出来るようになっている。つまり20Fのボスを倒したら、一度町に戻っても次は21Fからチャレンジできるということだ。でも次の近道が使えるのは30Fのボスを倒すまで。一回の挑戦ごとに10フロアを突破する必要がある。低層の敵は面倒くさいだけだし、当然ともいえる仕様である。

…うわー 本当に40階までショートカット出来ちゃったよ。マジでここまでクリアしたんだなこの人。

G i l l y「よし、ここから先は敵と戦おうなんて思っちゃいけない」

シエル「私は4人がかりで20Fがやっとでしたからね」

G i l l y「パーティーは？」

シエル「ファイター2人にプリースト、それと私。レベルはみんな同じくらいです」

G i l l y「まあ普通にプレイしたらそんなもんだろうな。俺がシ
ーフの能力に気づいたのもたまたまだし」

シエル「ところでアイテム欄を空けたのは何のためですか？」

G i l l y「これを持ってほしいからさ」

『G i l l yはシエルに「煙幕花火」を渡した！』

なにになに？ これを使うことで一定時間相手の足止めが可能で
すか。なるほど、戦闘回避にはもってこいのアイテムだ。けどこん
なアイテム見たこと無いぞ。店はおるか掲示板にも攻略サイトにも
載っていない。

G i l l y「これは今のところ超レアアイテムだ。悪いが攻略サイ
トとかにも書かないでくれ」

シエル「何ですか？」

G i l l y「実はこれ合成で作れるアイテムなんだが、これを作っ
て売ってボロ稼ぎしている奴がいてさ。そいつから口止めされてい
るんだ」

そつえば職業にクリエイターとかもあったな。自分と同じこと
をやられて、商売敵を作るのを防ぐためか。せこいなー。

シエル「でも、入る前に渡した方がもつと数持てるんじゃないんで
すか？」

G i l l e y「実は前にこれを持ち逃げされたことがあってだな。あん時は俺もこっぴどく怒られたもんだ」

ネットゲだと言うのに… 恐ろしや。何もネットの世界で盗みなんてしなくても… リアル人生よりかはよっぽどイージーなんだし。

G i l l e y「その後、アサシンスーツ渡されてプレイヤーキラーさせられたからな」

シエル「うわぁ…」

このゲームはダンジョン内部ならばプレイヤーキラー（味方殺し）行為も可能だ。ただし一回でもやるとプレイヤーネームが真っ赤に表示され、おまけに掲示板にも危険人物リストとして晒されるので、ほとんどみんなやらない。メリットは他プレイヤーからアイテムを奪えることくらい。とてもじゃないがリターンに対してリスクが大きすぎる。

で、このアサシンスーツ。これも攻略サイトによるとこれも入手を確認したのが数人しかいないほどの超激レアアイテムらしい。装備時に自分のプレイヤーネームと職業を偽装することができ、PK行為をしても名前が赤く染まらないというものだ。こんなもの作るなんてPK行為を推奨でもしてんのか？ 運営よ。

G i l l e y「それと隠し効果が単なるバグかは解からないが、偽装した名前と同一のプレイヤーがいた時にそいつに罪を被せることが出来る。俺はパクった奴の名前を使って高レベルの味方を後ろから刈りまくって、そいつをIDと個人情報晒しまで追い込んだ」

怖え。マジで怖え。ネットゲ舐めてました、すみません。

G i l l y「だからお前もそんなことは無いようにしてくれよ？
こっちだつて好きでやったわけじゃないんだからな？　すぐく後味
悪かつたんだから」

シエル「その話聞いてやる人なんていませんよ…」

G i l l y「もちろんこの話も他言無用だ」

シエル「当然です」

まさか虚構の世界で世の中の恐ろしさを知ることになるうとは。
この人には大人しく付いていこう。俺は心の中で静かに誓った。敵
に回すと恐ろしいが、味方だと頼もしい人だ。多分。

4話 でも同時に世の中の怖さを知りました（後書き）

「煙幕花火」。知っている人は知っているチートアイテムの代名詞。私も昔よくお世話になりました。「アサシンスーツ」は今後の展開で重要になってきます。しかしこんなアイテム作るなんてほんと何考えてんだ運営（笑）

5話 低レベル攻略。それは男のロマン。(前書き)

・シエル()

職業：ソーサラー(ソーサレス)

L V . 1 6 H P 2 1 7 S P 2 5 2

・G i l l y ()

職業：シーフ

L V . 3 1 H P 7 7 8 S P 8 7

サンマイト遺跡42Fに生息するモンスターの平均HP……1000
前後

5話 低レベル攻略。それは男のロマン。

サンマイト遺跡42F

幸いにして未だに敵との交戦を全て避けている。低レベルのソーサラーという足手まといがいるというのにGillyさんのルート取りは完全に仕上がっていた。

41Fで煙幕花火を2つ使用。出来れば1つで済ませたかったと言っていたので少し申し訳ない。予定のうちには入っていたようだが。これからは俺もさらに慎重に移動していかなければならない。

ちなみ装備も一部変えられた。まず脚装備を「地下足袋」に。魔女つ子が地下足袋で。防御力も低い序盤も序盤の装備だが、どうやら隠し効果で敵に気づかれにくくなるらしい。一体どうやって気づいたんだ。

そしてアクセサリ装備で「ばってんマスク」。特に能力値の変化は見当たらず、攻略サイトにも単なるアバター用の装飾装備とされている。だが彼によると、これも敵に気づかれにくくなる特殊効果があるらしい。本当かよ。だからどうやって知ったんだ。Gillyさんてもしかして製作側の人間ですか？

Gilly「よし、ここが第一の難関だ」

先に行くGillyさんが足を止めた先には狭い通路。その先にはメデューサっぽいモンスターが寝ている。こちらが下手に近づかない限り目を覚まさないようだ。

Gilly「ここは煙幕花火を使っても、先の方まで届かないからな。道が狭いから相手が『詰まって』強行突破も出来ないし。前回

までは最低でも3つ必要だった」

シエル「今回の算段は？」

ギルリー「ロングレンジLフレ임レーザーがあるだろ？ レベル15で覚えるやつ。あれを通路にぶちかましてくれ」

シエル「出来ますけど、その後は？」

ギルリー「すぐに死角の壁に張り付いてギリギリまでやり過ぎず。気づかれたら俺が煙幕花火を使って強行突破だ。奥にいる奴を限界までおびき寄せるようにしたい」

なる。Lフレ임レーザーは詠唱時間が長い割に威力が低いので正直扱いづかったのだが… そんな使い方もあるのね。

ギルリー「詠唱が近過ぎてても敵は起きるからな… えっと、この位置だ。ここからならギリギリ奥まで届く」

自分の使用キャラでもないのに何でここまで把握してるんだろうこの人。相当調べこんでいるようだ。

ギルリー「ようし、やってくれ！」

シエル「了解！ Lフレ임レーザー！」

14！ 9！ 13！ 12！ 14！ 16！

悲しいくらいに非力なダメージ値が画面を埋め尽くす。 うん、
まともに戦つたらまず勝てません！ 無理です！

目を覚ましたモンスター達が一斉に通路の先の部屋を目がけて飛び込んでくる、部屋の真ん中まで進んで、壁に張り付いている人間を見つけて襲いかかるうとした瞬間！

G i l l y「行くぞ！」

画面一杯に白いスモークが覆いかぶさる。一定時間とはいえ敵も味方も判別が付かなくなる代物だ。俺も感覚を頼りにキャラを動かして通路を進んで行く。途中何度か引っかけかりを感じたが、深く考えないようにしよう。狭く長い通路の先は… 階段！

G i l l y「こいつは重畳だ。次もよろしく頼むぜ、相棒！」

シエル「うつす！」

本来ならば次のエリアに進む階段の前には扉があり、敵を全滅させないと開かない、もしくは敵のどれかが鍵を落とす仕組みになっているのだが、そこはシーフの特殊スキル「熟練鍵開け」で突破する。G i l l y先輩マジパネエっす。

なんだろう、凄い一体感を感じる。今俺達に風が吹いている。確実に。

来てるぜ、コイツは。

画面移動のローディングの合間に（現実世界の）俺は手元のペットボトルのお茶を一口含む。キャ ッ太郎を箸でつまんで口に放り込み、手汗をウェットティッシュで拭いた。

「キてるぜ…」

暗い部屋の中で低く、重く、一言つぶやく。
一人暮らしじゃないとあやつく家族に心配されるところであった。

5話 低レベル攻略。それは男のロマン。（後書き）

今更気づきましたが、女性はソーサラーではなくソーサレスですね
orz

まあ、中身は男なんだしこまけえことはいいんだよ！（汗）

6話 風…なんだろう吹いている確実に…（前書き）

・サイクロンライノー（サイっぱいの） HP 2500

（備考）…とにかく固くて手強いモンスターだ。奴の突撃はガードすらも無効化する。しかし遠距離の攻撃手段を持たないので、上手く距離を取って戦えば安全に倒せる。氷属性が弱点なので魔法で一網打尽にするのもいいぞ！

・ヴェクシーイーグル（鳥っぱいの） HP 1100

（備考）…攻撃範囲の広い衝撃波が非常に厄介。威力自体は低いが足止めされるので、ひるんだ隙に他のモンスターにということにならないように速攻で倒したい。幸いにして防御力や魔法耐性は低い。アーチャーやソーサラーはこいつを優先的に攻撃するといいぞ！

6話 風…なんだろう吹いている確実に…

ふと思った。

Gillyさんの名前ってギリースーツから来てるんじゃないだろうか。その内「ステンバイ…」とか言いだしそうで怖い。いや、少なくとも俺は期待している。それくらいの鮮やかなスニーキングっぷりだったのだ。蛇もびっくりである。

そんなこんなでサンマイト遺跡49F。

Gilly「これが最後の難関だ」

うーむ、今度はそう来たか。

だだっ広い部屋にモンスターがぎゅうぎゅう詰め。落ち着いて考えると、かなりへんてこりんと言うか、シユールというか…とにかく現実的にはあり得ない構図だ。ゲームとはいえモンスターたちもこんな部屋で雑魚寝なんて辛かろうに。

普通に来るんだったら、この部屋は敵味方入り乱れたカオスな戦場と化するだろう。しかし今は事情が違う。俺達二人を単なる一兵卒とするなれば、目の前には大量の呂布がいるのだ。まさしく三国逆無双状態。

シエル「これは結構先まで続いているんですか？」

Gilly「ああ、それとスモークかけても広範囲攻撃を狙っていく奴がいてだな。左から二番目の鳥みたいなやつ。それを何とかして確実に事を進めたい」

あの鳥の魔物が… 先にもいると考えてよさそうだ。相手に攻撃させずに、常に先手を打って煙幕で攪乱していくべきか。攻撃当たると即死だし。

今回の探索でお世話になりっぱなしの煙幕花火はというと… 実は結構残っている。俺が持つてる分でも後8個。残りはこの階合わせて2フロアだけだし。もしかして結構余る？ それともここから一気に使う羽目になるのか。

G i l l yさんとの打ち合わせが始まる。俺がファイヤーウォール^{ワイルド}を覚えていないことに気づいて、少し焦っていたようだが、すぐさま作戦を修正。

こう来て、こう動いて、こうやって… おいおい、いけるのかこれ…？

G i l l y「焦って操作ミスするなよ。それじゃ行くぞ！」

まずは俺がぶつとい顎を持ったサイのようなモンスターに向けてファイヤーウォールを放つ。ダメージはもう見るに耐えがたい。これで3体起きるが、俺自身は入口の死角にすぐに移動するために、相手は一瞬姿を見失う。

それと同時にG i l l yさんがモンスターの体で行く手を塞ぐ所まで忍び足で切り込む。サイ達はそちに気を取られて襲いかかるうとする。こいつらは格闘しかできないので、ある程度接近させた所でわざとG i l l yさんが物音を立てて周囲のモンスターを起す。そこへ煙幕花火。

画面上のサイのいたスペースがちょうど空く。そして後ろから煙幕をかすめながら俺がフレームレーザーを撃つ。煙幕から逸れた

敵は今度は俺の方に向かって、スモークのかかっている画面上方を移動しようとする。そこへ煙幕の中からGillyさんが一発。漏れなく敵をスモークの中に閉じ込める。

俺が再びフレイムレーザーを撃ち、ダメージ値が出た場所を頼りに俺達は魔物たちの間をすり抜ける。以下その繰り返し。スモークの中では魔法の詠唱が出来ないの、毎回ギリギリ一人分スペースを空けて煙幕を張ってくれる。流石は煙幕花火全一のGilly先生だ。

そして魔物の群れ、というか壁を突破する。翼くんばりの全員抜きだ。

俺が階段へと続く扉に着いた時には既にGillyさんが鍵開けを行っていた。まだかまだかと待つうちに煙幕が途切れ、あり得ない数のモンスターが後ろから迫ってくる。

そこへハチリ、と勝利の音が鳴り響く。鳥が何かプレスみたいなのを吐いてきたけど、こちらを捉える寸前で画面は切り替わる。

ディスプレイにLoading:と表示された瞬間、俺はリアルにガッツポーズをして「いよっしゃあ!」と叫んでいた。壁ドンされた。隣の部屋の人ごめんなさい。

しかし、もう手汗がヤバイ。心臓の動悸もいい意味でヤバイ。脳汁ダッラダラ。

来た! 来たぞ! 遺跡地下50F! レベル16でクリア出来るとかマジありえねえ!

画面にサンマイト遺跡50Fと表示された時に、俺は今自分が前人未到の頂にいたことを実感する。おしっ! こうなったら、最

後まで油断せず、何が何でもクリアするぞ！

G i l l y「よくやった。この階ははっきり言って楽勝だ。後は俺に任せろ」

シエル「本当ですか？ お茶飲んでてもいいですか？」

G i l l y「ああ、そこでゆっくりしていてくれ」

「冗談半分で言ったのに… G i l l yあんちゃんマジでええ人や。

G i l l y「じゃあ、行ってくる。くれぐれも変な物音は立てないでくれよ」

シエル「行つてらっしゃい。お氣をつけて」

俺は椅子にだらしくもたれかかる。ペットボトルを祝杯の如く掲げ、とっておきの酢こんぶを開けて夜中に一人祝う。明日、じゃなかった今夜のパーティのみんなの反応が楽しみだ。

G i l l yさん大丈夫かなー 確かに下一ケタ0の階層はボス部屋となっていて階段を上った先の何も無い小部屋とボスのいる大部屋があるだけだ。10Fと20Fはそうだった。攻略サイトに載っている分では30Fも同様らしい。

と、言うことは50階も同様って言うのも可能性として十分。ボスの隣を上手くすり抜けて宝を取るだけだと考えれば、これまでのダンジョン攻略より遥かに簡単だろう。そうなると完全にボスのワイバーンさんが涙目だな。まともに戦ったらどれだけ苦戦することやら。

G i l l y「終わったぞ、さあ帰ろう」

シエル「お疲れ様です。ってあれ？ 何で今来た道を？」

G i l l y「何言ってるんだよ。帰るまでがクエストだぞ」

シエル「だってボス倒したら、自動的に町まで…」

G i l l y「倒していないからな」

…………「冗談きついですが、兄貴。」

7話　なんだかすごいことになっちゃったぞ

サンマイト遺跡40F。

シエル「死ぬかと思いました…」

Gilly「お疲れさん！　赤石を遺跡の前の兵士に渡せばクエスト達成だ！」

煙幕花火の数はギリギリだった。むしろちよつと足りなかった。足りない部分は勇気で補い、俺達は今来た道を戻り計20階を走破したのだ。ボス戦回避できるからシーフって楽だな、なんて少しでも思っでごめんなさい。非常に心臓に悪い1時間でした。

シエル「道を戻るとか最初に言ってくださいよ…」

Gilly「言わなかったっけ？」

シエル「ログ見てください」

Gilly「まあまあ結果オーライと言うことで」

俺達は40Fからショートカットを使い、遺跡の入り口まで難なく戻る。「ミユールの赤石」を兵士に手渡すとクエスト達成の文字が俺の画面にも流れる。

何より経験値ボーナスがすごい。ノーダメージボーナス、ノーミスポーナス…　こんなの取れるの最初のダンジョンくらいだよ。な

んだよノーキルボーナスって、聞いたこと無いぞ。誰も気づかないし、やろうとしないっつーの。

…うわぁ、レベルが22まで上がってやんの。ナンテコッタイ。新しいクエストもいくつか開放。けどしばらくはお世話にならないそうさ。

G i l l y「流石にパーフェクトスニーキングボーナスはきつかったか。これからまた戦略を練り直さんとなぁ」

要は魔物に一匹も気づかれずにつて奴ですか。でもこの人だったらやりかねない。今回も俺が大分足引っ張っていた感じだし。

G i l l y「ほれ、報酬の半分だ。煙幕花火の分をしょっぴかせて貰ってるけどな」

『G i l l yはシエルに20万Gを渡した！』

半端ないな。今までの総獲得Gを余裕でぶっちぎってるし。確かクエスト報酬は50万Gだった気がするけど、俺は実際この人に便乗しただけだし、これだけ貰えるだけでも僥倖だ。

一度限りのクエストも、クリアしていないメンバーがいればそれに便乗して参加することが出来る。まあ高いレベルになるとみんなでクリアしないと進めないから、新しく始めた人用の救済システムだと思っていたのだが。この分だと、これからも遺跡40〜50階層にはお世話になるだろうな。結構先の話になるけど。

G i l l y「じゃあ、俺はこの辺で。また面白そうなクエスト見つけたら誘つよ」

シエル「よろしく願いします！　今日は本当にお世話になりました！」

Giilly「おう、煙幕花火の事は内緒にしてくれよ。んじゃまたな」

そう言つて彼はそのままログアウトする。俺はしばらくの間、キ―ボードから手を離し心地よい脱力感に身を委ねていた。…あ、さっきの人たちだ。

Harida「ドラゴナイトは計算外だったな」

レーベン「ボスだけいきなり火属性とか、製作者ドSすぎる…」

夕風「途中までは状態異常攻撃の敵がメインだったんでしょ？」

櫛坊主「ドラゴナイトは魔法がほとんど聞かねえんだよ。ファイターの数がいないと無理」

レーベン「雑魚にはソーサラー必須だけど、ボス戦になると途端に空気になったな」

れんちえふ「つかアーチャーも空気じゃね？」

櫛坊主「いや雑魚戦には間違いなくいるだろ」

夕風「今から攻略サイトに書きこんできますノシ」

櫛坊主「編集員乙」

レーベン「先駆者は大変だぜまったく」

Harida「40Fの壁は厚いな… いよいよ10人協力プレイを開放する時が来たか…」

ぱる「ADSLの俺に酷な事言わないでくれ…（´・・・´）」

…ほんと、凄いことやっちゃたんだ俺ら。たかがゲームの世界だって？ 現実に生きていてもこんな充実感なかなえよ。

とにかく今日は疲れた。夜中3時半か… 目も痛いしもう寝よう。

俺はログアウトしてパソコンの電源を落としそのまま眠りにつく。

あ、歯磨かなきゃ… いいや、面倒くさい。

とにかく平和な就寝だった。

8話 そうついことに興味はなかったんだけど

8月下旬。

世間では小中学生が夏休みの宿題の処理に追われひーこらしているというのに、俺は大学の長い長い夏休みを満喫していた。

他者からの目なんて気にしません！ 半ニート生活最高！

一応大学には毎日通っている。

学食と日中の暑さを乗り切るために図書館のクーラーを利用するためだ。

授業の無い日の学食は静かで涼しくて、下手な飲食店よりも居心地がいい。ちよくちよくサークルの集まりかなんかで来ているリア充グループを見かけるが、そんなの気にならないし、向こうも特に気にしないだろう。

俺は安くてそれなりに栄養バランスの整った定食をのんびりと食べていた。量は少し少ないけど、運動も特にしていないしちようどいいくらいだろう。数か月の間、一日これ二食で過ごしたら4キロも痩せた。体調もいいし、食生活って大事だな。

「よう高瀬、盆前以来だな」

目の前の席に座って来たのは、同じ学科の伊藤だ。俺にだってリア友くらいいる。洒落っ気のない髪型に服装、顔もふつー。つまりは俺と同じ人種だ。違うのはこいつの方が視力がいいということぐらいだ。眼鏡なしで日常を過ごせるなんて羨ましい限りだぜ。

それと高瀬つてのは俺の名前。高瀬悠一。19歳。それ以外に説明することが無い。

「夏休み何やってるー？」

「げーむ。ねとげ」

「つくづく俺とお前は同類だな、高瀬」

似た者同士、考えてることは同じってことですかい。伊藤はさらにやけて、テーブル越しに顔を少し近づける。

「なあ、『アカシツクドミネーター』ってゲーム知ってるか？」

「今やってる」

「さすがだな。…もしかして、お前も賞金狙ってたとかする？」

「賞金？ 初耳だな」

出かける前にも一応公式サイトとか攻略掲示板とかチェックして来たんだけどな。そんな事は露にも… 今朝は、昨日Pon太さんが言っていた 版からのプレイヤーに与えられる特典って話題で持ち切りになっていたくらいだ。

「ちょうど今日の正午に出た情報だ。 版のプレイヤー募集は今日の夕方5時で打ち切り。 んで、本稼働に先駆けて明日から2週間の間に現プレイヤー達に特殊クエストが与えられるらしい。 その達成者に…」

「賞金ね… どうせゲーム内でだろ？」

「リアルマネーらしいぜ」

「ほんとかよ。どこ情報？」

「信用できる筋つてしか書かれてないから、確かじゃないんだけどさ。さつきから掲示板で滅茶苦茶盛り上がってるぜ。今サーバーが重すぎてまともにプレイできないから、学食来たところなんだ」

うつそ臭いなあ。それにみんな釣られ過ぎ。日本人って本当にこういうのに弱いよなあ。普通に楽しんでプレイしている人たちに迷惑かけないでほしいぜまったく。

「なんか最後に見た時は登録者が3万越え行きそうって言われてたぜ」

「今夜は入るの止めようかな… お前は狙ってるの？ 賞金」

「もちろん、折角のチャンスだからな。言っとくけど賞金目当てで始めたわけじゃないぜ？ 始めたの5日前だし。誰だって好きなことで金貰えるなら狙ってみたくなっちゃうだろ？」

「俺はのんびりやらせてもらうよ。上には上がいるんだし。無駄な消耗はしたくないよ」

昨日のGillyさんのことを思い出していた。あの人は狙ってくんだろうか、賞金とやらを。実際どんなクエストが出るかわからないけど、あれだけ上手いプレイヤーを見てしまったんだ。上の世界を除いてしまったんだ。俺の様な一般人にはとても届くレベルじゃないよ。

「何にせよ詳細は明日の午後発表だからな。暇だったら協力してくれよ」

「まあクエストの内容次第だな」

「さんきゅ！ あ、それじゃCNキャラクターネーム教えてくれ」

「シエルだ。カタカナ3文字。職業はソーサラーでレベルは今んとこ22」

「シエルだな。俺のCNは如月 由真だ。漢字は検索してすぐわかる。職業はアーチャー。レベル25だ。見つけられた声かけてくれよ！」

「おう、んじゃ後で」

そう言うのと、伊藤はとっとと席を立ち食器を下げに行く。…あれ？ 俺より後に食い始めたんじゃなかったっけ… まあいいか。

如月 由真ね… はて、どっかで聞いたことある名前だな。

その後、家に帰ってその名前を検索してみる。

…今断然注目！ の大型新人AV女優の名前だった。おまけに年が一緒だったのが、余計に俺を複雑な気分にした。ネットの世界とはいえ、もう少し自重した方がいいと思うよ、伊藤くん。

8話 そういつことに興味はなかったんだけど（後書き）

そろそろ簡単な登場人物のまとめでも作ります

9話 何となく怖かったんです

結局、昨日はロクにプレイできなかった。

公式発表ではないけど、掲示板での話によるとプレイヤー3万越えは確実。本稼働前のゲームにしては異常な盛り上がりを見せていると、他所でも話題になっていた。

やはり話題の中心は賞金である。そもそも本当にリアルマネーなのか、賞金の額すらも明らかになっていないが、レベル1でもゲット出来るチャンスがあると公式での触れ込みに皆が釣られているようであった。

おかげで古参(つつても1週間程度だけど)プレイヤーは大迷惑。操作説明すらまともに読めないにわか共が集まって来て、掲示板も調べれば10秒以内で解かる程度の質問で埋め尽くされる。CNもメンヘラ臭いのばっかだし、今度みんなで実際に会って作戦会議開きませんか?なんて、明らかに出会い目的のプレイヤーも続出していた。

夜6時から12時にかけて、俺はサーバーに接続することすら出来なかった。俺と組んでる人たちも同様に苦労しているようであった。

YASUさんはその人の良さが災いして、初心者質問攻めにあつたあげく、素人パーティーに加えられ、システムを把握していない味方から何度も殺されそうになったらしい。

Pon太さんも「まさかこんなことになるなんて…」と困惑していた。先日からゲームを始めた彼の友人も所在なさそうにしていた。

彼が持っていた情報は「版プレイヤーには本稼働時に特典」という噂だけだったため、本当に賞金がつくなんて予想だになかったであろう。一応パーティーの一員として慰めの言葉はかけておいた。

まるちーさんはログインすら出来ていないようであった。あの人は単に仕事が忙しいということもあるのだろうか。

詳しくはわからないが、恐らくG i l l yさんも似たような状態だろう。

伊藤の奴は名前で検索かけたらヒットしたので、チャット登録して一声かけた。本当に一声。その後すぐ抜けた。

面白い物が廃れていくまでのサイクルというコピペを以前に見たことがあるが、まさにそれである。面白い物は多くの人に知られてはいけけない、下手に流行らせちゃいけけないのだ。人の波が娯楽を潰す。

…とまあ、昨晚はこんな事情で完全にやる気が失せてしまい。早々に床についた。それにしても如月由真ちゃんって中々可愛いな。今後ともお世話になるかもしれない。

そして翌日の正午過ぎ。

いつものように学食で一人飯を食っていると、昨日と同じく伊藤が声をかけて来た。その顔はなんというか、もう9月近いというのに未だに残る残暑にやられたんですか、と言いたくなるくらいに青ざめている気がした。理由は解かるけど。

「よ」

「ん」

「見た？」

「見た」

「どう思う？」

「嘘臭い、と言いたところだが、ああも発表して嘘でしたーじゃ済まされないだろうしな。本当… なんじゃねーの？」

「にしても、なんだよ『賞金一千万円』って…」

正直俺もディスプレイの前で10秒間固まった。公式サイトは激重だった。この話は様々なサイトに飛び火し、ネット上のニュースでも取り上げられた。無料のネットゲームでこれだけ破格の賞金がつくのは前代未聞なのだ。運営側のコメントは『わが社のゲームの知名度を上げるために企画しました』の一点張り。確かにゴールデントайムのテレビCMとかはそれくらい行くし、最近是对費用効果も怪しくなってきた。良くも悪くも有名になるということは企業側の戦略としては成功の部類に入るのだろう。

「賞金を受け取れるのって一人なのかなあ？」

「金額的にはそうだと思うけどな。みんなで山分けするにしても十分な金額だし…」

「だとしたらやっぱり俺はパス。変なトラブルが起きそうだからな」

俺の両親は割と放任的であつたが、金の恐ろしさについてはガキのころからしっかりと叩きこんでくれた。世の中金だけじゃない。でも金が原因で殺されたり、恨まれたり、苦しんだりしている奴は世の中に腐るほどいる。

現に今、楽して稼ぎたいと欲に塗れた人間達が大量に押し寄せてきているのだ。ギャンブルとは違い自分にはリスクは無いので、みな気軽に始めることだろう。そのほんの軽い気持ちで金もうけしようとする姿勢が最も危険なのだ。

「確かに、賞金ゲット出来たらみんなで焼き肉、なんてもんじゃないからな… お前がそう思うのも仕方ないか… ま、気が変わったらいつでも声かけてくれよ。うちのパーティーリーダーは信用できる人だと思うしさ」

「…ああ」

伊藤はそのまま飯も食わずに帰って行つた。俺はどこも見るでもなく、そのままゆっくりご飯を噛んでいた。

『金に関しては真っ当に稼げ』か。

バイトも何もせずにゲーム三昧の俺が偉そうに言える台詞じゃないけどな。

「ねーねー 杏子は今レベルいくつー？」

「私はやっと8いったところだよ。っていつかさーこのゲーム難しすぎない？」

「それなりのお金かかってるからねー みんな必死だよ」

「でもいくらなんでもシーフ弱すぎない？ 盗賊の癖に他の人からアイテム盗めないとか」

「レベル1でも取れる可能性があるらしいから別にダンジョン入らなくていいんじゃない？ やりこんでる人と友達になる方がよっぽど確実だよ」

「あつたまいい〜！ おっさんだったらちよつと誘惑したらコロつといくかもしれないし」

…頼むから止めてくれよ、素直にゲームを楽しませてくれ。

10話 単なる宝探しに思えたのですが

【スペシャルクエスト】

『この世界のどこかにある「A・R・クリスタル」を探し出せ!』

(攻略のヒント)

A・R・クリスタルはダンジョンの中にあるとは限らないぞ!

君の目と足と耳、そして直感… 持てる感覚を全て使ってこの世界を探しまわるのだ!

「A・R・クリスタル、ねえ…」

もう夜中の10時だというのに相変わらず人が多すぎてログインが出来ない。参加人数増やすんだったら、もう少しサーバー増強しとけよ運営。俺が今見ているクエストの画面は他のプレイヤーがキヤプチャーして別のサイトに上げたものだ。

攻略、雑談掲示板の方も満員御礼。いい加減、金目当ての新参と、本当にゲームを楽しんでいる側の古参用に分けようぜ、という声が上がリ、スレッド消費も落ち着いてきたほうだ。だが本当にリアル

マネーが、しかも1000万円の大金が入るかもあって古参スレの方もこのスペシャルクエストの話題で沸騰している。

…実を言うと、俺もこのスペシャルクエストに全く興味が無いわけではない。ただ、賞金目当てで瞳をぎらつかせているような連中と関わりたくないだけだ。運良くこのA・R・クリスタルとやらを見つけたらそりゃ飛んで喜ぶだろうよ。賞金もありがたく頂戴する。まず無いと思うけどさ。

宝探しをさせるにしても、せめてもう少し謎解き要素があれば楽しめるんだろうけどな。生憎解けるように出来ている謎が無い。推理の余地が一切見当たらないのだ。全てがアバウト。

「レベル1でも入手出来る」「ダンジョンの中にあるとは限らない」「プレイヤーの多くはこの言葉が手掛かりにならないかと必死に考えている。だが俺に言わせればこんなのはヒントになんてならない、そう断言できる。」

後はA・R・クリスタルという名前くらいか。でもタイトルのA・R・って「アカシックレコード」の略だよな？ 掲示板でもほとんどの人がそう言っているし。因果律云々とかいかにも厨二病患者が好みそうな単語だから、作り手もそんなに深く考えずに、客寄せの言葉としてつけただけだと思っていたが…

「あゝ もどかしい」

パソコンの前から離れ、俺は冷蔵庫の中の麦茶を取り出して飲む。ログインまでの時間をクエストの情報収集と謎解きに使おうと思っていたのだが。この様子ではどうにもこうにも。つーかゲーム本編をやらせてくれ。

…つと電話、伊藤からか。

「もしもし？」

『おう高瀬、確かお前ソーサラーだったよな』

「そうだけど」

『ファイヤーウォールWつてもう覚えてる？』

「ああ、ついこの前覚えさせたけど」

『そうか！ 頼みがあるんだけどこれからうちのパーティーに来てくれないか？ ちょっとダンジョン攻略に付き合ってほしいんだ』

「クリスタル探してないんなら構わないけど… 今サーバーが重すぎてログイン出来ずにいるんだが」

『マジかー… あー とりあえず11時半に集合ってなってるから、その時までログイン出来ればいいからさ。出来なかったらまたメールでもくれないか？』

「ああ、わかった。人に空きが出るのを祈るのみだな」

…ふう。簡単に約束しちゃったけど、肝心の俺の方のパーティーのことを忘れてた。

まあ、今の状況ならみんなが集まることも難しいだろうし。YA SUさんもPon太さんも他にパーティー組んでるしな。大丈夫だ

る。え〜っと？ あと一時間ちよつとか。ログイン試してみるか。

『メインサーバーとの接続に失敗しました』

…コンビニで駄菓子でも買ってこよう。

10話 単なる宝探しに思えたのですが（後書き）

ファイヤーウォール^{ワイド}

：ソーサラーが習得できる範囲攻撃魔法。

初期のファイヤーウォールに比べて、効果範囲が倍近くに広がっている。

複数の敵にはもちろん、素早い敵、当り判定の小さな敵、ボス戦における足止めなど、用途が広く非常に便利な魔法。

ソーサラーなら絶対に覚えておくと、攻略掲示板にも書かれているほど。

11話 ゲームの中でも人脈は重要です

午後11時13分。ログイン成功。

他のパーティーメンバーの状況も見ただけど町にはいないようだしログイン出来てないか、ダンジョン行ってるかだな。ようし、心置きなく行きましょう。

In モナドの酒場

シエル（Lv.22 ソーサラー）「本当に私なんかが参加して大丈夫なんですか？」

xぼん（Lv.35 プリースト）「ちょうどソーサラーの人が来れなくなっただけでこっちとしても助かりますよ」

Aselia（Lv.38 ファイター）「ファイヤーウォールWがあればなんとかなる！（キリッ）」

…うん、想像以上にレベル高いぞこのパーティー。レベル30越えの人は少なくとも賞金目当てで入って来た新参ではないだろうし、寧ろかなりやり込んでる部類だ。このゲームはレベル10が一つの壁になっているからな。町で見かけるキャラの約3分の1以上がレベル10以下だ。伊藤くん、君をちょっと誤解していたようだ。反省します。

如月由真（Lv・32 アーチャー）「そう言えばサイトさんは？」

サイトさんという人はこのパーティーのリーダー格。既にレベル50に手が届きかけており、仲間内からモはや化け物通り越して廃人だと言われている。

×ぼん「ソロで挑むクエストあるから先にそっち行ってくるって言うたけど」

Aselia「相変わらずだな、あの人は」

サイトさん… また一人、規格外の人と組むわけか。とか何とか言ってるけど他3人も相当強い部類だぞ。さっきから何度も他の人から話しかけられている。

どうやら新参用の攻略掲示板でゲーム序盤に手っ取り早くレベルを上げるコツが議論されていたらしい。で、そこから伝播したのが、レベルの高い人をパーティーに迎える、もしくはくっついて行く、という方法だ。このゲームはダンジョン内であれば敵を倒した時の経験値はパーティー全員に与えられるので、始めから難易度の高いダンジョンで、レベル高い人に戦いを任せておけば苦せずして大量に経験値を稼ぐことが出来るわけだ。当然その話を聞いた金目当ての豚共が馬鹿の一つ覚えのように実践するわけ。

元々このゲームはその難易度の高さで序盤に投げ出す人も多く、このままの調整だとマニアにしかウケないぞと、稼働初期から言わ

れているくらいのバランスなのだ。しかも本稼働まで課金システムは実装されないらしい。そのことが初心者により自重出来なくさせた。

おかげさまで俺も彼らと合流するまでに何度もパーティーのお誘いを受けた。レベル20代も結構高い部類に入るからな。もちろん全無視。お断りします（AA略）

古参用掲示板には、少なくともクエスト期間終了までは、レベルが10以下、もしくは自分とレベルが10以上離れている奴から声をかけられても一切相手にするなとまで書かれている。全ての人がそうだとは思わないが、昼間のビッチ共のような奴らが多くいることは確かなのだ。

Aselia「あー さっきから新参どもがうぜー」

如月由真「これも金の力ですかねー」

シエル「これだけレベルが離れた人に対して、パーティに加えてくださいとか普通言えませんか… 話しかけるのも怖いのに…」

xぽん「禁止されている行為では無いですけど、本来は自重するはずですからね」

足手まといにしかならないって解かり切っているなら、そこに暗黙の了解が生まれる。本来は俺がこの輪の中にいるのもおこがましいくらいなのだ。ファイアーウォールWが使えるのと、メンバーの如月（＝伊藤）のリア友だからたまたま入れて貰っているのに。

なんでゲームの中でまで、人の醜さを見せつけられなければならないのだ。

サイト（Lv・50 ファイター）「おまたせー！」

xぽん「とうとう50の大台に乗っちゃったよこの人！」

A s e l i a「廃人乙！」

如月由真「早速行きましょう！ リア友のソーサラーも連れてきました！」

シエル「足引つ張るかもしれないけどよろしくお願いします！」

サイト「よろしく！」

久々のフルメンバーでのダンジョンだ。あれ？ 昨日出来なかっただけか？ まあいいや。G i l l yさんの時のような刺激に満ち溢れたものにはならないだろうけど、これはこれで十分に楽しいのだ。…そう言えばG i l l yさん、今何やってるかのなあ。

11話 ゲームの中でも人脈は重要です（後書き）

登場人物増えてきましたね…（汗）

次の次くらいに簡単なキャラまとめ作ります。

12話 その時既に始まっていたのです

「うーん、いいのかこれで？」

午前4時半。俺はシエルのステータスを見ながら妙な罪悪感に苛まれていた。

ただ今のレベル… 29。一体全体どうしてこうなった。5時間程度のプレイでレベルが7も上がるって… 先日のGillyさんと組んだ時以上だ。

まあ結論から言う俺は金魚の糞の如く高レベルのプレイヤーに付いて行ったのだ。そう、つい先程まであんなに嫌っていた金目当ての豚共と同じような行為を… いや、違う。これは不可抗力だ。他の人もノリノリだったじゃないか。誘って来たのは向こうからだ。うん、俺は違う。あんな奴らとは違う。

始めに、俺は伊藤^{シエル}(如月由真)、xぽんさん、Aseliaさん、そしてサイトさんの5人で、天上回廊というマップに挑んでいた。攻略掲示板によるとこの平均攻略レベルは40くらいだと書かれていたが、サイトさんの見事な采配と他のメンバー自身の圧倒的な強さによってあれよあれよという間にクリアしてしまった。

このダンジョンの難敵は空を飛びまわるグラービートル。そしてアロンスライムだ。アロンスライムは粘着液を飛ばし、それを浴びた者の動きを一定時間止める。それを避けたとしてもその粘着液が地面に張り付く。その上を通っても一定時間移動が出来なくなるのだ。

じゃあ、それを避けて上手く立ちまわればいいじゃん、と俺も最

初思ったが実際にその惨状を目の当たりにして反省した。無理、あんなの無理。

スライムちゃん多過ぎ、ハッスルし過ぎ、体液飛ばし過ぎ、そこに空中を自在に飛び回るグラービートルの大軍。一度でも粘着液に足を取られれば、グラービートルの容赦ないバックアタック（ダメージ1.5倍）の連打が待ち受けている。互いに単体ではそこまで強くないのだが、組み合わせるとハメ殺しされてしまうという、これまた鬼畜ステージなのだ。

でもファイヤーウォールWがあれば別、攻略レベルが10ぐらい下がるらしい（サイトさん談）。粘着液を無効化し、空を飛ぶ敵の足止めにもなる。無理ゲーが一転してヌルゲーとなる瞬間を俺は目の当たりにした。でも数が多すぎて、全ての敵に使うためには結局レベル30台後半のSPが必要になるんだけど。しかし、そこはサイトさん。俺のために大量にSP回復アイテムを用意しておいてくれた。金額にして4000G。ありがてえ、ありがてえ。

そのボスですか？ 魔法全然効かないので俺は終始空気でました。ちゃんちゃん。

で、そこをクリアした時にはレベル26。これでもかなり上がった方だと思う。今日はこれで解散！ かと思ったら、サイトさんの方からもう一つ行つとく？ との提案が。

サイトさんの別の仲間が10人協力プレイの動画を取ってネットに上げたいらしく、その面子として来て欲しいとのことだ。伊藤の奴も初めて知ったらしく、結局俺達は深夜特有の妙なテンションでそのままホイホイと付いて行ってしまったのだ。

そして今に至る。

「うん… 仕方ない。みんな楽しんでたし、おーるおーけーさ」

みんなと解散した後、10分ほど俺は自分自身の正当化に時間を費やしていた。

いいのさ、これはちゃんとゲームそのものを楽しんだ結果なのだから。

「よし… 寝よ！」

外を見ると空が微妙に明るくなってきている。酷い生活リズムだなこりゃ。

でも、最近何だか凄く充実しているな。ゲームだけど。これも大学時代にしか出来ない事さ。そうだ、きっと。

受験の時と違って睡魔も心地よい。ゲームして飯食って寝る。最高の生活じゃないか。

そのまま、俺は夢の世界へと堕ちて行った。

…そう、この時はまだ、寝ることに何の心配もいらなかった。

12話 その時既に始まっていたのです（後書き）

そろそろ話が動き出します

【番外編】 一旦まとめようか（前書き）

これまでの内容をまとめてみました。

凄く長くなっちゃいましたが（汗）

読み飛ばしても構いませんし、初見の方はこれで大体内容が解かると思います。

【番外編】 一旦まとめようか

・アカシックドミネーター

【概要】

新作のMMORPG。現在は一定期間中に募集したプレイヤーのみでの 版が稼働している。

2Dグラフィックではあるが、その分操作性やレスポンスが良く、多彩なアクション性、深い戦略性を兼ね備えている。その代わりゲーム自体の難易度はかなり高めに設定されており、特に序盤は「これ何て死にゲー？」と思うこと請け合いである。ダンジョンやクエストもパーティーを組まないとクリア出来ないバランスであり、プレイヤー自身のコミュ力も必要とされる。

【職業について】

ゲーム開始時に職業を設定することが出来る。途中での変更は今のところ出来ない。

非常に豊富な種類の職業があるが、実際の所まともに運用できるのはファイター、アーチャー、ソーサラー、プリーストの4種のみ。それ以外の職業は戦闘においてまるで使い物にならず、まともにレベルを上げることすら出来ない。（後述のプレイヤー、Gillyのような例外もいるが）そのため 版のプレイヤーの9割以上は上記4種の職業のどれかである。

これに関しては恐らく本稼働版で調整（その他の職業のステ強化もしくは転職システム）が入ると予想されている。

【プレイにおいて】

プレイヤーは他のプレイヤーと自由にパーティーを組むことが出来る（もちろん相手の承諾が必要）。一度組んだ相手はフレンドリストに登録され、ログイン状況の確認、別マップからのチャットを

送ることもできる。クランなどはまだ実装されていない。

ダンジョン探索においては、最大10人まで協力プレイが可能：
なのだが、パソコンのスペックや回線速度の関係で、ラグも起こり易い。そのため大半のプレイヤーは4〜6人くらいでパーティを組んでいる。

【期間中の特殊クエスト】

版プレイヤーの募集締め切りと同時に発表された特殊クエスト。内容は、期間内に世界のどこかにあるイベントアイテム『A・R・クリスタル』を探し出すというものである。そしてそれを達成したプレイヤーには1000万円の賞金を与えられる。

この破格の賞金と、公式サイト側の「レベル1でも入手できる」といった触れ込みのおかげで、新規プレイヤーが激増。試験稼働ともいえる版にも関わらず、参加者は3万人を超えている（公式発表）。

このような前代見門のキャンペーンに対して様々な憶測と危惧が飛び交っているが、運営側からは「ゲームの宣伝のために行っている」としかコメントされていない。

【現在の状況は…】

賞金目当ての新規プレイヤーが大量参入して来たためか、ゲームサーバのほうに常時負荷がかかっており、人の多い時間帯（休日の日中、もしくは午後6〜12時）はログインすることすら難しい。またネットゲームに慣れていない輩も多く、全体的なプレイマナーの悪化も訴えられている。

課金アイテムがまだ実装されていないため、本稼働までは公平な条件でプレイすることが出来るが、それが逆にマナーの悪いプレイヤーをのさばらせているという意見もある。

また、稼働したてのゲームであるため、全容はほとんど明らかになっ
ておらず、攻略法やゲーム内のデータは有志達による攻略揭示

板や、個人攻略サイトなどでしか調べることが出来ない。

【登場人物】

アバター名がメインです。

・シエル（高瀬悠一）

…主人公。暇な大学生。ゲーム上ではソーサラー（ソーサレス）の少女。炎系魔法専門。

・Gilly

…シーフ（ ）。職業の特性に早くから気づき低レベル攻略をやつてのけるパネエ人。主人公の心の師。

・如月由真（伊藤弘樹）

…アーチャー（ ）。主人公の大学の友人。アバター名は売り出し中のAV女優から。

・サイト

…ファイター（ ）。現時点でトップクラスの实力を持ち、仲間内からも廃人と評される。如月のパーティーのリーダー的存在。

・YASU

…ファイター（ ）。主人公の初期パーティーのリーダー的存在。面倒見のいい人。

・ P o n 太

∴ ファイター（ ）。主人公の初期パーティーの一人。この他にリア友ともパーティーを組んでいる。

・ まるちー

∴ プリースト（ ）。主人公の初期パーティーの一人。最近は仕事に忙しいらしくあまりログイン出来ていない。

・ A s e l i a

∴ ファイター（ ）。如月のパーティーの一人。

・ x ぽん

∴ プリースト（ ）。如月のパーティーの一人。

・ にいにい

∴ ソーサラー（ ）。如月のパーティーの一人。

・ G i l l e y の知り合い（アバター名不詳）

∴ クリエイター（性別不明）。他にクリエイターを育てているプレイヤーがいないのをいいことに、合成のみでしか手に入らないアイテムを作っては高額で売りつけている人。性格はあまりよくなさそう。

・ 夕風

∴ プリースト（ ）。攻略サイトの管理人。

【番外編】 一旦まとめようか（後書き）

キャラ多いなあ…

その内増えたり減ったりします。

13話 嫌な予感はしていました

目を覚ますと見たことの無い大地が広がっていた。一体どうして？
あ！ 何か可愛い女の子が襲われている、助けなきゃ！ でもどうやって？

すると俺の手には激しい電流が宿っていた。これは… 使えるか？
くらえー！ どかーん！

「助けて頂きありがとうございます！ 今の雷は… まさかあなたが伝説の勇者様？」

勇者…？ 俺が…？

「私達の世界を救ってください！」

こんな美少女の頼みごとなら断れない。

現実世界に退屈していた俺の異世界での生活が始まった！

………

………

…

（なーんか最近多いなー こういうの）

この日は貫禄の昼12時起き。ビバ大学の夏休み。

今日は月曜だし、ゲームのほうも昼間の方が人いないけど、連日この暑さだとパソコンにもかなり負担がかかる。昼間にクーラーつけっぱは電気代がヤバいし。

そういうわけで、学食で飯を食った後、冷房の効いた図書館で持参のラノベ（古本屋で200円）を読む毎日。ラノベに飽きたなら、適当な雑誌や新聞でも読めばよい。ゲームはできないけどパソコンも好きに使える。流石は大学の図書館やで。節約はこうやってするんですよ奥さん。

そんなこんなで家に帰るのは午後6時半。晩飯も学食でとったの後はネットゲームだ。プレイ人数のピークは8時くらいだって掲示板にも書いてあったから今ならまだ……うし、ログイン成功。

ログイン早々チャットコールつと。おっ？ まるちーさんだ。

まるちー（Lv・17）「シエルさん、久しぶりー」

シエル（Lv・29）「と言っても3日程度ですけど。今日は早いですね」

まるちー「仕事が早く終わったんで。寧ろ最近夜中が重すぎない？」

シエル「例のクエストのせいか、8時から12時まではキツイですねー。早めか遅めにログインしないと、入ることすら出来ませんよ」

まるちーさんのレベルが全く上がってない所を見ると、ここ数日本当にログイン出来ていなかったようだ。いつも10時くらいにログインして1時間前には抜けてたもんな。社会人って大変だ。

まるちー「それにしても、ちょっと見ないうちにシエルさんはだいぶやりこんだようだねー やっぱ例の賞金とか狙ってる？」

シエル「私なんかじゃとても無理ですよ… 強い人にパーティー誘われたからレベルだけ上がったちゃいましたけど、上には果てしなくいるって思い知らされましたから」

まるち「確かにねー レベル1でも入手できるって公式に書いてあったけど、実際は時間と人脈がものを言うだろうしねー」

シエル「手がかりとかヒントとかも全く無いし。獲得者がいないとその内ヒント増えたりするんでしょうか？」

まるち「どうだろう。もしかしたら該当者なしで済ませるかもしれないし」

ああ、その手があったか。そもそも運営が「A・R・クリスタル」とやらを本当に置いてあるのかも怪しい。そりゃそうだよな。クエスト達成条件なんて運営の匙加減でどうにでもなるんだ。あゝあゝ、となると益々このキャンペーンがアホらしくなってきたぞ。

シエル「これはのんびりゲームを楽しんだ者勝ちかもしれませんね」

まるち「そうだね。ゲームは無料だし、宝くじ感覚で一攫千金を夢見ている人が多いけど、消費する手間と時間は決して只じゃないよ。そう考えると宝くじの方がまだマシさ」

社会人が言うとなんか説得力あるよなあ。時間を大量に浪費して存在すらしない可能性のある宝を探すよりも、普通に働いてその分だけ金を稼いだほうがよっぽど効率がいい。人間やっぱ地道に行かんとな。

YASU(Lv・19)「二人ともちょうどいいところに!」

Pon太(Lv・22)「いいタイミングで4人揃いましたね」

まるち「今日はついてるな。今からどこか行ったりする?」

YASU「二人がいなかったら他の方を誘おうとしていたんです」

Pon太「でもこんな早い時間に揃うなんて珍しいですね。前回から色々ありましたから」

シエル「やっぱりこの4人が一番落ち着きますね」

しかしレベルに関しては俺が完全に浮いてしまっているな。

この後4時間程、4人で(少なくとも俺は)まったりとダンジョン攻略を楽しんだ。流石に高いレベルに質の高い装備があるから戦闘が余裕過ぎたが、そんなのは置いとこう。仲いい人とやるのもゲームの楽しみの一つだ。しかも、ついに俺もレベル30の大台にいつてしまったぞ。何だか悪いなあ。

11時頃にまるちさんが明日も早いからとログアウト。パーティーも今日はこの辺で、と解散した。本稼働まではしばらくこんな調子だろうから、次回は会えたら組みましようということに。

俺も今日は早めに切り上げるかな…その前に個人シヨップでも見て回ろうつと。

つと、またチャットコールか。最近知り合い増えたからなあ。いいことだけど。

しかもサイトさんからだ。

シエル「こんばんは。昨日はどうもお世話になりました」

サイト（Lv.51）「急にすまないね。ちょっと頼みがあるんだけど」

シエル「また何かクエストですか？」

サイト「いや、如月さんのことなんだけど。彼の連絡先とか知ってるかな？」

シエル「知ってますけど、どうかしましたか？」

サイト「珍しく彼がログインしてなかったんでさ。今日予定していたクエストだけど、明日の同じ時間に延期になったって、彼に伝えてくれないかな？」

ヘーそりや珍しい。まあアイツにはアイツの用事もあるのだろうし。しっかし、この人もメンバーのリア友にゲームの予定を伝えさせるなんて相当な入れ込みようだな。

シエル「構いませんよ、今から電話してもいいですし」

サイト「すまないね。彼個人の事情もあるし、ゲームに束縛するの

もどつかと思うけど」

一応自覚はあるんだ。しかし、伊藤（＝如月）の奴も随分と頼りにされているんだな。

サイト「ところでシエルさん。最近変わったことはなかった？」

シエル「どうしたんですか？ 急に」

サイト「無いならそれでいいんだけど」

シエル「はい、別に変な事は全然」

サイト「それならいいんだ。君も学生だろうけど、あまり体に無茶かけるなよ。俺も人のこと言えないけどさ」

シエル「サイトさんも大学生なんですか？」

サイト「一応な。じゃあ、俺はちょっと人待たせてるから。また今度」

シエル「はい、如月に伝えときますね」

サイトさんも学生なのか。まあこんな廃人プレイが出来るのは夏休み中の大学生か二ートくらいなもんだけどさ。さて、一応伊藤の奴に電話してみるか…

『ただ今電話に出ることが出来ません。御用件のある方は…』

寝てんのかな？　じゃあメールで送っとくか。

14話 一体何が起こったのやら（前書き）

今回はちょっとぴりえっちなシーンがあります。
（ゝ・）Vキヤ
ピ

14話 一体何が起こったのやら

「……さん。…エル…さん！」

…ん。若い男の声。誰だ？ 聞いたことのない声だし。

おう、体が何か揺さぶられている。それに頬のあたりにひんやりとした感触。

何だ俺、いつのまにか机の上で寝ていたのか？

「シエルさん！ 起きてくださいよ！」

ぼんやりとした視界の向こうには3人の人影。

…ってあれ？ ここ俺の部屋じゃないの？

「あ……！？ え……！？ ええっ！？」

「どうしたんですか？ シエルさん。まだ寝ぼけてるんですか？」

目の前には銀色の甲冑に身を包んだ若い男。誰…？ いや、見たことがある。

「あの…YASU…さん？」

「はい、どうしました？」

男は軽く笑いをこらえながらこちらを見ている。

…っていつか何でYASUさんのキャラが目の前にいるんだよ！？
いやいや待て、ということは…？

右手には犬の顔にふさふさの体毛の剣士。左手には法衣に身を包んだ男。

「Pon太さんに…まるちーさん？」

「はいはい」

「どうしちゃったんですか？ シエルさん？」

え…あ…な、何が何だか分からない。どうなってるんだ…？
おい、もしかして今の俺って。

「シエルさん。帽子踏んづけちゃってるよ」

「大丈夫ですか？ これから晶霊の洞窟に向かうってのに。顔でも洗ってきたら？」

「そ、そうします…」

足元にすり落ちていたのは魔導士の三角帽子。地面に立ってみて解かるが視点が妙に低い。むしろ、さっきから俺の声が違う。完全に女の子の声だ。

もしかして今の俺って… シエルになっているのか！？

何だよこの悪い夢は… と、とにかくまずは顔を… トイレどこだ… 寧ろここどこだ…

あーいや、見たことあるぞ。店の内装といい、このテーブルの配置といい、あの筋肉モリモリマツチヨマンのアッチ系のマスターといい… 良く来たことがある。

ここはモナドの酒場だ。ってことはゲームの世界？ 何この使い古された展開！？

「ちょっとお嬢ちゃん、そっちは男子トイレよ」

「！？ す、すみません…」

ボタン。

トイレの中は完全に外界と隔絶されたパーソナルスペース。ここで頭の中を整理しよう。

そう言えばゲームの中では女子トイレは入れなかったっけ。なんかここだけ妙に現代的なんだな、水洗式だし。普通に水道あるし。

…うん、鏡を見て確信した。今の俺は完全にシエルだ。こうして見るとやっぱり可愛いな。

お兄さまー だーいすき！ にゃんにゃん。キラッ

…やっとなる場合か。

とにかく一体何なんだこれは。いつの間にか俺がシエルと同化している。これは夢なのか？ とりあえず顔に冷水をぶっかけてやろう。

バシャバシャ……変化なし。

頬を思いっきりつねってやろう。

ぷにぷに、ふにふに。

幼女の頬ってこんなに柔らかいんだ。現実でやったら間違いく捕まるけどな。

「じゃねえええーっ!!?」

覚めないぞ、全然夢から覚めないぞ！ 下！ 下はどうなってる！?

： ああ、男の勲章が綺麗さっぱり無くなっております。つつつ
るてんだ！ うわーこれが女の子の割れ目？ すっげー こうな
ってんだ。ココにアレが入るんだ！ へー！

すっかりR-18な気分を満喫していた俺はドアのノックの音で
我に帰る。

「お嬢ちゃん？ 随分長いけど大丈夫？」

「あ、はい。大丈夫です！」

いかんいかんいかんいかん。夢だからって遊んでる場合じゃない。いやでも、覚めない夢は夢じゃないわけで… 単に俺がゲ

ームの世界にトリップしたと考えればそれで説明が付くわけで…

「付いてない！ 全然付いてない！！」

よし、ノリ突っ込み完了。私は冷静だ。とりあえずこれだけやって夢から覚めないんならどうしようもない。もう少しこの状況に身を任せるとうとう。

「シエルさん、もう目は覚めましたか？」

「あ、はい。もう大丈夫です。お騒がせしました」

いや、覚えてないんですけどね。とりあえずはあなた達に付いて行きます。

俺達4人は酒場を出る。外は思っていた通りゲームの中そのものの風景が広がっていた。ヨーロッパの古い町並みを思わせるレンガ造りの家。車一つ通っていないただっ広い通り。馬車や馬は通っているけど。そして、皆思い思いの装備に身を包んだ冒険者たち。

これは… とんでもないことになっちゃったぞ。

夢で終わって… くないのかな。

14話 一体何が起こったのやら（後書き）

はい、ここでまさかの異世界トリップ。

しかしR・15タグを付ける基準って何なんでしょうか。

15話 夢にしてはリアル過ぎませんか？

晶霊の洞窟、地下14F。

魔力が秘めれた岩石によって僅かに照らされる薄暗い洞窟に、住処を荒らす侵入者を排除しようと、モンスター達の異様な叫び声が木霊していた。

「シエルさん！ 先制攻撃で！」

「りよ、了解！ ファイヤーウォール！」

『ギャワァアーッ！！！！』

文字通り壁の如く立ち上がった火柱の列が、暗黒へと堕ちた妖精たちを焼き尽くす。その奥からはモンスターの第二陣、リザードマンの群れが迫って来る。

「よし、ここからは任せろ！」

YASUさんとPon太さんが前衛に飛び出し、無骨な剣と鎧で武装したリザードマン達と激しい斬り合いが始まる。味方が前に出ている時はファイヤーウォールは使えない。フレイムレーザーのスナイプで後方援護に勤めるとしよう。

…ここまで偉く自然な流れで進んだが、なーにやってんだろーな

俺。

これは夢だ。中々覚めない夢だ。だったら、なるようにしかならないだろう。俺は深く考えるのを止め、周りのノリに身を任せることにしたのだ。

右も左も解からない異世界に飛ばされたのならともかく、ここはゲームの中の世界だ。世界観も、知り合いの仲間も、自分の能力も良く知っている。今やっているのは「晶霊の洞窟に突如立ち込めた瘴気の謎を説明せよ」という依頼、つまりクエストだ。

基本はゲームと一緒だ。雑魚敵を倒しながら洞窟を進んで行き、ボスを倒せば終了。普段はパソコンの上でやってることを実際に体感している状態だと思えば、この異常な展開に慣れるのにそう時間はかからなかった。実際に体動かすから結構疲れるけどさ。魔法って奴も何度も撃っていると軽く息切れを起こす。

「何か新しく来たぞ！」

「いったつ…！ 吸血コウモリだ！」

前の二人が頑張ったおかげでリザードマンも粗方倒したが、今度はさらに騒ぎを聞きつけたのか吸血コウモリの群れ。ファイヤーウォールで一掃したいところだが、二人を巻き込むわけにもいかんしな。素早い空中の動きに翻弄されて、位置取りを考えるとどころじやなさそうだし。…こいつを使ってみますか。

俺はウィザードロッドを眼前に構え、軽く呼吸を整える。狙いは…広がっているけど、要は二人に当たらなければいい話だ。

「二人ともあんまし動かないでね！」

声が届いたかわからないが、とりあえず忠告。俺が念というか気

合というか、とにかくそんな感じの物を込めるとロッドの先の赤い宝石に火の粉が回転しながら収束していく。まるで綿菓子を作ってる気分になりながら、軽くロッドを回してゆく。次第にロッドの先端には真つ赤な綿飴というか、丸い棒キャンディーのような火の玉が形成されていく。

「フレイムレーザー…ラピッドッ！」

自転する火の球から削れるようにして閃光の筋が次々に飛び出す。コウモリ達も危険を察知して始めの何本かは交わしたようだが、幾重にも飛んでくる炎の矢に対して徐々に対応しきれなくなり、犠牲者が出始める。「口径」こそは小さいがその分貫通力は高い。炎の矢はコウモリたちの羽、体、脳天を撃ち抜き、さらにその後方にいる者も貫く。まるで機銃を掃射している気分。炎の綿飴がロッドから全てほかれた時には、コウモリの大半は地面へと墜落し、残った者も戦士たちの追撃を受けて息の根を止められていた。

「ふう…」

「うつひよ、すごいなシエル」

「おかげで助かりました」

しかしあれだけ撃つておいてなんだけど、コウモリ相手に機銃って普通に効率悪いよな。ファイヤーボールブラスト（簡単に言うと火の玉の雨）とかの方がああいいう相手にいいんだろうけど。あんましスキルポイント消費したくないんだよなあ。普段はファイヤーウオールで十分だし。

ソーサラーは習得することの出来る魔法の種類こそ豊富であれ、実際に使えるのはその一部だ。だから覚える魔法は出来るだけ無駄

の無い物を厳選していきたいところ。俺が炎系の魔法しか持つてないのもそのためだ。

まるちーさんの回復魔法でみんなの準備が整った所で、一際多い轟音が洞窟を包む。

奥の暗闇の中からぎろりと光る目玉が6つ。敵は3体…？ いや、1体…

ケルベロスって奴か！ なんかすごい禍々しいオーラ出てるし。

「…！ こいつがこの洞窟の瘴気の原因か！」

「みんな、とりあえず距離を…」

先程の反省から先にファイヤーウォールをかまそうと思った瞬間、自分の横にふわりと生温かい風が通る。あまりに一瞬の出来事だったので、視覚や痛覚が追いつかず現状を理解するのが僅かに遅れる。

そして遅れて来る衝撃。左手の感覚が無くなる。

視覚がようやく現状を捉える、それを見て混乱していた痛覚がまともに機能する。

（見なきゃ…よかった…？）

俺の左腕の上腕三頭筋辺りが、その、引きちぎられ。骨も、見えちゃったりして。

「え、あ、うあああつああー！ーッ！？」

やはりこれは夢。

夢であってほしいと全身全霊を込めて願った瞬間だった。

15話 夢にしてはリアル過ぎませんか？（後書き）

戦闘描写がもっとうまくなりたい（迫真）

16話 激流に身を任せるってレベルじゃ

もう既に痛いという単語すら口から出ない。人間は死ねるような激痛を味わっている時はただ叫ぶことしか出来ないということが身に染みて解かった。解かりたくも無かったけど！

俺はその場に膝から崩れ落ちていた。左肩付近の筋肉が半分くらい無くなっている。そこから血がもうドバドバ出てるけど、手で押さえても全く止まる気配がない。強く押さえたら押さえたで更なる激痛が俺を襲う。

「マルチー！ シエルを…！」

「うああっ！？」

次に悲鳴を上げたのは まるちーさんか？ くそ！ 一体何だつてんだ！？ おいファイター二人何とかしてください！ そんな所につ立つてる場合か！

「速い！？」

「後衛バックスの二人を狙ってくるなんて！ …伏せろ！」

伏せろって誰に対して！？ でもとりあえず俺も伏せます！

今度は後頭部をかすめるように風が切り、魔導士の帽子が飛ばされる。目の前に転げ落ちた帽子は唾の一部がパツクリと切れていた。顔を上げると前方5mくらいのところで、先程の禍々しい瘴気を放

つケルベロスが振り向いて、ドス黒い瞳をギラつかせながら、涎を垂らしてこちらを威嚇していた。向かって右の頭は音を鳴らしながら未だに赤黒い肉を噛んでいる。

まるちーさんは…？ 倒れているけど… 遠くからなので死んでいるのか気絶しているだけなのか解からない。そもそも…そんなの確認している余裕すら無い。

『グウウウウ！』

『ピチャ、クチャ…』

くそ、ケルベロスってこんなに素早いのかよ… 頭が…ボーっとしてくる… 出血のせいかな… 体に力が入らない…

すぐさま俺達のフロアに入ろうとファイター二人が横からケルベロスを斬りつけようとする。しかし剣は空を切るのみ。気づいた時には、全く正反対の方向まで距離を取られている。Pon太さんが俺の前に立ってカバーしてくれているみたいだが、YASUさん一人では奴を捉える事が出来ない。

あの速さでは剣や矢ではまともな有効打を与えることが出来ない。
だが、足止めに広範囲の魔法ファイヤーウォールを使おうとしても…

『ガアッ！』

再び側面から神速の如く飛びかかり、俺に襲いかかる。反射的にその場を跳びのいたが、今度は奴の鉤爪に脰脛の肉がバツサリと引き裂かれてしまい、着地のバランスが取れずに地面を転げ回る。畜

生！ これじゃあ立ち上がることも出来ない！

向こうとしてもソーサラーは天敵なのだろう。だから優先的に潰す。魔法を使わせる暇も与えてくれない。最初にソーサラーを潰すと味方はそいつのカバーにも回らなければならない。その分攻め手が限定されてしまうのだ。

こうなってしまうえば相手の完全に思惑通り。後はファイター達の動きに気を付けながら、その素早さを生かした一撃離脱の戦いに持ちこめばよいわけだ。

「こんな… 化け犬野郎に…」

人間4人が完全に手玉に取られるなんて。何か手は…

「この野郎！ ちょこまかと！」

YASUさんとPon太さんが必死に剣を振り回して相手を捉えようとするが、圧倒的なスピードに翻弄され全くカスリすらしない。ケルベロスは俺に動きが無いと見ると、ファイターの二人に狙いを絞って、その鋭い鉤爪と頑強な牙で攻撃を仕掛ける。フレイムレーザーではとても狙えない速さだし、何より二人に攻撃をしつつも3つの頭のどれかが常に俺の動きを見張っているようだ。変な素振りを見せようものならすぐにこちらに襲いかかって来るのである。完全にジリ貧の展開だ…

4人で挑んでも全滅なんてこのゲームの中では良くあったことだが、この夢なのかよく分からない世界では、実際に痛みを味わうことになる。死んだ後町に戻されて生き返ることが出来るとしても、死ぬまでに何をやられるかわかったもんじゃない。参ったしても向こうが手加減してくれそうにないし、体食われそうだし… という

かー々グロい。血生臭い。

何か無いか… 俺の魔法… わざとこっちを狙わせて近距離で叩きこむか？ フレイムレーザーならギリギリ間に合うかどうか。…これじゃあ本当にマンガだな。

ウィザードロッドはさつき落としたしこいつで仕留められるかどうか解からないが…。少なくともこの一発を外したら間違いなく次は即死だ。魔力を集中させた時点ですぐに相手は気づくであろう。

だから、頃合いを、タイミングを、ギリギリのところまで…

来るなよ… こっちに気づくなよ…！ 向こうの反応が最も遅れる体勢になる時を待つんだ。まだ二人に注意が行っているうちに…

ゲームの中だったらこのギリギリが一番楽しいはずんだけど…生憎俺にそんな性分は無かったようで。…今だ！

「フレイム…！」

銃を形作った右手の人差指に魔力が集中する。当然相手もこちらに気づき、恐ろしい速さで方向転換し、突撃して来る。動きは捉えられずとも最短で来るのなら直線を通る！

「レーザー！」

俺の指から赤い閃光が放たれ、本当に銃でも撃ったかのように反動で腕が跳ね上がる。

その鋭い軌跡の中に…生命の姿は無かった。

（よ、避けられた！？ どこ、に？）

俺の視界前方360°。に奴の姿は無い、ということとは…

「上だ！」

YASUさんの声。

上… 跳んだのか…！？ 俺を狙って、来る…なら。

「…ラピッドオツ！」

狙いを付けてる余裕なんてない。反動で上を向いたままの指に魔力を込めて撃ちまくる。僅かに悲鳴にも似た唸りが聞こえたと思つた瞬間、俺の目の前に蜂の巣にされた化け物が落ちて来る。胴体からモロに落ちたし、かなりの重傷を負わせたのだろう。

コウモリ相手には長時間の掃射のために魔力を集中させたけど、本来はこれが（フレイムレーザー）インファイトラピッドの正しい用途。チャージ時間が滅茶苦茶短いので、接近戦で非常に使える魔法だ。攻略サイトでもオススメされている。最初に撃つたのは威力が欲しかったから普通のレーザーだったんだけどさ。とっさの判断が間に合つて助かった。

『グ、ウウウ…！』

まだ生きているのか！…いや、二本の首は倒れたままだ。最後の一頭が何とかして一矢報いようと必死に体をばたつかせる。

「手こずらせやがって…」

俺の指から放たれた細い閃光が最後の一頭の脳天を貫く。三つ首

の化け物は今度こそ動かなくなり、それと同時に洞窟の中の重苦しい空気が消える。

魔物の瘴気から解放された洞窟は、本来の心地よい魔力の波動を取り戻していた。岩場がやりわりとした優しい光を放ち、俺達の戦いを労ってくれているようだ。

「…終わりましたね」

「シエルさんがいなかったらどうなっていたことが…」

ほんとだよ、全く。

…あれ？ 何か痛い。左腕が凄く痛い。そうだ、派手に噛みちぎられたんだっけ。

「いぎやああああー！ーっ！！」

戦いの終焉と共に脳内の興奮性伝達物質の分泌が終了。ちーん。むしろ空気読めよ俺の脳！

「マルチーさんは？」

「うーん、いたた… あれ？ みなさんご無事だったんですか？」

「早く治してええー！ 死ぬーっ！！」

「動くとますます出血が…！」

もう嫌だ！ 痛い！ 左腕が使い物にならなくなったらどうする気だ！

で？ 結局これって夢じゃないの？ 覚める気配が1ナノも無い

んですけど！

こっただけ腕を痛めて現実ではどんな状態になっているのかも逆に
気になるけどさ！

いや…本当に…ゲームの中の世界にトリップしてしまったのか…
？

17話 この時、始まりを知りました

回復魔法とやらは凄いものだ。現実世界ならすぐにでも病院に突っ込まれて緊急手術を行うような重症でも、ものの数分で治してみせた。そのあと洞窟の精霊さんがなんかお礼とか言ってきて無事クエスト終了。俺達はすっかり暗くなった夜の町に戻り解散した。

これから自分は一体どうなってしまうのか。ずっとこのまま魔法使いシエルとして生きなければならないのか。そんな不安に駆られつつ、俺は宿屋に入って床に付いた。

そして翌日。

「注文はー？」

「Bランチで……」

……

……

大学の学食なう。

……

……

もしかして 夢だった？

目が覚めた矢先に入って来たのはいつもの見慣れた天井。見慣れた光景。見慣れた部屋。布団、いつもの俺の顔。…いや、いいんだよ？ 人間ありのままの自分が一番さ！

もちろん自分の体には何の異常も無いし、夢の痕跡が落ちていたと言うことも一切無い。朝一番にゲームにログインしてみたが、シエルのステータスはそのままであった。4人で晶霊の洞窟をクリアしたなんてログも残っていない。

…とにかく、とてつもなく生々しい夢だった。ゲームの中の世界にトリップする夢など最近のラノベの読み過ぎであろうか。今度はなんか別の、もっと真面目な評論っぽい本とか買おうかなあ。

食堂の光景も相変わらずだ。12時ともなると、授業がある日は座る椅子も無いほどの大盛況ぶりだというのに、長期休暇中の現在は人もまばら。いやー相変わらず落ち着くわ。

ん？ あそこのテーブルに座っているのは同じクラスの…内山、だっけ？ 男4人に女子3人。体格もいいし髪型もチャラいし、リア充だなあ。他のは知らない顔だし、サークルの集まりだろうか。まあいいや、元々そんなに話すほど仲良くないし放つところ…って、何で近づいて来るんだよ。

「おい高瀬！ 聞いたか！？ 伊藤の話！」

今時の女子にいかにもウケそうなすつきりとしたクセの無い顔立ちなだけに、その表情が彼の感情をストレートに表している。何焦ってるんだろこいつ。

「伊藤って…あの伊藤？ あいつがどうかしたの？」

「死んだってさ… 今朝あいつの家の中から遺体で見つかったそう
だ…！」

.....

.....は？

いや、え？

「さつき伊藤と同じマンションに住んでいる矢野から連絡あつてさ、
これから学科のみんなにも回そうと思っていたんだけど…」

「いや、おい、伊藤が死んだって… 何で!？」

「詳しくは俺も知らねえよ。矢野からちよくちよくメール来てるけ
ど、とりあえず事件とかではないらしいみたいでさ」

「伊藤のマンションの場所わかるか!？」

俺は内山に詰め寄る。彼はえらく困惑しているようだが、普段は
クラスの中でも空気な存在の俺が、こんなに声を荒げているのだから
当然と言えば当然か。

「ど、どうしたんだよ… そんなに気になるのか？ まあ、お前は
伊藤と仲良さそうだったしな…」

「あ、いや、実は昨日あいつに電話したんだけど出なかったからさ……それで気になって……」

「そうか……それだったら、搬送先の病院に行って事情を聞いて来てくれないか？ 警察とかも向かったみたいだし。俺はクラスのみんなに連絡送ってからすぐに追いつくからさ」

そういえば内山の奴は学科のクラスの中でも委員長的存在であった。リア充でしかもまとめ役だなんて、いやリア充だからこそまとめ役なのだろうが。こういう時の彼の冷静な判断には舌を巻くばかりである。現場の方は矢野がいるしな。

「わかった。俺はそっちに行く。で、搬送先の病院は？」

胸騒ぎがしたのだ。サイトさんの妙な言葉といい、昨日の電話のことといい、そしてあの奇妙な夢の事といい。だけど、関連性はあってほしくなかった。病院に向かって自転車を全速力でこぎながら俺は、『この胸騒ぎは全て気のせいであってほしい』、そう願っていた。

.....

「脳梗塞……ですか？」

病院の窓口にはいた警察官に事情を説明し、俺達と一緒に医者の説明を聞いていた。

「詳しくは解剖しないと解からないでしょうが…病死ですね。外傷が一切見当たらなかったのでレントゲンとスキャンを取って見たんですが、ほらここの所が」

医師はレントゲン写真を見せて淡々と答える。頭部、脳の所に大きな黒い部分が出来ており、明らかにそれが死因っぽそうということが素人目にも解かる。

「あの、本人が死んでいた時はどんな状況だったんでしょうか？」

俺は警察官に尋ねる。

「マンションの管理人さんが家賃を払ってないとかで、今朝彼の部屋を尋ねたそうで、その時にはもう。部屋に争った形跡も無いし、遺体は薄布団を着たまま眠っているように死んでいたようだけど」

「…死んでからどれくらい経っているんですか？ 昨日そいつに電話したんですけど出なかったんで…」

「詳しい時間はまだ出せないけど、死後一日は確実に経っていますね」

医者は表情を変えることなく答えた。その後も俺は警察から色々話を聞かれたが、現場や遺体から考えて事件性は無いと判断された。遅れて内山を含めクラスメイトが何人かやって来たが、警察官が遺族や学校側への連絡はこちらでやっておくから、君たちはもう戻りなさいと言われ、ほどなく解散。

集まった人の中には女子もいた。伊藤も俺と同じくクラスではそこまで目立たない存在であったが、しばらくの間共に授業を受けていた人物が急死したとなるとやはり気になったりするのだろうか。

単に野次馬根性だったり…　ってこれじゃ俺が捻くれているだけか。

家に帰ってもゲームにログインする気は起きない。あいつが死んだばかりの時について理由もあるけど、それ以上に何か嫌な予感が俺の頭の中を漂い続けていたからだ。…でも、どの道今夜はサイトさんに事情を伝えるために入らなきゃいけないか…

何となく普段はほぼゲーム専用と化しているテレビを付けてみる。そのテレビゲームすら最近はやらないが。夕方の特に何の面白味のない地元のニュースをぼんやりと見ていた。

『まだまだ厳しい残暑が続いておりますが、この時期こそ体に注意してください。特に脱水症状から引き起こされる脳梗塞！　決してお年寄りだけの病気じゃありません！』

『先日は市内の20代の主婦と30代の男性が脳梗塞で死亡するという痛ましい事例も起きました。しかもそのどちらも朝、眠ったまま死んでいたというのです。専門家の意見によりますと、寝ている時の発汗は脱水状態を引き起こし易く…』

18話 徐々に異変が表れました

【クエスト】

『晶霊の洞窟に立ち込める瘴気の謎』

.....

.....

.....

(BOSS) ケルベロス

攻略法：このゲームではお約束の初見殺しのボス。動きが滅茶苦茶速くて、通常攻撃が非常に当て辛い。おまけにHPと防御力の低いキャラクターを優先的に狙ってくるため、ボス戦開始時にソーサラーが瞬殺なんて事態も珍しくない。実は移動には一定のパターンがあるようで下記の図を参考にして立ち回れば、あまり被害を受けずに勝利できる。

.....

本当に攻略サイトの管理人さん、それと先駆者たちには乙と云わざるを得ない。

一応このサイトの掲示板の方にもソーサラーのフレームレーザーピッドがケルベロス相手に結構使えましたよって書きこんでおう。

…違う。本題はそこじゃない。昨晚のあれが夢だったの言うのなら何故その中にこれが出て来たのか、ということだ。俺はこのページは見たことがない。始めからネタバレすると面白くないので、まだ挑戦していないダンジョンのボスが何だとか攻略法はどうだとかは元々全く見ていないのだ。

夢っていう奴は原則自分の頭の中にある物しか出てこないはずだ。たまりに、夢の中でまだ発売していない漫画の新作が登場したりもするが、そういうのは大抵読めないようになっていく。一度夢の中で無理やりページを開いてみたら中は真っ白だった、ということであらう憤慨したこともある。

じゃあ、あの夢は一体何だったんだ。

午後10時、ゲームにログイン。実は6時から1時間おきに入っては出てを繰り返していたのだが、いつ入ってもサイトさん、もしくはAseliaさんやxぽんさんがログインしていなかったのだ。とりあえず彼らには事情を伝えなければと思っていたが、こんな時に入っていないなんて…

不吉な予感が脳裏をよぎる。単なる思い込みかもしれないというのに。いや、普通に考えてそっちの可能性の方が高いというのに。伊藤はたまたま死んだだけ。その可能性は否定できない。寧ろゲームが死に関係しているなんて話よりよっぽど現実味を帯びているじゃないか。

はは、何考えているんだろ、俺。マンガの読み過ぎだ。

YASU「こんばんは。シエルさん」

シエル「こんばんは。それとすみません。今日はすぐ抜けないといけないんです」

YASU「何か用事ですか。まあ今日はみなさんも揃っていないようですし」

シエル「YASUさん。昨日何か変わったことはありませんでしたか？」

昨日と同じだ。俺はサイトさんと全く同じ質問をしていた。だってそうとしか聞けないじゃないか。ゲームの中に入った夢とか、アホ臭くて。

YASU「私は別に何も。変わったことといえば、今日になってサーバーが快適になったことくらいですね。8時に入ったのに軽い軽い」

シエル「そうですか。運営が対処してくれたんですね」

YASUさんには何も無いのか… いや、彼も言うのが恥ずかしいってだけで…

YASU「もしかして変わったことって例の掲示板での噂ですか？」

シエル「掲示板ってこのですか？ 私は攻略のやつしか見てない

んですけど」

YASU「昨日から変なスレッドが立っているんですよ。『このゲームはヤバい』とか、『ゲームのキャラクターになった夢を見た』とか」

俺は息を飲み込んで即座にゲーム掲示板の一覧を開く。だがそんなタイトルものは一切無い。あるのはいつもの新参、古参用の攻略、質問用スレ、適当な雑談スレ、職業ごとのスレ、キャラ萌え…

シエル「すみません。詳しいスレタイ教えてくれませんか？」

YASU「もう消されたのかな？ かなり荒れてましたからね」

シエル「そうですか。お騒がせしました」

YASU「シエルさんもそういうお話とか好きなんですか？」

シエル「友達がこんな噂があるって言うて来たから… 単なる荒らしとかならいいんです」

YASU「他の所のゲーム板とかでは随分このゲームが叩かれているみたいですからね。ありもしない大金で乞食共を釣っているとかで。その多くは登録が間に合わなくてプレイできない人たちみたいですが」

シエル「僻みで変なスレ立てまくって、荒らしているんですかね」

YASU「そういうところでしょうね」

「違う」

俺はディスプレイの前で呟く。書き込みこそしなかったが。

『ゲームのキャラクターになった夢を見た』

荒らすならもつと別の言い方があるだろうに。他にもいるんだ。おそらくサイトさん達も同じような目に…

単なる不吉な思い込みだと思っていたものがだんだん現実味を帯びてくる。ゲーム攻略掲示板は公式側公認として設立されている。向こうがこの事情を知ってしようがいまいが、ゲームそのもののマインナスになる発言をされるのであれば、即刻削除されるのは納得がいく。

だったら… もつと別の所だ。最大手の総合掲示板とかだったらどうだろうか。あそこならスレッドの数も半端ないし、削除人の目も行きわたり難いんじゃないだろうか。

俺はゲームを抜け、このゲームに関する情報を載せているありとあらゆる所を巡った。この言われも得ぬ不安を何とかして誰かと共有したいと言う衝動に駆られて。

18話 徐々に異変が表れました（後書き）

ネット用語とかあまり書かない方がいいんじゃないでしょうか。要望があつたら注釈入れます。

19話 ここでOPに繋がります(前書き)

本当は避けたかった説明回。でも仕方ないね。

19話 ここでOPに繋がります

「今日もお疲れー」

『かんぱーい!』

「…乾杯」

俺はネット上の様々な所を巡り、最終的に一つの地へ辿りついた。日本最大級の某電子掲示板の中でも秘境、一般人お断りの異界の地、その名も「オカルト板」。まともな神経をしている奴は見えてはいけないと散々外で言われてきただけに、そこに入るのにはちよっぴり勇気が必要だった。実際に入って数分ほど後悔の嵐、だがその中でようやく俺の探し求めていた言葉があった。

この「アカシックドミネーター」というゲームについての黒い噂。知らないうちにゲームの中の世界に入っていたとの文章。そこでの体験。もう出血しまくり、手足とか吹っ飛びまくり、二度とあんな体験はしたくない、など。

途中から元々の住民が面白がって、これは呪いだとか、安易にアカシックレコードとかいう単語を使ったからだとか、おめえこころ（頭）大丈夫か？ などと、茶々を入れる文章が続いていた。それから先は…まともな神経の持ち主には苦痛しか感じなかった。

やはり自分と同じ体験をした人物がいる。

仲間がいるかもしれないと知って一筋の希望を持った。だが、そ

ここから先は？ 自分と同じ目にあつた奴がいるとしてこれから何をすればいい？ コンタクトを取ろうにも匿名掲示板だし。

他のWebサイトでは「ゲームの評判を落とすたくて変な噂を流している連中がいる」「構ってちゃんの荒らしは無視の方向で」「むしろ賞金のライバル減らしじゃね？」「大体ゲームの中にトリックとか完全にガキの発想じゃん。俺だったらもっと上手い方法考えるわ」「最近ネットに消防、厨房増えすぎ、ネット利用の年齢制限をしる」などなど。全く取りつく瀬も無い。

結局夜中の3時まで粘つたが、サイトさん達は表れなかった。唯一話を通じそうな人たちとも会えず終いだつたのだ。俺も睡魔には勝てず若干の不安を抱きながら床に付いた。もちろん寝る前は念のために水分補給をしつかりと。

で、

「シエルさん… 何か浮かない顔してますねー」

「何か考えごと？」

「まあ… そんなところです」

「ご覧の有り様だよ！

やっぱり夢じゃねよこれ！ 夢かもしれないけどおかしいだろ絶対！

気がついたら再びこの世界にいて、またもやシエルになっていて、

そして例の如くパーティー仲間の3人に引つ張られてダンジョンへGO！　またもやお約束の如く手強いモンスターが表れて、最終的にはガーゴイルの群れ！　昨日と同じように至近距離からのフレイムレーザー狙ったんだけど、今回は間に合ったのか間に合っていないのか。いや、敵の脳天はふっ飛ばしましたよ？　でも俺を狙って来た奴の腕の勢いは止まらず、俺の手首に直撃、そのままポロリ。昨日に引き続き、俺は両手を吹っ飛ばされるという、現実世界ではなかなか滅多に無い体験をすることが出来ました。ちゃんちゃん。両手は今ではびったり元通り、回復魔法あればもう外科医いらなくね？　そんなこんなで、今日は早めに依頼が終わったので仲間と一緒にモナドの酒場で飲んでいるのだが…

「はは〜ん、さてはお前だけジューズだから拗ねてるな？　お前も飲んでみるか？」

YASUさんが赤ら顔で俺に酒を進めようとしてくる。完全にオヤジだ。確かにメンバーの中では俺は群を抜いて最年少だけどさ、肉体的には。こんなロリロリな少女の体じゃ、話す時に一々上を見上げないといけないし、運動能力も落ちてるし。高い所の物に手が届かないわ、そしてそんな俺の様子をニヤニヤしながら見つめる周囲の男どもの視線のキモいこと！　あと女言葉を使い続けられないのが地味に辛い。書き込むのと違ってどうしても素が出るもん。実際に女声だからいいけど、性同一性障害の人ってこんな感じなのかな。ちよっと甘く見てたわ。段々自分自身も気持ち悪くなってくる。

しかし2度この世界に来て見て、新たに気づいたことがいくつかある。正確には違和感を覚える所が何箇所がある。

まず気になるのは何故他のパーティーメンバーは俺の様に意識が

同化していないのか、ということ。実際しているけど単に言わないだけという可能性も捨てきれなくはないが。しかし、他の人のしゃべり方、ひいては性格が微妙に違うのだ。YASUさんはチャット上では礼儀正しく細かい気配りの出来る人だ、しかしこつちの世界ではこんな風に乗に対してオヤジ臭い絡みを見せたり、言葉使いも少し悪い。対してまるちーさんはチャット上では割とぶっきらぼうな話し方だけど、こつちの世界ではいかにも聖職者って感じの物腰丁寧な人だ。キャラになり切って中身の性格も変わる…ってことはないだろう。そもそもこのゲームのアバターに性格などの詳細な設定などない。

気になること2点目。世界観が全体的に妙に日本的。ゲーム画面上は表示されないが、料理はこちらの世界、というか日本人にあつた味付けだと思う。使っている材料もそこまで物珍しいと感じず何の違和感も無く食べることが出来る。ゲーム中では入れないトイレも水洗式。ファンタジーの世界なのに変なところで科学が発展している。

そして何よりも一番気になるのは、ゲームに比べて遥かにモブキヤラ、つまり一般人が多いこと。実際に人が多く住んで、町が出来ているという点に関してはこれが正しい姿なのだろうが、その多くが日本人の顔をしていると言うことであつた。最初来た時は夢だと決めつけていたから何とも思わなかったが、街並みはヨーロッパ風なのに住んでいるのは日本人だというのはどうにもおかしい。別に他のアジア系の人と混同しているわけではない。中国、韓国、モンゴル、インド、ベトナム、タイ…詳しく国籍まで言い当てることは出来ずとも「日本人以外の人」ということならば大体見分けることが出来る。町を歩いている人の大半はほぼ間違いない日本人だ。「ゲームで表示されるモブキャラ」は大抵欧米風味な顔だけに、妙な違和感を覚えずにはいられない。

（はあ… でも違和感を覚えたところで今のところはどうしようも無いんだよなあ…）

今ここで、ここはゲームの中の世界だ！ と声高に叫んだところで何になるだろう。自分と同じ境遇の人物が他にいるという可能性はどのくらいだ？ 下手したらこの世界でもキチイ扱いされてしまっただろうし。

（とりあえずは今日のクエストも無事に終わったし後は夢が覚めるのを待つばかりか… 昨日もそうだったし帰れないことはないだろう、多分）

俺はローストチキンを齧りながら柑橘系のジュースでぐいっと流し込む。…女の子だからすぐにお腹いっぱいになっちゃうよ。飯自体は美味しいのに、もったいない。

仲間達は酒が入って勝手に盛り上がったちゃてるし、適当に飯食いながら周囲の観察でもするか… 何か色々手掛かりが得られれば…

その時店の玄関の鐘が鳴り響き、新たな客の来店を告げる。酒場は繁盛しており客の出入りは引つ切り無しに起こっているため、一々そんなことを気にする客は誰一人としていない…が。

知っている顔だった。俺は思わず目を見開いて瞬きをした。

かつて会った時とは装備が多少変わっているが、その風貌は間違いなく彼であった。痩せ形の体格、バンダナで覆った頭、全身が身軽な装備で武器も腰の短刀らしき物しかない。あんな職業を選ぶ人はほとんどいない。

俺は久しぶりの再会の喜びと、この世界での遭遇による驚きも手

伝って思わず声を上げてしまった。

19話 ここでOPに繋がります(後書き)

兄貴が久しぶりの登場です。

20話 やっぱりじじいっ時に

「Gillyさん！」

酒場に入って「いらっしやいませ」より先に自分の名前を呼ばれたので、彼もすぐにこちらに気づいてくれた。

「ん…？ シエルか。久しぶりだな」

「この前はお世話になりました！」

「お前もかなりレベルを上げたようだな」

後ろでやり取りを見ていた仲間たちも、彼が気になったのかのそのそと近づいて来る。

「シーフとは…珍しいですね。あなたの話はシエルさんからも聞いてますけど」

「確かシエルと二人でサンマイト遺跡の50Fを走破したんだって？ そこまで強そうには見えないけど…」

酒も入っているPon太さんの少し失礼な物言いにも、彼は軽く笑って返した。

「そりゃそうだ。戦闘に関してはてんで駄目だし、正直言ってこの嬢ちゃんにも勝てる気はしない。あくまで俺は…泥棒だからな」

「堂々と言っね〜 この人〜」

謙遜無しに自分は弱いですって言うてるのに、何でこんなに格好いいんだろう。みんなも彼に興味を持ったようだが、G i l l e yさんはそれを拒むかの如く顔をカウンター席の方に向けると軽く方をすくめる。

「どうやら満員の様だな」

「あの… 良ければ私達と…」

「それには及ばない。軽くつまんでとっと帰るつもりだったからな」

G i l l e yさんは踵を返し入口の方に向かう。人（こんな美少女）の誘いをこうもあっさりと断ってしまうとは… 根っからの一匹狼なのだろうか。

「G i l l e yさん… 今も一人でダンジョンに挑んでるんですか？」

「ああ、この前はサンマイト遺跡の60Fまで行ったところだ」

それまで自分たちの話題で盛りがっていた他の客たちも、彼の言葉が聞こえたのか僅かにどよめき始める。「マジか？」「ありえないだろ」。他の冒険者たちもシーフに対して抱いている偏見、先入観を口にする。無理も無いけど。

「パーティーとかは？ 誰かと組まないんですか？」

「シーフはロクな戦力にならないって前にも言っただろ？ 悪いが

俺は自分のための力しか持っていないんだ」

相変わらずこの人は一人で無茶な冒険を続けているのか… ゲームの中だったらそれでもいいだろう。死んだって経験値とアイテムが減るくらいで何度も生き返ることが出来る。しかし今この世界では… 蘇生なんて出来るのか？ いや、出来たとしても、毎回モンスター達によつて惨い目に遭わされるかもしれないのに…

「Giilyさん、無茶はしないでください。こんなところで死んでしまったら何にもなりませんから」

自分でも訳の解からない気休めの言葉であつた。冒険者は無茶をしてナンボ、命を削つてナンボ、そんな空気がここに、この世界にはある。というよりゲームそのものの雰囲気がそうであつた。解かつてはいるが、氣遣わずにはいられない。

「ああ、そうするさ。お前も氣を付けろよ」

意外な返事。そう言つとGiilyさんは右手の人差し指で自分のこめかみの少し上あたりを2、3度突く。

「ココを、やられたくなかつたらな」

この時の俺はどんな形相だつたのだろうか、少なくとも周りの客はあんぐりと口を開けていたような氣がするけど。凄まじい勢いで魔女っ子が店を出ようとするシーフの男の腕を掴んだ。まるでスリでもやられたかの如く。確かに一体何なんだとは思うわな。

「どうした…？」

「G i l l yさん… 今、何て…!？」

「お前も勘付いているのか、シエル」

「じゃあG i l l yさんもがつ…!!」

すると彼はすぐに俺の口を押さえつけ、服の首根っこを掴む

「おい、女の子に何するんだ！」

「悪いな。少し借りていくぞ」

後ろから仲間達が、ひいては他の客が俺を助けようと（？）一斉に席を立つが、当の俺が必死に手を横に振り「大丈夫、大丈夫」との合図を伝える。そのまま俺は口を押さえつけられたまま彼に引きずられ、店の外まで出てからようやく解放される。

「ぷふあつ… ど、どうしたんですか？ G i l l yさん…」

「あまりこのことを周りの連中に知らせない方がいい」

「な、なんで…？」

「…町の外で話すでしょう」

俺達は酒場を離れ、人気の少ない町の郊外に向かう。ダンジョンまでの通り道なので人がいないわけでもないが、周りが身を隠す場所の無い更地なので話を人に聞かれることも無いだろう。俺達は適当な芝生の上に向き合うように座り、話を始めた。

21話 どこまで知ってるんですか？

「…で、シエル。お前はどこまで掴んでいる？」

先に尋ねて来たのはGillyさんであつた。俺は今知っている、少なくともおおよその確証が得られている事柄を彼に話した。

？ゲームの中の世界は夢幻^{ゆめまぼろし}…なのかもしれないが確実に存在し、自分達が何らかの原因で連れて来られ自分の作ったキャラクターと同化している。だが、全ての人がそうではないっぽい。

？この中に入るのは寝ている時？ 昼寝とかでも入れるのかは解からない。

？このゲームの中で怪我を負っても、現実世界には持ちこさない？
だが、死ぬとどうなるかは解からない。

？現実世界で目覚めると解放される？

？おそらくこのゲームが原因で現実に死んでいる人がいる。

「こんなところですかね… まだ確証が得られてないことばかりですが…」

「このゲームが原因で現実に人が死んでいる、というのはどうしてそう思った？」

俺は友人の伊藤の事について話した。年齢20にも満たないのに、朝眠ったまま脳梗塞で死んでいたこと。彼が死んだ日に、市内で似たような死に方をした人達（それも若者）が2人もいること。そして彼と組んでいた人たちが、前日にこの現象の存在をほのめかすようなことを尋ねて来たこと…など。この夢の内容といい、単なる偶然とは思えなかったのだ。

「なるほど…で？　こうなったのは何回目だ？　いつからお前もこんな風になった？」

「2回目です。1度目は単なる夢だと思っていたんですけど…流石に同じ夢を、記憶をそのまま引きついであってことになっちゃ…」

「と、いうことは昨日…月曜の夜に初めて入り、そして今、火曜日の夜に2回目のトリップ…ってわけか？」

「はい、そうです」

Gillyさんは軽く腕組みをして「ふむ」と考え込む。

「今のが何か？」

「実は俺がここに来たのは3回目だ。つまりは日曜の夜からだな。そして俺が調べた限りでは、この現象は日曜の夜から始まっている。お前はその時は…何も無かったんだよね？」

「…はい」

と、いうことは、昨日のサイトさんの発言もつじつまが合うな。この現象が日曜から始まったと言うのなら、彼らや伊藤もその日の

晩に同じ夢を見て… 翌日心配になって俺に尋ねて来たということだ。ゲームの世界に入ったなんて話、普通信用しないしな。

「となると、何で俺は日曜日ここに連れて来られなかったって話になりますね」

「シエル… お前男か？」

「あ？ え、いや、その。中身は…そうです」

「まあ、そんなことはどうでもいい。とにかくお前の話で大体の仮説は出来た」

あーあ、つい『俺』なんて一人称使ってしまった。長年の癖を直すのはやっぱり無理ですよ。性別的にも。いやいや、今はそんなことよりもG i l l yさんの仮説とやらだ。

「今の時点で俺が集めた情報を踏まえて、まず1つ。どうやらこの世界で死ぬと現実世界でも死ぬらしい。絶対、とは言えないがほぼ9割がたな」

「マジッすか…」

「他に取りこまれた奴らの話も盗み聞きしての結論だ。一目目はこの世界に取り込まれた連中の中でモンスターに殺された奴が翌日からログインもしなくなっただけらしい。翌日、この世界にも存在しなくなっている。おまけに月曜の朝から火曜にかけて脳梗塞による若者の死者が続出している。不自然なくらいにな」

確かにそれは絶対… とは言えないが真実味を帯びている。とい

うか他の所でも若い人が脳梗塞で死にまくっている時点ではほぼ限りなくクロに近いんじゃないのか。

「マスコミや警察は取り上げたりしないんですか？」

「事件性はないからな。どれもこれも朝眠ったまま… まあ現代人の不養生に対して注意喚起をする程度に留まるくらいだろう」

だよな。朝眠ったまま死ぬ、眠ってから死ぬということによって、死者の共通点がこのゲームのプレイヤーだと気づいてくれる可能性も期待できないし…。

「2つ目。この世界に取りこまれるには何らかの条件があるみたいだ」

「条件、ですか。ランダムって可能性は？」

「それも否定できない。だが、今まで俺が見た同じ境遇の奴らにはいくつか共通点がある。…シエル。お前はこのゲームを始めて何日だ？ それと今のレベルは？」

「11日目…ですね。レベルは30です」

「お前の友人の伊藤って奴は？」

「詳しい日数は解かりませんが、始めたのは俺より遅かったはず… プレイ時間は俺より長いと思いますけど。カウントされてないので何とも。レベルは最後、日曜日が終わった時点で見た時は35でした」

「…ここに取り込まれているのは全員高レベルのプレイヤーだ。俺が見た分では、レベルは今のところお前が最低だな。少なくとも30以上」

「れ、レベルですか？」

待てよ。確か日曜日の時点では俺はレベル29。しかし、月曜日には30に上がった。なるほど、これだとびったりだ。それだったらレベル30未満の俺の他の仲間が取り込まれていないことにも合点がいく。

「ってことはレベルが低いと、こっちには連れて来られない。死ぬ危険性がないってことなんですか？」

「これも確証こそ無いがな。だがもし、レベルの低い奴までこっちに来ていたらもっと派手に死人が出ているだろうよ」

このゲームのプレイヤー人数はおよそ3万人ちょい… 難易度はかなり高いし、全滅した経験の無いプレイヤーはまずいないだろう。ってことは、下手したらかなりの大惨事になるんじゃないかこれ！？

21話 どこまで知ってるんですか？（後書き）

推理回…というか会話回。

しかし順序踏もつとすると時間かかるな！

22話 俺が何か出来たりしない？

ゲームが原因で人が大量に死ぬ？　だが、世間や警察はそんな話誰も信じてはくれないであろう。当事者でない限りこんな漫画みたいな展開は…

「何とかしてこれを止めることは出来ないんですか？」

「……………」

Gilleyさんは何も答えない。目を瞑って何かを考えてはいるようだが。

「シエル、お前はこの現象はなぜ起きていると思う？」

「なぜって言われても…　何て答えればいいか…」

「この現象は自然に起こっている物なのか、それとも誰かが人為的に起こしている物なのか…　お前はどっちだと思う？」

止めるにしても原因を、というわけか。自然に起こるって、異世界にトリップする自然現象とかたまったもんじゃない。誰かが人為的に起こしている…　こっちの方が可能性は高くないか？　異世界召喚モノとか大概そうだし。漫画とは違うけどさ。

しかし、誰かが何かのために何らかの方法でこの現象を起こしている、となると色々つじつまが合う部分が出て来るぞ。レベル30以上でこの世界に連れて来られるとか、明らかに人間が調整したようなものだ。それに、この現象が始まったのは日曜の夜。日曜…　日曜って確か…

「賞金一千万円のスペシャルクエスト！　ってことは…！」

「そう考えるのが妥当、だよな」

偶然にしては出来過ぎてる。無料のネットゲームで一千万の賞金という胡散臭い話もそうだ。まさかこうなることを知っていて、というか最初からそれが目的で？

「ゲームの製作者が何かの理由で俺達をこっちに連れて来ているんですか！？」

「……………」

…あれ？　何で無言で考え込むんだGillyさん。結構筋の通った推理だと思ったんだけど。

「…確かに、その仮説は筋が通っているが」

「Gillyさんは違うと？」

「否定は出来ない。だが全て仮定で固めた意見だ。他の可能性もまだまだ捨てきれないってわけさ」

うーん、ゲーム製作者以外の人の可能性ねえ…　現時点では謎が多すぎるし、犯人を決め付けるのもどうかというわけか？　また別の第三者によって引き起こされた事態…

「だが、少なくとも他の奴らのほとんどはお前と同じ結論に至っている。さらには『A・R・クリスタル』とやらがこっちの世界に存

在するのかもしれないって話も出てるしな」

「確かにその可能性も！ … いや、それだと公式の『レベル1でもゲット出来る』なんて触れ込みが嘘になるな… でもその話も絶対ってわけでもないし…」

「とにかく現時点で結論付けるのは早すぎる。原因の根本を突き止めるにしても、もう少し情報が欲しいってわけさ。とりあえず一番重要なのは自分の身の安全を確保することだな」

Gillyさんの言う通りかもしれない。目標があやふやなのに下手に固定観念に囚われて動き回っても、かえって自分の身を危険に晒すだけだ。

身の安全の確保か。今出来ることといえば、こつちの世界に来た時はダンジョン探索を控えることぐらいだな。そして、レベル30以上でこつちに取り込まれるということは、仲間内にもしばらくゲームのプレイを止めるように言っておくべきか？ 理由は何て伝えようか…

「一応明日、一部の奴らが運営側にこのゲームを止めさせるように直談判するつもりらしい。出来ればの話だな」

「やっぱりそれは難しそうですか？」

「向こうがこの事態を知っていようがいまいが、まともに取り合うと思うか？」

「だよなあ。どちらにしてもゲームを止めるなんて出来っこないし… ん、止める？」

「Gillyさん。もしかしたら、このゲームを退会すれば全てが済む話じゃ!？」

「既に試している奴がいる。今はその結果待ちだ。どうも嫌な予感がするがな…」

取り返しのつかない行動をするにはまだ早い、か。俺なんかが考え付く対応策は全て取られているっばいな。

「とりあえず今は下手に動かない方がいい。周りの出方を見て、それから次の行動を取る。状況が状況だ。多少の犠牲は目を瞑るしかない…」

「他の人が危険な目にあっても見捨てるべき…なんですか？」

「周りだってお前の命を優先するとは限らんだろ。自分が生き残るために人と組むことはあっても、みんなで生き残るために危険になるのを承知で組んだりはするなっぺことさ。俺達は映画のヒーローじゃないんだ」

自分が絶対に生き残って勝利する主役ってわけじゃない…か。そりゃそうだな。Gillyさんの言ってることは正しい。おそらく彼も自分が生き残るために俺と組もうとしているわけだ。どっちかが死んでも仕方ない、両方生き残ればそれでよしってか。現実もそんなもんだよなあ。

「他の奴と組むのは構わないが、仲間が多すぎると生じるしがらみって奴もある。孤独から来る不安や善意に駆られるのはいいが、ほどほどにしとけよ」

そこまで言うとなG i l l yさんはその場を立ち上がった。

「俺はこれからもう少し情報を集めてみる。お前も何か解かったことがあれば知らせてくれ。また明日、ここで落ち合おう」

「了解です」

「……っと、言い忘れたがゲームは普段通りやっても大丈夫みたいだ。もちろん全滅してもなんともない。俺自身が試した」

「気をつけるのはこの世界にいるときだけでいいってことですね？」

「ああ。それとゲーム内の数値がこっちに反映されるみたいだな。起きている間に色々準備しておくといいだろう」

「……なるほど、わかりました。ありがとうございます」

「じゃあな」

G i l l yさんは後ろを向いたまま軽く手を上げると、そのまま町の方角へ立ち去って行った。流石はシーフ、もう姿が見えなくなっってしまった。

俺は帽子を被り直し、これからどうするかを考える。とりあえずは今のまま、まだ意識が取り込まれていないパーティーと組んでおくか。ダンジョン探索は仮病でも使って控えるとしよう。とにかく彼の言う通り、判断材料が整うまでは大人しくしておいたほうが良さそうだな。もう夜も遅いし、町に帰って宿に泊まろう。これで現実世界に戻れたら、帰る方法がある程度確立出来るしな。

しかし、G i l l yさん。あの冷静な判断力といい、現実では一

体何やってる人なんだろう。でもゲーマーなのは確かだしなあ。あ
まり考えないことにしよう、かな。

22話 俺が何か出来たりしない？（後書き）

会話が多いとレイアウトに悩むなあ…

23話 やれるだけのことはやっておかないと

「注文はー？」

「Bランチで」

いつもの学生食堂。大学の夏休みはまだまだ長い。

今回もなんとか無事に帰ってこれたな。ずっとゲームの中の世界に取り込まれるというわけではなくて一安心。だがあれが夢でないことは確定。毎晩あんな状態になるのかと思うと、夜寝るのが怖くなって仕方がない。かと言って周りに相談できる人もいないしなあ。

仲間が欲しくなる。同じ境遇の仲間が。

しかし、サイトさん達とは未だに会うことが出来ないし、YAS Uさん達パーティーのメンバーを巻き込むわけにもいかない。現状で頼れるのはGiilyyさんだけだ。今夜、彼が持つてくる情報に期待することしか出来ない。他力本願だけど。

逆に俺が今出来ることと言ったら、自分のキャラの強化と、仲間のプレイを止めさせることくらいだな。でも彼らには何て言えばよいのか。全く正反対のことだし。

「ねえ、聞きました？ 今朝…」

「あらあ、怖いわね…」

「また派閥内で争いが起こるのね… とつと政權変わった方がいいんじゃないかしら…」

「おい、食堂のおばちゃんたち。世間話は俺に飯をついでからにしてくれー

しかしなんだろう。派閥とか政權とか。政治の話？

「あつ、学生さん、ごめんなさい。待たせちゃって」

もう50代後半のベテランのおばちゃんが慌ててご飯と味噌汁をつぐ。笑顔交じりのため、反省の色があるのかはやや疑わしい。毎日通ってるし、すっかり顔見知りになってるせいもあるのだろう。

「何かあつたんですか？」

「あら、学生さん今朝のニュース見てないの？ 野口首相が意識不明の重体になってね、ついさっき亡くなったって」

……………！？

「就任してまだ一ヶ月も経ってないってのにねえ… この国はどうなるのかしら」

「え、あの…！ 死因とか解かりますか！？」

おばちゃんは何故そんなことを尋ねるのかと、不思議そうに俺を

見る。

「総理は何で亡くなったんだっけ？」

「心臓発作みたいよー？ ニュースによると」

「あ、そ、そうですか…」

いかんいかん。流石に総理大臣がネットゲームなんてやらんだろ
う。ちよつと過敏になり過ぎているようだ。総理の年も年だしなあ。
心臓発作なんて起こっても不思議じゃないし… うん。

「はい、おまたせ」

「あ、どうも」

「そうそう。最近は脳梗塞とかも流行ってるらしいわよ。しかも若い人に。あなたも気をつけなさいよ。水分補給はしっかりとね」

「はは… 気を付けます」

食堂のおばちゃんまでが知っているということは、もう既に結構な数が亡くなっているということか…？ ここ数日で若い人ばかりが朝寝たまま脳梗塞で死亡なんて、明らかに不可解だもんな。だが、そこからこのゲームのことに繋がるのかというと… 期待できない。

元々そこまで量の多くない定食の筈が、今日は中々喉を通らなかった。自分が死ぬかもしれない状況に身を置いているのだ。なんか病気とかと違って実感湧かないのが余計に怖い。これが全て夢であればいいのにも思う。

…これから親に電話しよう。

.....

.....

家までの帰り道、道端で新聞の号外が配られていた。『野口総理急逝！ 後任は井沢氏が後原氏が有力か？』という、でかでかとした見出しが目を引く。ついこの間まで、新総理は誰かとか散々話題になっていたというのに、決まった途端にこれだ。本当にこの国の政治は大丈夫か？ 国会とかまともに機能してんのかよ。いつもいつも権力争いのニュースばかりで、肝心の行政に関する話題はない頼むから今の景気何とかしてくれよ。それがあんならの仕事じゃないのか？ 国民の税金で食ってるんだからさ、頼むぜまったく。

って、今こんなこと考えてもそうしようもないか。まずは自分の命が最優先だ。

俺は号外の新聞をバッグに押し込め、家路へと急ぐ。

家へ帰るなり、即パソコンの電源をオン。そしてゲームにログイン。俺も俺で酷い生活してるよな。今となっては生き残るためだから仕方ないけどさ。

さて、まずは知り合いのログイン状況を確認。誰か… 誰かいな
いか…？

…いた！ xぽんさん！ よかった、無事だったんだ！ 早速チャットコールを送ろう。伊藤のことも伝えなきゃならないしな。

xぽん（Lv・39）「シエルさん！ ちょうどよかった。聞いたことがあるんだけど」

シエル（Lv・30）「如月の事ですね？」

xぽん「あいつは無事か？」

シエル「月曜の朝、亡くなりました。脑梗塞で」

xぽん「やつぱり駄目だったか…」

シエル「事情はもう尋ねる必要もないですね？」

xぽん「君もあのおかしな夢を？」

シエル「はい。サイトさん達は無事ですか？」

xぽん「ああ、サイトもAseliaも何とか生きている」

シエル「それはよかった」

xぽん「事情を知っているのなら話が早い。俺達に協力してくれないか？ 仲間多い方がいい」

互いに怒涛のチャットであったが、ここに来て俺の手が止まる。昨日のGillyさんの言葉を思い出したのだ。

仲間を作るのはいいが、それによって生じる弊害もある。まだ謎が多い段階では、誰かの犠牲が教訓になって自分が助かることもありうる…

…確かに、これも現実的な意見だ。けど、今ここで下手に断るとかえって疑いの目で見られるんじゃないだろうか。この人たちも日曜の夜からゲームの中の世界に入っているはずだ。人数が多い分、それだけ多くの情報を持っているだろうし。

シエル「もちろんです。今は少しでも情報が欲しいので」

×ぽん「ありがとう。それじゃ今夜、向こうの世界の宿屋『アートマー』に来てくれないか？ 俺達はずっとそこにいるから」

シエル「わかりました」

Giilyさんのことをこの人達に話すべきか悩む。非常に頼りになる人だが、あまり人と組みたがろうとしなさそうだしなあ。とりあえず今夜はまだ言わないでおくか。

Giilyさんと詳しい時間の約束をしていないのは失敗だったかな。でも向こうの時間の経過なんて解かないし。サイトさん達は宿にずっといるって言うてるし、先にそっちから行ってみよう。

仲間を作ることによって生まれるしがらみか…
あまりあつては
ほしくないけど…

23話 やれるだけのことはやっておかないと（後書き）

本作に出てくる政治家や団体は、実在する物とは一切関係ありません。

ええ、関係ありませんとも。

24話 手を組むべきだとは思いますが

「よし、今日はヤーウエの森に行きましょう！」

「「おー！」」

「あの… すみません。私はパスで…」

火に水を注ぐ発言だと言うことは重々に理解している。というか、ソーサラーの俺がいないとみんなが探索出来ないことも。だが仕方あるまい。己の命は何物にも代えがたい。

今日も気づけばモナドの酒場の前。しかしこの世界に来る毎にここに連れて来られるような。ゲーム内でもいつも待ち合わせに使っているせいだろうか？ まあいい。問題はこの仲間たちからどうやって抜け出すかだな。

「どうしたんだシエル。今日は行けないって」

「今日はちよつと気分が悪くて…」

THE・仮病。古典的な手段だが、一番手っ取り早い言い訳だ。気分が悪そーな顔を必死に形作ってみる。どうだ、こんな状態の女の子を危険な冒険には連れていけまい。

「風邪でも引いたんですか？ 軽い病気なら私が治しますよ」

空気読んでくれよまるちーさん。ていうか何？ プリーストって風邪とかも治せんのか？ ますます医者という存在が涙目じゃないか。

「いや… その… 回復魔法で治るものじゃないかな… なんて…」

俺が次なる手は、と困り込んでいると、YASUさんが何かに気づいたかのように手をポンと叩き、少しにやついた顔になる。おいおい、何だ？ 嫌な予感がするぞ。

「マルチー 多分あれだよ。あの日」

「あの日？」

「ああ、シエルさんもそんな年頃だしね」

隣で見ていたPon太さんまで、何か納得したかのように腕を組んでうんうんと頷く。

あの日？ あの日ってなんだ。何で申し訳なさそうな目で見るとだまるちーさん。そして、何で微笑ましい目で見るとYASUさんにPon太さん。

「女の子は大変だよなあ」

…ああ、あの日ですね！ 女の子の日！ その手があったか！ 女子って体育の時間の時にもやたら見学してたもんなあ。高校時代の話だけど、あの中には絶対わざとサボっている奴もいるだろと思ってたもんだ。…いかん、これ以上は女性の方から叩かれる。

「あの、だから今日は…！」

「解かったからそんな顔真っ赤にしくても」

してねえよ。つーかYASUさん微妙にキメエよ。女の子の視点に立って解かったが、こういう時の男の視線って本当に気持ち悪い。こんな風に見られていたとは。これから気を付けよう。

「とにかく今日は宿屋でゆっくり休みます…」

「お大事にー」

結果オーライ…か？ とりあえずは離脱成功。毎回ダンジョンに行く度に、手足とかふっ飛ばされてたら命がいくつあっても足りないっつーの。毎晩あんな目にあっていると、その内自分の中で慣れてきそうなのがもつと怖い。

今日はいいけど明日は何て言って抜けようか… いや、また明日考えよう。つと、Gillyさんとの約束もあるけど、味方にこっぴどい手前先にサイトさん達の所に向かうとしよう。

さて、俺はそこそこに急ぎつつ、宿屋『アートマー』へ。

現バージョンは試験版だということで、やたら部屋数の多い宿屋でしかないのだが、その内課金制でクラン用の個室としての役割を果たすようになるだろうと言われている。体力の即時回復に、クラン共有の大型倉庫などの便利機能が期待されている。

まあ、あくまでもプレイヤー達の予想だ。それに課金となると俺には縁が無い。

おっと、そっぴや部屋の番号知らないな。フロントに聞いてみよう。

「サイト様御一行ですか… 310号室にお泊りですね」

ゲーム上ではこの人、「宿屋アートマーへようこそ！ お泊まりは ゴールドになります（以下選択支）」くらいしか台詞無いのに。こつちの世界では充実した仕事生活を送ってそうだ。しかもゲームと違って、宿の中では多くのスタッフが働いている。何故か全員日本人顔。これも気になるところだなあ。

建物自体も木造と漆喰の造りが何とも言えないレトロな雰囲気を与えている。現実世界では隠れ家的宿（笑）とか銘打たれて宣伝されてそうだ。歩く度に床が少しきしんでいるような音も味があるし。地震大国の日本では難しい造りだ。

310号室：あつたあつた。3階は団体様用の客室で俺もあまり行ったことはない。利用するにしても個人用の2階の部屋だったしな。

「こんにちはー！ シエルですけどー！」

3度ノックして名前を告げると、中から鍵の開く音がする。ドアが開けられると、そこに立っていたのはサイトさんだった。3日も経っていないのに随分懐かしく感じる。

「よかった、話には聞いていたけど君も無事だったか」

「無事ってほどには… 何度か死にそうな目に会ったし。それに伊藤： 如月の奴だって」

「彼に関してはその… すまない。俺達がこの世界の事をあまり深く考えて無かったばかりに…」

俺としては互いの無事を喜ばうとするつもりだったが、サイトさんはかなり申し訳なさそうな表情をしている。この世界のこと… か。きっと伊藤の死に責任を感じているのかもしれない。だが、問題はこの状況なのだ。右も左も解からない初日に命を落としたとなればこの人達を責めるわけにもいかない。

「サイト、謝るにしても立ち話は何だろー？」

部屋の奥から男口調の女性の声が聞こえてくる。

「ああ、悪い。さ、とりあえずは中に…」

誘われるがままに俺は中に入る。この世界での頼れる仲間がいるという希望は、胸中に留めていたGillyさんの嗜めを忘れさせていた。

25話 それがベストと言うのなら

3階の部屋の内装は、いかにも欧風と表現出来るような木造建築様式となっている。正直2階の部屋を広くしたただけなのだが、やっぱり実際に入ってみると高級感溢れる造りのように感じる。広々とした部屋のリビングの一角には約1m四方の木製テーブルがあり、それを囲むようにソファが置かれている。俺はサイトさんに促され適当な席に座った。

部屋の中にいたのは顔見知りのサイトさん、xぼんさん、Aseliaさん。そして今回初対面となる、このパーティー本来のソーサリー役のにいにいさんだ。

「はいこれ。良く解かんないけど紅茶っぽい飲み物よ」

席に座るなり、にいにいさんが俺に茶を注いでくれる。同じ女性アバターのソーサリーではあるが、三角帽にぱっつんショートのかにも魔女っ子な感じの俺とは異なり、にいにいさんは赤髪ロングヘアーの大人びた女性の容姿をしている。好みは人によりけりだとは思うが。

「何にせよ、仲間が増えるといいもんだな。こっちも人手が欲しいしよ」

Aseliaさんが奥のベッドの方で、寝転びながら何やら本を読んでいる。おそらく俺と同じで中身は男なのだろうが、折角の青髪の美人女騎士のアバターが色々台無しだ。

「A s e l i aさん、一応体は女性なんですからその格好はちょっと…」

「ゲームの中なんだし気にするもんじゃねーだろ」

「サービスするのは結構ですけど、乱暴されても知りませんよ?」

A s e l i aさんの女性の体らしからぬ無防備な体勢に、xぼんさんとにいにいさんが苦言を呈す。そういえば、この体であんなことやこんなことも出来ちゃうのだろうか。いや、今の俺はいたいけな少女の体だ。つまりはやられる側。嫌だ、絶対に嫌だぞ。男にやられるなんて。童貞より先に処女を散らすなんてまっぴらごめんだ。…でもまあ、G行為くらいはいいかなあ。折角女の子の体になったんだし、やらないともつたいない気さえする。今度トイレとか風呂とか、一人の時にやれないだろうか…

「あの…シエルさんは、どっちなの? 男? 女?」

にいにいさんの問いに思わず紅茶っぽい飲み物(味はほぼ紅茶)を吹きだしそうになる。やっぱりそれ聞かれるのか… ゲーム内で体の性別はバラバラだとはいえ、中身がちゃんと意識持つてるからな…

「中の人は男です。何かすみません」

「ええー シエルさんも?」

「まあそんなところだろうと思ったけど。残念だったねー にいにいさん」

困ったように溜息をつくにいさんを尻目に、Aseliaさんはベットの上で笑う。

「結局本物の女は私だけか…」

「あ… いにいさんってリアルでも女性なんですか…」

あー そうなると確かに気の毒だ。女1人に男4人。これはちょっと不安になるかも。肉体的には女3人、男2人だけど。乱暴を働くにしても… 結構いいシチュエーションになるかもしれない。

「女性プレイヤー結構いるって聞いたんだけどなあ…」

「現実云々の話は抜きにしようよ。それよりもこれからの事を話しあわなきゃ…」

いいまとめだ、xぼんさん。プリーストは大体こんな感じなのか。そうそう、俺がここに来たのは自分の身を安全にするためと、少しでもこの世界に関する情報を得るためなのだ。途中で煩惱が混じったので、話が変な方向へ向かってしまった。

「それじゃあ、俺…あ…やっぱ俺の方から知ってることを話しますね。情報量はそっちの方が多いでしょうし」

「ああ、それは助かるよ」

もう中身は男って言っちゃったし、一人称も俺でいいや。

とりあえず俺は自分がこの世界について知っている限りの事を話す。昨日のGillyさんから聞いた仮説、俺自身の考えなどなど。ひとしきり話し終わった俺の目に飛び込んできたのは、皆が一様に

目を丸くして口をぽかんと開けている表情であつた。

「あ、あの… 一応これで以上ですけど… 何か…？」

「いや、その… 教えてあげられることあんましないなーって…」

にいにいさんが苦笑いしながら、お茶のお代わりを注いでくれる。
気を利かせてくれる人だ。アバターと相まって可愛い。現実世界ではどんな人なんだろう。

「こつちの世界に取り込まれる条件とかあまり考えてなかったな。
レベルか…」

「確かに、僕たちの他に取り込まれているのが確認出来た人たちは、
みんな古参の人たちでしたね」

「ああ、それにレベルが関係しているとなると、古参メンバーの中で
夕凧さんだけが取り込まれてないことも頷ける。確か彼はまだレベル
20台だったはず…」

おいおい。何だか話が予想外の方向に転がってないか？ こちら
が情報を貰うつもりだったのに。いいんだけどさ。

「シエルさん、これだけの情報は一人で集めたんですか？」

バスケとかやってそんな感じの爽やかな風貌をした、赤髪の青年
剣士アバターのサイトさんが真剣な目でこちらを見て来る。ゲーム
上だと気の抜けた感じの人だっただけに、そのギャップにやや戸惑
いそうになる。

「いや、他に俺の知り合いでこっちの世界に取り込まれた人がいて、情報の大半はその人から…」

「その人の名前は？」

「Gillyさんって人です。シーフの」

「Gilly？ 誰か知ってるか？」

皆一斉に首を横に振る。つーかマジかよ。

一応彼と知り合いになった経緯も皆に話したが、今度はまた違った雰囲気での話に聞き入っているようであった。

いや、何でみんなそんなに真剣なの？ もしかして話しちゃいけないことだったか？

「高レベルのシーフなんて聞いたことないぜ…」

「シーフってそんな使い方あるんだ…」

「シエルさん、今からじゃなくてもいいから彼に会うことは出来るかい？ ぜひ彼にも協力してほしいんだ」

…うわ、参ったなあ。

ソロプレイヤーを信条としてるっぽい人だとは思っていたが、ここまで知られていなかったとは。確かに知れば興味持つわな。他の人の口から聞けばなおさらだ。

今日会うことを話すべきだろうか？ 彼はあまり仲間を作りたくない感じだったけど…

俺の独断でみんなの仲間に入れるのはどうなのだろう。

迷う。

26話 仲間が増えちゃいるんだけど

「それはちょっと難しいです…」

しまった、ちょっと長く考えすぎたかな… かえってみんなの不信感を煽ってしまったかもしれない。

「どうしてだい？」

当然の如くサイトさんも食いつく。うん、当然の反応だな。

「彼はその、あまり人と組みたくなさそうな感じなんです。それに次はいつ会えるかも解かんないし」

「ふーん…？」

うわ、すつごい妙なというか、疑わしい顔をしてるよみんな。やっぱりG i l l yさんのことは言わない方が良かったか？

「いいんじゃないんですか？ それは個人の問題でしょうし。その内会えたら誘うことにしましょう」

×ぼんさんが話題を止める。つくづく場をまとめるのが上手い人だ。内心はどう思っているのか解からないが。他のみんなは軽く頷くだけであまり納得しているように見えない。

「ま… どこにいるのかも知らないなら仕方ないよな。少なくともシエルさんは協力してくれるんだろうし」

「はい。俺は是非とも」

俺が即答すると、周りの緊張が僅かに緩んだ気がした。今まで立ちっぱなしだったサイトさんもソファーに腰を下ろす。

「じゃあ、今度は今の俺達のことを話そうかな」

「お願いします」

にいにいさんが席を立ち今度はどこからか電気ポットを持って来て、他の二人にも茶を注いであげる。だから妙な所でテクノロジーが発達しているよな、この世界。ゲームの中だからそこは御都合主義： という事でいいのか？

「今の俺達の仲間の数だが、総勢で30人くらいってところだ。当然他にもこの世界に取り込まれている奴らはいらるだろうが、今のところ合流出来ているのはこれだけだ」

「30人ですか。多いような少ないような…」

「中には大勢で組むのを嫌って、それまでのパーティーだけで探索を続ける輩もいるからな」 そのGillyって人も大凡そんなクチだろう」

A seliaさん： 先程の俺への対応のフォローのつもりなのだろうか。

「でも、何でもみんなで協力しようとしなくていいのでしょうか。常に命の危険があるわけだし。単独や少人数での行動にはあまりメリットが

無いような気もするんですが…」

ここで自分自身の正直な疑問をぶつけてみることにする。その理由の一つはGieelyさんから聞いているが、彼らがそのことに対してどう思っているのかも少し気になったのだ。

「君もさっき言った通り、賞金一千万円の特殊クエスト…『A・R・クリスタル』がこの世界に存在していると思っている人たちが結構いるんだよ」

「それを狙うために？ たかだか一千万円じゃないですか。自分の命に比べたら…」

「私もそこまでして欲しいのかな…って思うけどね。でも賞金だけじゃなくてね、この世界を楽しんでいる人達がいるのも事実なのよ。だってほら、現実と違って色々凄い力を持つてるじゃない。冒険者ってだけでハクが付くから、異性だって口説き放題だし」

どうなんだろう。本当に楽しめるのかこの世界？ 女を口説くにしても死んだらどうにもなんないんだぞ。考え方があまりにも刹那的すぎやしないか。

「みんな現実から逃げたがってるんだよ。どっちか選べっていったら当然充実した方を選択するだろう？ 現実では自分の命を賭けて得られるものなんて、たかが知れているしね」

サイトさん、こっちに来てから言ってることが全体的に暗いよ…

でも、そう言われちゃうとな。俺はまだ大学の一年だからいいけど、進学や就職に失敗した人達とかは本当に毎日が辛そうだよなあ。

もちろん仕事している人たちは言うまでも無い。自分が享受する現状への不満、そして将来への見えない不安……現実社会では自分の辛苦からどれだけの対価が生まれるのだろうか。今の俺にはまだ解からない。

「言うなればこの集まった30人というのは、まだ現実というものに未練がある人達ってことです」

「そうなんだよなー 俺も……なんだよなあ」

×ぼんさんの例えは結構的を射ているのかもしれない。俺は今まで現実に絶望するほどの苦難を味わって来たわけじゃないしな。受験勉強もそんなに頑張ったつもりはない。逆に言えばそれだけ当たり障りのない、つまらない人生を送って来たということなんだけど。それとサイトさん。さっきから負のオーラ出しまくりだよ。大丈夫か？

「……サイトさんは置いといて、とにかく、この集まりで協力して何とかこの現象を食い止める方法を探しているんです」

「食い止めるって……何か方法があるんですか？」

「それがさっぱりだから今こうしてこの世界について調べているんだよ」

ああ、なるほど。Aseeliaさんがさっきから本を読んでいるのはそのためか。体勢はともかくとして。

「もちろん現実世界からの行動も色々試してみてるのよ。でも他の人に話しても信じてくれないし、直接運営に取り合っても相手にさ

れないし……」

「一度みんなで製作会社に乗り込んでゲームを中止させようって話もあったんだが、速攻で通報されて提案者が書類送検にあったしね。現実には証拠が存在しないから外部から働きかけるのがほぼ無理な状況なんだ」

だからゲームの中から何とか出来ないかと試みているわけか……しかし、そんなこと本当に可能なのだろうか？

「A・R・クリスタルさえ見つければ、こんなふざけた現象も止まるかもしれないって話も出ている。それでダンジョン探索に精を出す人たちも……」

「みなさんはどう思っているんですか？」

「確証の無い話に命は賭けられない……かな」

良く言えば慎重。悪く言えば臆病、か。でもまあ、当然だな。

「だから今はとにかく安全策を取っている。この世界に来たらダンジョンなどには向かわない。モンスターとの戦闘も出来るだけ避ける。情報収集も基本的に町中だ。ゲーム画面に比べると人は腐るほどいるからな。実際に中に入ってみるとこの世界もめちゃくちゃ広いし。少しでも人の手を借りたい状況だよ」

「となると、今はみんなで手分けして世界を回っている状況というわけですね？」

「そういうこと。その都度こちらの世界で全員が集まらなくてもい

いように、新しく発見したことがあったら、攻略サイトの専用掲示板に書き込んでいる。パスワード制のな」

ここでも掲示板か。しかもよりによって攻略サイトの。

「管理人の夕風さんを説得して専用の奴を作ってもらったんだ。他のソーシャルネットワーキングサービスのSNSじゃやり難くてな。警察沙汰にもなったから、どこから目を付けられているかわかんないし」

それが大勢の一般の人が利用するSNSは避けた理由か。個人で作ったWebサイトなら、監視の目も届かないだろうということか。

しかし、警察沙汰にまでなったのは初耳だった。こんな状況になったのだから何が何でもゲームを止めようとする気持ちは解かるが……焦って動いたせいで、その当人にとっては更に事態が悪くなってしまった良い事例だ。

こんな異常事態だからこそ、冷静な状況判断と慎重な行動を心がけないといけない。……こう考えられるのも犠牲者という名の先駆者がいるからなんだよな。昨日のGillyさんの発言を心で理解出来たが、同時に俺を後ろめたい気持ちにさせる。

26話 仲間が増えちゃいるんだけど(後書き)

少しずつ1話あたりの文字数が増えてくるというマジック。

27話 こんな仲間で大丈夫でしょうか

「掲示板のパスワードは半角で『yugiri』だ。これは絶対に現実世界、ゲーム画面上でも人に教えないでくれ。この世界の中でしか伝えてはいけない」

もう表向きには出せない話題だし、これは当然の措置だな。

この掲示板は新しい情報を投稿する場でもありながら、各人の生存報告も兼ねている。これは毎日絶対に行うこと。洒落にすらなっていない本当の意味の生存報告なのだ。書き込まなかったら死んだと見なされる。

「教えてあげられることはこれくらいだな。他に何か聞きたいことがある?」

「えっと… 皆さんはこれからどうするつもりですか?」

「まあ… 各々に分かれて町で情報収集かなあ。のんびりしたいなら、ここで寛いでいっていいけど」

「xぼんさんはやや決まりが悪い表情になる。つーか、いいのか? そんなゆるくしちゃって。さっきまでの真剣な雰囲気はどこへやら。」

「人に直接迷惑がかかるようなことをしなければ、何をしても特に咎めることはないよ。俺達にそんな権利も無いしね」

「はあ…」

と言うことは、別にやりたい放題やってもいいわけね。怠けちゃってもそこまで怒られないと。足を棒のようにして情報集めするのも個人の意思ってわけか。

迅速な問題解決のためには、統率力のあるリーダーとキッチリとした規則があつたほうが、効率はいい気がするけどなあ。この人達の考えもあるんだろうし意見しないでおくけど。

「それとシエルさん、ちょっといいかな」

「何でしょうか？」

サイトさんが再び神妙な顔つきになる。

「如月さんのことなんだけど… 彼の家族とかには会った？」

正直、伊藤の奴とそこまで仲が良い関係かといわれるとな。友人であることには間違いないけど、あいつの家族構成とかも知らないし。そこまで深く踏み入った関係ではない。まだ知り合って長くもないし、このくらいの付き合いの方が互いに気楽だからとっていい節はある。

「病院に運ばれて説明を受けただけで、家族には会ってません。後は警察とかに任せてますし」

「サイト、まだ気にしてるのか？」

奥の方から Aselia さんの不快そうな声が聞こえてくる。彼が気にしてるのって、伊藤の奴が死んだことに関してか。

「仕方ないですよ。こんな状況じゃ…」

サイトさんは首をゆっくり横に振る。

「いや、違うんだ。君とは多分違って、俺達は5人まとめてこの世界に連れてこられたんだ。始めのうちは、夢かもしれないけどみんなしてゲームの中に入れたと浮かれていてね。そして調子に乗って探索に行ったら…」

伊藤がやられたというわけか。

「それだけじゃない。俺達はここをゲームの延長だと思って、結果的にあいつを見殺しにした。あの時真っ先に助けに向かっていれば、彼は死なずに済んだかもしれないのに… 本当に、すまなかった…」

「サイトさん、俺に謝られたってどうしようもないし、あなた達を恨むなんてのも筋違いもいいところです。それよりも、みんなで今の状況を何とかする方法を探しましょう」

頭を下げるサイトさんに少し強めの口調で言ってみる。

伊藤が死んでも別に悲しいとか泣くほど辛いとか思っていない。それよりも自分の命をまず何とかしたいから。自分でも薄情な奴だとは思う。身近な人が死んだけど、全く実感が湧かないのが正直な所だ。流石にこれは人に言えないけど。

× ぽんさんもサイトさんの肩に手を置く。

「…ああ、ありがとう」

まだ割り切れていないとわかる表情だ。優しい人ではあるんだろう。だが、人の死を引きずるとロクな目に合わないってのは世の常だから何とかしてほしいな。

「とにかく、気に病まなくていいですよ。…俺はこれから町へ行つて情報を集めて来ます。宿もこの2階の部屋を使いますから」

「ああ、俺達はずっとこの部屋を使うから、何か急な用事があったらここに来てくれ。でも、情報交換は出来るだけ現実の掲示板でやったほうがいいかな。そっちの方が効率いいからね。全員に伝わるし」

「はい、そうしますね」

俺はそう言つて彼らに見送られながら部屋を出る。

さて、これから… G i l l e yさんに会いに行くか。約束の場所にまだ来てなかったら、適当に町をぶらつこつ。部屋を借りて一人であんなことやこんなことをやってもいい。

何だかんだ言つて仲間が増えたことで、この世界に対する不安はかなり軽減された。彼らの言う通り、町で大人しくしておけば死ぬ確率はぐつと少なくなるのだろう。それ以外は… ゲームの世界なのだ。

俺はフロントで2階の適当な部屋を借りる。部屋番を伝えるのは後でいいだろう。

それにしても普通に仕事してくれる宿屋の主人だなあ。不自然さが全く無い。

外は既に陽が傾きかけていた。

ゲーム画面上では単なる飾りでしかない民家も、この世界では各々が立派な役割を果たしている。重たそうな荷物を担いで運ぶ男。夕飯の準備をする女性、道の真ん中で玉蹴りをして遊ぶ子供たち。この世界にはこの世界の人の暮らしが確かにある。みんな日本人顔がなのが気になるけど。

…そして俺はふと足を止める。

目の前の前の雑貨屋で、若い男が女の子達と話しながら陳列棚の整理をやっていた。普段なら「リア充もげろ」とか言いたくなる光景ではあるが、俺はその男を一目見た瞬間に我が目を疑う。あの整髪料で軽く立たせた暗い茶色の髪。長身痩躯の体型に女性受けしそうな爽やかなマスク。あれは、間違いなく

「内山!？」

思わず俺は声を出しながら近づいてしまい、周囲の視線を一手に浴びる。だが彼は特に気にしていない様子で、営業スマイルを崩さぬままこちらに話しかける。

「何だいお嬢ちゃん？ お使いかい？」

容姿だけじゃない。声、あと多分性格まで同じクラスの内山そっくりだ。

「あの、あなたのお名前は!？」

「ん？ ナオトだけど」

ナオト： 確か内山直人： だったな。あいつのフルネームは。こんな偶然があるのか？

「内山、俺だ。同じクラスの高瀬だけど、わかるか？」

「： 変なこと言う子だなあ」

内山そっくりのナオトという男はあからさまに戸惑っている様子だ。俺がこんな外見だからか？ いや、それでも高瀬という名前を聞けば何かしらの反応があつていいはずだ。

「何なの、この子？」

「女の子が俺って言うのは良くないよ」

店先の女の子たちも俺の事を不思議そうな目で見る。よく見るとこの達もどこかで見たことあるぞ。もちろん現実世界でだ。一体どういうことなんだ？

でも流石に居た堪れなくなったので、俺は軽く謝ってその場を跳び出す。

例の町の郊外に向かって走りつつも、俺の頭の中は新たな疑問で錯綜していた。この世界のモブキャラが皆日本人に見えるだけでなく、現実世界に瓜二つの人間も存在する。容姿も名前も性格も同じだなんて、たまたまで済ませていい問題なのか？ もしかしてあいつもこのゲームをやっているのだろうか。

いやいや、待てよ。だったらゲームの中のアバターの姿で入っている筈だ。取り込まれていない人のアバターは確かに存在するわけだし…となると、あのナオトという男は一体何だったのだろうか？もしかして現実世界の人がそのままモブキャラになってるとか？どちらにせよ、これはみんなに教えるべきだろうな。

28話 これが恐れるべきものでした

新たな疑問を抱えつつ、俺は待ち合わせの場所に辿りつく。

空は薄暗くなっているけど、まだGillyさんは来ていないようだ。昨日は結構遅い時間に会ったし、もう少し後になって来てみるかな。今から町に戻って情報収集に勤めるか。酒場はパーティーのみんながいるかもしれないので避けよう。となると、どこに行くべきか…

俺は一つ試してみたいことを思いつき、町の道具屋に向かう。夜の町を歩いている人は冒険者が多い。皆「この世界」でのクエストを終えて一杯引っかけにやって来ているのであるう。逆にこの時間帯は、日本人のモブキャラは割と少ない感じがする。

道具屋の中はゲーム画面とは比較にならないほどの品物で埋め尽くされていた。店の広さは体感的にゲーム上での3倍、品数はそれ以上に感じる。見たことのない道具も沢山あって、品定めの間もかかる。この中に『A・R・クリスタル』があれば本当に笑い物だ。『お嬢ちゃんも好きだねえ。そんなガラクタの山をじっくり見ちゃってさ』

自分の店の売り物をガラクタ扱いはどうなのよ、道具屋の主人ハンスさん（42）。確かにこの店はゲームでも役に立つかどうか微妙なアイテムばかり取り扱っているんだが。薬屋は別にあるし。

「もしかしてお嬢ちゃんも『赤いクリスタル』とやらを探しているのかい？」

その言葉を聞いてはつとする。考えることは皆同じなのだろうか。少なくとも『A・R・クリスタル』の話題は、意識が取り込まれていないパーティーの仲間からは出なかった。ゲーム画面ではあれだけ盛り上がっている話なのに。リアルマネーだからこっちの世界の人には興味無いのだろうか。

「そう言う人が以前にも来たんですか？」

「う、ん？ 最近になってちょこちょこ増えたなあ… ウチの店の客は元々モノ作りを生業としている人がほとんどでさ、冒険者… しかも戦士や嬢ちゃんのような魔法使いの客は珍しいんだよなあ。みんな口々に『真つ赤なクリスタルはないですか？』って聞くし」

こんな状態になってもやつぱり気になるんだろうな。ゲームの中に自分の理想があるとは言え、現実世界でも生きていかなければならない。一千万円もあれば、現実での暮らしもぐつと楽になるだろう。質をあまり問わないのなら尚更だ。

…俺がここに来たのは、そのことを確かめるためでもある。この世界にその『アイテム』があるという可能性。この世界での行動で賞金が手に入る可能性を調べるため。

「おじさん。これとこれと… これをください」

「お、おう。まいど。魔法使いのお嬢ちゃんがこんなもの買うなんて珍しいな。えゝつと、全部で5400Gだな」

「はい」

俺が購入したのは「龍のあばら骨（８本）」、「森クジラの髭」、「謎の塊（サンマイト遺跡産）」。どれこれも用途不明だが、一応ゲーム上にも存在する。おそらく合成用の素材なんだろうけど、ソーサラーの俺にはまず縁の無いアイテムである。だが、これでいい結構時間も潰せたし、もう一度待ち合わせ場所に向かおう。そう思っ
て店を出た瞬間に人とぶつかってしまう。しまった、自分の実験に気を取られて、周りを見て無かった。

「あ… すみません」

「…気をつけな」

白銀の鎧に身を包み、神秘的な輝きを持つ銀髪の男。一言で言う
と凄く強そうだ。男はこちらを軽く一瞥すると、そのまま道具屋の中に入
って行く。今の俺だから解かるけど、装備からも強い魔力的な
力を感じた。サイトさんも戦士^{ファイター}としては相当強い部類に入るんだ
ろうけど、この人はそれ以上なんじゃないのか？ 出ているオーラ
が全く違った。

ということとは、この人も取り込まれた人なんだろうか。話しかけ
ないほうがいいのかな？ 人と組むのを嫌がっている人もい
らしいしな。ダンジョン帰りの血の匂いもするし。当然なん
だろうけど、あまり好きで嗅げる匂いじゃない。

話しかけるのはあからさまにうるたえている人達だけにしよう。

さて、再び町の郊外の草原に到着。何故かこの世界にも存在する
時計で時刻を確認するともう夜の１１時半。良い子は寝る時間だ。

でも俺は悪い子、機会があつたらこの体であんなことやこんなことを…グヘヘ、なんて考えているくらいだからな。

ダンジョン帰りの人たちもちよくちよく見かけるけど、あまり俺の事を気にしてはいないようだ。装備からしてもまだ低いレベルの人達なんだろう。…もしも、意識が取り込まれていない人たちが死んだら一体どうなってしまうだろう。これも気になる所だな。実証はしたくないけどさ。

しかしG i l l yさん… いつ来るんだろうな。

ふあ… 眠い。

いかん、ここで眠つたら現実で起きてしまう。変な話だが過去二回、現実で目が覚めたのはこの時なのだ。時間経過もありうるのだろうか。とにかく寝てしまつたらG i l l yさんには会えなくなる。ここは何としても睡魔に勝たなくては、いや寧ろ負けなくては言うべきか？ 現実基準で考えて。

うつうつ。

こつくりこつくり。

コーヒーとか眠 打破が欲しい。昼にあんだけ紅茶っぽいもの飲んだのに。カフェインレスだったのだろうか。しかし眠ることでの世界から抜けることができるのなら、睡眠薬の様なものがあれば緊急脱出が可能なのかも… これも… 試して… みたい…

.....
ぐう。

.....

つんつん。

.....

つんつん。

だ〜れ〜？

「お嬢ちゃん、こんな所で寝ると風邪ひくよ？」

女性の声だ。ぼんやり目を開けると声のイメージ通りの茶髪のショートヘアーのアーチャー。装備的にはまだ取り込まれているようには見えない。

「うう、どうも……」

いかななあ。今日はもう諦めるべきか……

「それと、さつき男の人からこの手紙を渡すように頼まれたんだけど」

ふえ？ 手紙？ 男の人ってまさか。

「もしかして、頭にバンダナ撒いたシーフの…」

「知り合いだったの？　なら良かったわ。てっきりラブレターかと思っただけ」

アバターの年の差的に犯罪だよそりや。アーチャーのお姉さんは俺に手紙を渡すと、そのまま町の方へ歩いて去ってしまった。

どれどれ、手紙の方は…　G i l l y って書いてあるのが見えるな。周囲は満天の星空と遠くの町の民家の光によって僅かに照らされており、文字が何とか読めるくらいの灯りはある。肝心の中身の方は…と。

『シエルへ

まずはこの手紙を読む前に周りに人がいないか確認しろ』

肩がすくみ上がる思いで、俺は辺りをキョロキョロと見渡す。…うん、誰もいない、かな。身を隠すにもただっ広い平原だし、大丈夫だろう。いきなりこんなこと書かれるとこえーわ。宿に戻ってもいいけど、本文は短いしすぐに読んでしまおう。

『なぜこんな手紙を渡したかというと、お前が跡をつけられていたからだ』

跡？　マジで！？　つか一体誰が！？

『こちらでも色々と重大な事が解かったが話は明日にする。武器屋』

「アニメス」の裏で待ち合わせだ。装備は変えてこい。それと明日のニュースは良く見ておくことだな」

…うーむ。何と言うか… やっぱり色々凄い人だな、Gillyさん。周りがよく見えていると言うか。対応が柔軟過ぎる。しかしニュースって一体何があるのだろう。

『最後に言っておくが、お前に協力しているのは、お前が俺の事を知っているからだ。あまり他の奴に俺の名前を出さないようにしてほしい。それじゃあな』

まさかサイトさん達に会っていたのも知ってるのかな、この人。もう盗賊を越えて、スパイのレベルだ。少なくとも敵に回したくない。彼の忠告には素直に従うとしよう。

しかし、Gillyさんは何故そうまでして人と組みたがらないのだろう。俺に協力するのは自分の存在を知っているから… 早々に口止めを狙ったことだろうか。彼の考えていることは良く解からない。クリスタルを狙っているわけでも、この世界を楽しんでいるとも考えられない。純粹に助かろうと思うのなら些か人を警戒し過ぎではないだろうか。

だが彼の言う通りなら、何かしらの理由で俺をつけまわしている奴もいるということだ。おそらくは同じくこの世界に取り込まれた人間。そのことも気になる。出方を窺うにしても、つけるべき人はもつと他にいるはずだ。何だかどんどん無駄に疑問が増えて行っている気がするな…

俺は今ひとつスッキリしないままの頭で、宿屋へ戻ることにした。

28話 これが恐れるべきものでした（後書き）

ここまで来ると一話当たりの文字数はどうでも良くなって来る不思議。

最後の方には6000字近く行きそうで怖い

29話 世の中が混乱してきました

現実世界に3度目の帰還。これは大丈夫、確定しているって解かっていても、朝起きた瞬間に過剰にほっとしてしまう自分がいる。そして親に何となく電話してしまう。別段話すことも無く、すぐに切ってしまうのだが、どうにもこうにも落ち着かないのだ。

次はゲームにログインして状態の確認。

昨晚の実験の首尾は… ある程度思っていた通りだ。

「龍のあばら骨」「森クジラの髭」「謎の塊」… そんなものは持っていない。所持金も全く変化していない。これが意味することは『ゲームの世界の中の買い物や行動には、ゲームのステータスには反映しない』ということだ。最初の晶霊の洞窟のことも考えると、ほぼそう考えて良いだろう。

と、言うことはつまり『ゲームの世界の中でA・R・クリスタルは存在しない』という、可能性が濃厚になってこないだろうか。だってゲームの中で手に入れたって、現実世界のゲーム上では存在しないんだから。

Gillyさんの言葉を借りるとこれもまだ仮説の段階で、事件の首謀者がいるとしたらそんな調整は好きに出来るので、この話が絶対とは言い切れないだろうが。

でも、「絶対」ではないだけで「大体」はそうなのだ。このことをみんなに教えれば、クリスタルを巡っての不毛な意地の張り合いが少しは緩和されるんじゃないだろうか。

攻略サイトの専用掲示板にも行ってみよう。パスワードを入力し

ロゲイン。アバター名前と性別、職業の記入を求められ、それから真っ先に出て来たのは生存報告のボタン。うーん、物々しい。一応ポチっとな。

なるほど、この掲示板に入れる人の名簿もあるのか。生存報告の欄に日付と が何個か。ボタンを押したら が付く仕組みだな。まだ何人が付いていないけど、まだ朝早いしな。今日は珍しく早起きしてしまった。

更に進んで行くと、この現象についての概要と疑問点が詳しくまとめられている。ほとんどは自分も知っている内容だ。モブキャラにやたら日本人が多い、しかも現実世界に存在している人に良く似たキャラも多数いることも解かっている。中には有名人そっくりの人を見かけたという報告もある。これが一体何を意味するのかは今のところ不明だ。

俺の先程の実験についてもある程度書かれてあった。無駄骨だったとちよつと後悔したが、自分でも確かめられたので良しとしよう。しかし、ゲームの中の世界ならその行動は残る… だって？ ということは、また向こう側に行ったら意味不明のアイテムはちゃんと所持しているということか。ややこしいな。

ん〜つと、それ以外には特に目ぼしい情報は無いな。今のところはこれだけだ。シエルのレベル上げは昼飯食った後にでもやるとしよう。寝起きにゲーム画面はちと辛い。

…そういえば、Gillyさんがニュースをチェックしておけって言ってたな。一体何があるのやら。連日、若者が脳梗塞で死にまくっていることにいい加減にマスコミが注目し出して、捜査のメスが入ったとかだろうか。

まずはY A O Oでいいかな、適当に… 速報？

『次期大臣候補の井沢氏と後原氏が今朝未明死亡！！ その他にも民政党の幹部が次々に倒れる！』

おいおい、いやいや。なーんじゃそりゃ。

思わずテレビもつけてみる。

『…これは悲しむと言うより、啞然としてしまう事態です。今朝だけで与党議員だけでなく、国务大臣が3人も亡くなってしまうなど… 政界は混乱の真っ只中です』

『…死因は全て病死となっていますが、ここまで行くと何者かの陰謀すら感じますね。国家を転覆させようとする輩の…』

『…官房長官！ 死因は病死となっていますが詳しい病名は解かっているのですか！？』

『…日本政府には迅速な対応を』

チャンネルを一通り回り、事態を十分すぎるほど理解出来たのでテレビを消す。マスコミに詳しい情報は期待していない。こういうときはネットの方が早い。

今日のニュースについて調べて30秒後、眠気が吹っ飛ぶほどに

目を見張った。

政治家だけではない。何かと黒い噂のある芸能人、服役中の凶悪犯罪者、ネットで嫌われているブラック企業の会社の社長など、所謂『有名人』たちが今朝発見されただけで総勢54人。次々に『病死』しているのだ。

『天罰k t k r』

『売国奴とヤクザがガンガン肅清されてるぞ！ 日本の夜明けの始まりだな』

『これはリアルで新世界の神が降りてきたかもしれん。いいぞもつとやれ！』

『殺して欲しい奴リストまとめて拡散しようぜ！』

匿名掲示板では大賑わい。匿名だからこそ好き放題言えるというものもあるが、確かに死んだ人たちは皆生前（ネット上で）あまりいい噂を聞かない人たちばかりだ。寧ろ俺だって死ねばいいのにか思っていました。はい。

だが、こうももの見事に一掃されてしまうと喜びというより、テレビで言われている通り呆然とするしかない。一体何が起こったんだ？ まさか本当に名前を書くだけで人を殺せるノートの使い手でも表れたのだろうか。

…じゃ、ないよな。これがG i l l e yさんの言っていた重大な事って奴か？ 他には特に話題のニュースは無いし、これだけ一辺に政治家が死んだのだから別のニュースなんて毛ほどの価値も無い

だろう。ったく、ほんの一週間前はクジラが海岸に打ち上げられていただけで大騒ぎしていたってのに… 電話だ。

「はい、もしもし？」

『おう高瀬。今から時間あるか？』

声の主は内山だった。別に何て事無いはずなのに、妙に胸がどきりとなる。ゲームの中の世界にいた内山そっくりの男の声とあまりにも似ていた…。いや、間違いなく同じものだったから。

「ああ、特には用事はないけど…」

『伊藤の両親が今朝から、あいつの部屋を片付けにこっち来ててさ。よかったら手伝ってくれないか？』

「ああ、そんな事くらいだったら… 今からでもいいのか？」

『おう、助かるよ。じゃあ、待ち合わせ場所は』

別にお前は伊藤と特に親しかったわけじゃないだろうに。こういう所が人間性の差なのだろうか。性格のいいリア充も考えものだ。見ているこっちが余計な思えてくる。…まあ、これは自己責任なんだが。長い時間パソコンに張り付いているだけじゃいけないんだろうな。

俺は皺の付いたシャツを羽織り、財布と携帯を持って外に出た。

現場にいたのは伊藤の両親と姉に加え、内山と矢野と同じクラスの奴があともう2人。遺体の腐敗臭はそこまで無かったようで、部屋の片づけは淡々と進められていた。

伊藤の両親は俺が来ると「本当によくして頂いて……」と、悲痛な顔を隠しきれないまま頭を下げて礼を言う。変わり果てた姿になる前に遺体が発見されたため、ちゃんとした息子の死に顔を見てよかったとも話していた。内山が言うには今回は本当に運がよかったこと。孤独死で遺体が長時間放置された時ほど悲惨なものはないらしい。

ワンルームを8人で片づけるとそこまで時間はかからず（寧ろ人多すぎだったので、交代で休んでいた）、昼前には綺麗さっぱり荷物がまとめられた。何かお礼をしたいと母親が言ったが、内山がよれには及ばないと断り、俺達はそのまま解散した。

この残暑の中働いてそれをボランティアに変えてしまおうとは、まったく虫唾が走るくらいに性格のいい奴だ。でも一人がこう言うちやうと周りのみんなも逆らえない。結局向こうとしても心苦しさに耐えきれなかったようで、小遣いは渡されてしまったが。

日中の熱を流すかのように、俺は町中を自転車で走る。他のみんなは一緒に飯食いに行こうと言っていたが、おそらく唯一事情を知るのである俺は、そんな雰囲気になえられる気がしない。

周りは皆伊藤の死因を病死だと思っている。彼の両親も若くして息子を失い、悲しみや怒りのやり場も見つけられずにいるのだろう。人の過失による死亡ならともかく、病気なら誰も責める事が出来ない。この残酷な運命を噛み締めながら余生を過ごしていくのだろう。

自分の中でふつつつとやり切れない怒りが生まれているのを感じた。

誰かが故意にこんな事態を生んで、自分もそれに巻き込まれる可能性があるとすると、早々に犯人を見つけ出してぶちのめしたくなる。伊藤の死よりもこっちが問題だ。

でも、それではいけないのだ。明確な犯人が解からぬまま、自分も死ぬ危険があるからこそ、ここは頭を冷やして慎重に動かないといけない。

大した価値のある人間かどうかは知らないが、ともかく今は自分の命が惜しい。

自分に力が無いと分かっているからこそ、身を呈して誰かの命を救おうとは考えてはいけない。自己中になれ。他人の勝手に食われてやる道理はない。

そうと決まれば早速家に帰って対策を練ろう。今はゲームをすることしか出来ない。幸い俺には心強い味方もいることだしな。

今日は学食は止めよう。頭をクールにするためにはジャンクフードが一番だ。

昼食はハンバーガーにした。

30話 それがメリットだとしても？

今日も今日とてゲームの世界。

今回は運よく仲間と合流することなく、すぐさま宿屋へと向かう。酒場の中で目が覚めると言うのも変な感じだが。まあいい、ラッキーくらいに思っておこう。

Gillyさんとの待ち合わせは時間指定こそしていないが、おそらくこの世界基準での夜だろう。それまでに適当に時間を潰しておくか。この世界で出来ることといったら情報集め程度くらいだからな。

日中はとにかくシエルを鍛えた。レベル上げには掲示板のメンバーも協力してくれたので、おかげさまで今のレベルは35。新しい魔法も欲しい所だが、結構限られてくるしなあ。反発する属性の魔法を覚えるとやや威力が落ちるという点も難しい。今度にいいさんに相談してみるか。

そしてレベルが30に達していないメンバーたちには、近々運営から低レベルのプレイヤーの救護策として、何か特典を付けるみたいだと嘘を言っておいた。本当に適当な嘘だが、これ以上にいい案が思い浮かばない。赤の他人にゲームを止めさせるって中々難しい。もしもこっちの世界に来てしまったら… その時はその時だ。ちやんとしたコミュニティも出来ているので、彼らなら事情を説明すれば大人しくしてくれるだろう。

で、だ。

今日はやることはやったのだ。やれるだけのことはやったのだ。

後はGillyさんと会うことぐらいだろうか。しかも昨日俺が付
け回されていたとなると、下手に外を出歩くのもあまりよくない。
昼間はじつと部屋に籠ってくのが得策だ。どうせこの世界での行動
は反映されないだし、間違ってはいないはず。

うん、暇潰しなら何をやっても構わないさ。人に迷惑かかるわけ
でも無し。

と、いうわけで、今からシエルちゃんの体を存分に堪能したいと
思います。

当然の権利だ。G行為限定だというのが悔やまれるが。
出来ることなら俺がシエルとやりたいわ。

この容姿ならこっちの世界の人間もメロメロ、寧ろブヒブヒだろ
うが、もちろん男とやるのはNG。可憐な少女の純潔は死守が基本。
さて、如何にしてこの穢れを知らぬ少女の肉体を、ひいひいあへ
あへ言わせてやろうか。言うのは自分だけど。そう思うとなんか悲
しい。

…でも折角じゃないか！ まず始めはやっぱ風呂だよな！ 御丁
寧に個室にはシャワーまで付いていやがるぜ。こいつを利用しない
手は無い。それに案の定残っていた謎アイテムもあるしな。「龍の
あばら骨」を使って何か独創的なプレイは出来ないものか。

…いや、待てよ。前が駄目でも後ろはありかもしれん。自らの純
潔を必死に守り続けつつも（中略）何とも儚い乙女。いいね、何と
も燃えるし萌えるシチュエーションだ。俺が童貞ってことには変わ
りないのだが。…ああ、駄目だ駄目だ。こんな自虐的になつては。
やるんだつたらひと思いにやるしかない！

いざ行かん！　まだ見知らぬ夢の桃源郷の地へ！

（この間の出来事は読者のご想像にお任せします）

夢の中で夢心地のような一時を過ごし、俺は出かける準備を整えていた。現実世界で夢精していないことを祈る。しかし、女の子の感じ方って男とは大分違うんだなあ。始めの方はかなり違和感を覚えた。脳のつくり云々とは聞くが、肉体転移というのがこんなに刺激的なものであったとは。そりゃAVとかエロゲにもなるのがわかる。体にもまだ余韻が残っているし。顔は未だににやけているんだろうが、この体だとそれすらも可愛い。

さて、キモいことはこのくらいにして。そろそろ真面目モードに切り替えよう。装備は皮の帽子に短刀つと、あとは伊達眼鏡。ソーサリー用の装備をほとんど外し、変装は完璧なはずだ。外からではとてもソーサリーには見えないはず。うし、行くか。

夜の町を少女が一人行く。襲って来そうな奴がいたら、速攻でラピッドを叩きこもう。ウィザードロードが無くても殺傷力がある物は一応撃てる。

俺は人通りの多い道を選んで歩いた。途中でパーティーの仲間とも会ったが、誰一人として俺に気づかない。変装の効果は抜群のよ

うだ。さらに人混みの多い道を歩くことで更に人を巻くという寸法だ。途中で防具屋に入り服と帽子をさらに着替える。頭にバンダナを巻き傍から見ると女シーフの様にも見えるな。念を押しに押して通常の3倍の道のりを通り、俺は武器屋「アニメス」の裏手へ。もちろん一ヶ所に留まらず、ぐるぐる動き回る。

「今日は随分念を押したようだな」

思わぬ方向から声がかかる。つーかよりもよって上からかよ。眼前にふわりと人が飛び下りて来る。

「今日は付けられて… ないですかね？」

「大丈夫のようだ」

Gillyさんはいつもの格好だった。本職だけに見つからない自身はあるのだろう。建物の上を跳び乗って行くとか、テンプレ通りの怪盗だ。

「今日のニュースは見たか？」

「有名人や政界の大物がガンガン死にまくっているという奴ですか…」

Gillyさんは軽く頷く。

「で、この状況を見て… 俺が昨日教えようとしたことは解かるな？」

「はい、もう大体予想ついてます」

あまりにも不自然すぎる『病死』の多発。それにこの世界の疑問を重ねれば自ずと答えが浮かび上がって来る。

「精神が取り込まれた俺達だけじゃなくて、ゲームプレイヤーで無い人はそのままの姿でこちらに… 何て言うか投影っていうんですかね？ コピーが送られているというか… そしてこここの世界の人達と現実世界の人達の命は繋がっている…」

「ん、まあ、大体そんな所だな。俺達はこの世界に来てから死ぬリスクだけではなく、人を違う世界から殺せるというところでもない力まで持たされたみたいだ」

Gillyさんは両手を上げて肩をすくめて見せる。

彼は軽く鼻で笑っているが、この世界の事を知れば知るほど危険な事態になっていることがわかる。こっちはモンスターとやり合える剣技とか… 広範囲を焼き尽くす魔法とか… とにかく人なんて簡単に殺せるんだ。これじゃあ完全犯罪を大安売りしているようなもんじゃないか。

「さて、どうする？ こっちの世界からならムカツク野郎も殺したい放題だ。汚職まみれの政治家、悪徳業者、暴力団、生活保護二ト… 世の中のウジなんて腐るほどいる。現実では一億人のうちの一票の選挙権しか持たない人間でも、幾分か世の中を変えることが出来る、な」

「…やるつもりですか？」

「お前はどうかと聞いている」

「やりませんよ… 何の罪も無い人を巻き込まないとは限らない…」

こちらの世界に持ち込めるのは現実の記憶だけだ、メモ一つ持ち込むことが出来ない。世の中の悪人どもの顔と名前が全部割れているわけじゃないし、そしてそれを全て正確に記憶し殺害できとも思えない。そっくりさんだったら洒落にならんしな。

「それに… この状況が『人』によって持たされたものなら尚更です」

「慎重なのか臆病なのか… どちらにせよちゃんと頭は回っているようだな。まずは、その大本を何とかしないと行動は出来ない」

どうやら G i l l y さんは俺と同感みたいだ。悪い反応には感じられない。

「じゃあ、問題はどれだけの人間がこの事実を知っていたかだ」

「みんなも薄々勘付いている人もいたかもしれませんが、おそらく今日のニュースを見て確信してるでしょうね」

「そうだな。だが考慮すべきはそのことを人に教える前にあんな粛清めいたことをやってのける奴がいる、ということだ。俺みたいに実験的に一人殺るくらいならともかくな」

おいおい。

「誰か殺したんですか!？」

「ああ、外国人団体からの違法献金疑惑のある議員：疑惑つつつてもほとんどクロだがな。あまりにも特徴のある顔だったんで、サクツと」

Gillyさんは自分の首を切るようなジエスチャーをする。

「本当はそいつが死んだニュースを見せてお前にこのことを伝えようと考えていたんだが、思いのほか同業者がいたようで」

まさか大臣含め50人以上も殺されるとは思わなかった、というわけか。これじゃあ議員一人死んだところで全く驚かない。しかし、相手が悪人(?)とはいえよく平然と殺せたものだ。

「で、だ。そこまで解かっているのを前提にしての忠告。お前や俺が何もしなくても、誰かがこの世界を利用して殺人を犯すだろう」

「悪人を狙って殺している辺り、本人はよかれと思ってやってるんじゃないけど」

本当に死のノートの世界だなこりゃ。

「それにこれは俺の勘だが、一昨日の総理大臣を殺した奴が昨日になって大量に殺人をやったんだと思う」

「同一犯…？ どうしてそう思うんです？」

「都合良く条件にあった人間を一晩であれだけ殺れるなんて、この

世界の仕組みを理解してないと無理な話だろう。俺が昨日殺した議員だって、歩いていてたまたま出会っただけだ。一人殺って確信し、翌日に計画的な犯行を行った、と考えるのが結構自然なところだな。もちろん労力的に一人とは限らない、寧ろ複数でやった可能性が高い」

仮説ではあるんだろうが、この人が言うと言得力あるんだよな。

しかし訳の解からない力を使って殺人だなんて… これは人の考え方にもよるのかね。

「あの、それじゃあ忠告というのは？」

「ああ、この調子だと殺人はしばらく続くだろう。警察も捜査のしようがないしな。だから少なくとも殺されるのが悪人だけであるうちは… 黙認しておけ。くれぐれも止めさせようなんて考えは起こさない方がいい」

「対象がヤクザとか悪徳政治家なら無理に止めるつもりはありません。でも無関係な人が殺されるのも黙って見ているのは…」

彼の言いたいことは解かる。俺だって相手が滅茶苦茶強かったら、自分の命欲しさに黙って逃げるかもしれない。ここは、まあ、自分の中に僅かに残された正義感というか。犯人の良識を信じて、そうならならぬことを願うしかない。

「…モラルや信条なんて、一度^{たが}箍が外れれば案外脆いものさ。もしも無関係な奴を殺すことに慣れてしまったら、いや自分の中で正当化させちゃったら、こっちでも何か対策をとるしかない」

自分の顔にリアルに冷や汗が流れるのを感じた。
初めての体験だった。こんなに冷たいもんなんだ。

30話 それがメリットだとも？（後書き）

こんなジャンルの話なの？　って思っている人もいるかもしれないが、
こんなジャンルの話です。

31話 良識を持っていてください

「俺からはこんなところだ。次はお前の番だが…」

手持ちの情報でこの人の知らない事があるかどうかは解からないが、とりあえず知っているだけの事は伝えよう。こっちに取り込まれた人が集まる掲示板については伏せておくことにする。ついさっきポロッと単語を出してしまったが、単なる攻略掲示板のメンバーだと考えてくれるだろう。

この通りあまり期待はしていなかったが、『A・R・クリスタル』はこの世界には無い可能性が高いという話には割と食いついてくれたようだった。

「なるほどな… こんな現象を引き起こしている奴の匙加減でどうにでもなるとはいえ、その可能性は高いな」

「そもそも、そんな物存在しないってこともありえます。賞金云々だって、単なるプレイヤーをより多く誘う売り文句でしか」

Gillyさんはまたも腕を組んで何かを考えているようだ。

「そうになると、ますますこの事態を起こしているのはゲームの製作者ということになってしまいが…」

「俺は正直その線が一番濃厚だと思いますけど。方法や動機こそ全く解かりませんが、色々辻褄は合います」

ゲームを支配する、管理・運営できる、プレイヤーのレベルでこ

の世界に取り込まれる物を調整できる、というのなら、もう黒幕は製作者しか考えられない。ゲームを止めさせようとする活動を潰すのも運営側なら何等不自然でない行動だ。世間も信じようとしないので、証拠隠滅だって簡単。

「確かにお前の言う通りだ。黒幕はゲームの製作者、俺も9割方そうだと思っているんだが…」

「何か疑問でも？」

「…いや、その動機って奴が気になってな。こんな事態が引き起これたのも、そいつらの御望みどおりなのか…」

どうなんだろう。確かに、もはやゲームのバーチャル体験で済むレベルじゃなくなっている。この調子だと国家転覆だって狙えてしまってくるくらいだ。こんなものを何も知らない一般人にやらせてどうするつもりなのだろうか。異世界から人を殺すなら自分たちでやった方が早いし余計に見つかからないだろう。自分が死ぬというリスクを考えてのものだろうか。

かと言って、仮に黒幕が製作者以外となると、余計に訳が解からなくなるし。

「…じゃあ、仮に製作者が黒幕だったとしよう。この現象を食い止めるためには、現実から叩いていくのが最も効果的だと思うんだが…」

「でも、証拠も何も無いんですよ… 現に止めさせようとした人達が警察沙汰を起こしちゃって、向こうもかなりピリピリしているでしょうし」

「方法ならいくらでもあるさ。例えば『こつちの世界』から製作者どもを殺すとか。もし向こうがそれを見越して強力なキャラを作っていたら… そうだな、関係者を人質に取るとかな。現実とこちら側両方から」

…よくもまあ、こんな風に物騒なことを思いつくなあ。

既に一人殺っているし、この人もある意味で箍が外れているのかもしれない。

「強攻策ならいつだってとれる。だったらその可能性もあるのに、何故こういった仕組みにしているのかということだ。こつちの世界での行動が死ぬ死なない以外に反映されないのも、元々から殺人をするように仕向けるためなのか…」

そう言われてみると、この出来事については色々穴があるというか… この世界の存在を複数の人間に知られるとなると、そこにリスクが生じる。自分たちの手ではなく人の手で殺させることによつて罪を逃れるつもりなのだろうか。でも殺人幫助はまず避けられないだろうし、殺した人間に罪を負わせるにしてもこのゲームとの因果関係を明らかにしないといけない。そうすると必然的に自分たちにも矛先が行くことは避けられないわけで… ああもう、考えれば考えるほどややこしくなってきたぞ。

「結局… 動機は本人たちに聞くしかないんじゃないですか？」

「それも確証あつての物種だがな。中途半端な証拠だと知らばつくれるだろうし、仮に製作者が黒幕でなかったら取り返しのつかないことになる。強行策は真犯人を明らかにして、確実にこの現象を止めることが出来るという保証が無い限りは取れない」

製作者を殺してもこの現象が止まらなかったら… 確かに洒落に
ならん。今この時の俺達の命だって常に握られていないとも限らな
いのだ。動くんなら全てを、いや少なくとも真犯人を明らかにして
からが最も安全、か。基本っっちゃ基本だけど。疑わしきを罰するこ
とが出来ないのは痛いな。

「やっぱり… 今出来ることは情報集めだけですか…」

「だな。他に良識のありそうな仲間がいたらそう言ってやることだ」
解決に向けては全く進展していないんだな。足元を固め道を広く
しただけだ。自分の命もリアルにかかっているし、まだまだ地道に
進むしかなさそうだ。

「そうそう、それとこのゲームを自分の意志でやめられるかどうか
についてだが…」

「確か退会した人がいるんですけどっけ？」

「無駄だったようだ。画面上はキャラを消してもこっちには残る。
強化出来ない分、更に絶望的な状況だろうな。そいつは昨日、頭抱
えて震えてたよ」

…それはお気の毒に。

だがこうなってしまった以上、もう逃げることも出来ないってこ
とだ。唐突に強大な力とリスクを与えられ、自分自身は力の行使を
拒否することが出来てもその惨状を見届けなくてはならない。実際
の異世界召喚なんてチートモノじゃない限り、ロクでもないもんだ
な。

「とにかく、この世界を利用して何かを為そうなんて奴には極力関わらないことだな。…お前だって出来ればこれ以上何も起きずに終わって欲しいんだらう?」

「少なくとも自分が死ぬのと人殺しは勘弁ですね。現実で友達が死んだんで、見ていてあまり気持ちのいいものじゃないって分かりましたし」

伊藤の死が俺の中の何かを踏み留ませた気もする。流石に親兄弟にあんな死に目は見せられない。自分の命を守ることの重要性が少しは実感できた。もちろん人を殺すことも。正直悪人個人は知ったこっちゃないが、余計な罪を背負って生きたくはないし。

「既に一人殺した俺が言うのもなんだが、それもそうだな。だが、そうじゃない考えの人間だって世の中には星の数ほどいる。だから下手に関わるなよ」

口の上ではそう言っているが、Gillyさんは実際どう思っているんだらう。少なくとも自分には悪人とはいえ人を殺したことに對する『氣負い』というものが彼から全く感じられない。自分の命を守る上での実験とは言え、こつも簡単に人の命を奪えるのも…

…いや、下手に考えるのはよそう。今のところ、この人は頼りになる味方なんだ。いざとなったら互いに利用し合うというのも、暗黙の了解が成り立っている気がする。上手いんだらうな、そこらへんの人付き合いが。

次に会う時間と場所はGillyさんの判断に任せることにした。彼がクエスト受領のための冒険者ギルドに手紙を送って、待ち合わせ場所を決めるという方式だ。俺が小まめに見に行く必要があるが、

そこまで大した手間では無い。互いに居場所を知られないという点ではちゃんと配慮されている。

「Gillyさん、最後に一つ聞いていいですか？」

「どうした？」

「どうして俺以外に人と組もうとしないんです？」

Gillyさんは鼻で笑った。

「誰も組んでいるのがお前だけとは言っていないぞ。それに、人前に晒さない理由だってこの前言ったはずだが？」

そう言うとは彼は振りかえることも無く、夜の町に消えて行った。彼は彼で気になる所が多い人なんだが、下手な詮索はするなっとなのかな。

…何か理由があるのなら全てが終わってから聞こう。

夜の町は行きよりも幾分人は減っているようであった。多くの人はもう寝静まっている時間帯なのだろうか。俺も宿屋に真っ直ぐ戻るかな。

と思つて、しばらく歩いてた途端に道の先で何やら人だかりだ。その多くは冒険者ではない。日本人のモブキャラだ。何だろう、民家の周りに集まっているようだけど。

「酷いなこりゃ……」

「やったのは冒険者だって？」

「こんな荒らし方は普通の人は出来ないよ……」

俺も気になってその人だかりに交ざると、後ろから冒険者ギルド直轄の警備隊の人達がやって来て、野次馬に道を空けるように怒鳴っていた。

「一体何があつたんですか？」

「いやね、ここの一家が強盗に襲われたんだつてよ。家族全員皆殺しさ」

思い当たる節があり過ぎてそれ以降の言葉に詰まる。

「最近になって急に増えたわよね…… 殺し方もどうやら冒険者みたいだつていうじゃない？」

「昨日なんて丘の上の屋敷の御主人が縦から真つ二つになってたんだろ？」

「二丁目の金貸しも黒焦げ死体になってたつていうしさ……」

「やだ、怖い…… 冒険者には町を出て行ってほしいわ……」

「しっ！ 誰に聞かれているか分かんないんだぞ……！」

町の人間を手には掛けるようなクエストなんて当然ありはしない。
そうだった輩を退治するクエストだって。

これも他の人にとっては正義だというのだろうか。

理解は出来るが同調はしたくないな。

31話 良識を持っていてください（後書き）

サスペンスというのはホラーに含まれるんでしょうかね。

32話 殺る気満々じゃないですか

『悠一、ちゃんとご飯は食べてる?』

「ああ、ほとんど学食だけど。栄養バランスはいいはずだから」

『でも最近よく電話するわね。最近若者の孤独死が増えてるって言うじゃない。やっぱりそのせいなの?』

「実は大学の友達もこの前それで死んでね…」

『それで頻繁に電話してくるようになったの… 不安だったら帰ってきたら? まだ授業始まってないんでしょ?』

「ちょっとやる事が出来たからそつちには帰れないんだ。まあ電話がなかったら死んだと思ってよ。遺体発見は早い方が大家さんにも迷惑かけないし」

『もう! 滅多な事言わないの!』

俺の親は何だかんだで子供の命を心配してくれているようだ。当然なんだろうけどさ。最近はその当たり前すら出来てない親もいるもんで… 今はどうでもいいか。

とにかく何時死ぬか解からない身だ。自分の両親に感謝の気持ちを伝えることを欠かさないようにしよう。

俺は4度目の帰還を果たし、早速掲示板で生存報告を行う。昨日もプレイヤーの犠牲者(少なくとも掲示板のメンバー)は出ていな

いようだ。よかったよかった。

この現象が起こるようになって早5日。流石に皆生き残る術が身に付いて来ているということか。単に町の中で大人しくすることなだけでさ。名簿を見ると新しいメンバーが6人も増えている。連れて来られる要因も『レベル30以上になること』がほぼ定説になりつつあるようだ。

こんな調整だと、やはり黒幕は製作者だとは思えないのだが…
目星はついていても行動に移すことが出来ないのが歯がゆい。

管理人の夕風さんもレベルを20台に抑えゲームの世界に取り込まれていないものの、この事態を信じざるを得ない状況になっているようだ。ニユースになる前に今朝の死亡者の予告をした人がいたのである。どうやら彼はゲームの世界でその人物の死体を見たらしい。

非プレイヤーの一般人も向こうの世界で死んだら現実でも死ぬというのも、みんな昨日知ったみたいだ。向こうの世界がゲームの中なのか本当に異世界なのかよく分からない以上、下手な気は起こさないようにと注意喚起までしてある。

皆最低限の良識を持っている人達ばかりで、これまた本当によかった。

さて、あまり見たくはないが本日犠牲者は…

…今日もまた有名人だけで60人強。中には家族ごと病死した議員もいるらしい。

その肝心の病因とやらも公開されたが、心臓発作、心不全、肝硬変、脳溢血とばらばらであった。中には朝起きた時は何も症状が無かったのに突然急死した人物もいるらしい。これだと本当にあのゲームが原因なのかよく分からないが、ネット上では黒い噂の立って

いる人物だったので一応その範疇に入れられているらしい。

一応、国や警察も緊急対策本部を作ってはいるらしいが、一体何をどうやって調べるのだろうか。今公開されている分で分かっているのが、この事態が日本国内限定で起こっていることから犯人は日本人の可能性が高い、ということだ。だからどうしたって話だけでなく。人為的に他人を病死させるなんてファンタジーもいいところ。そういう漫画が過去に連載されたから、そっちの線も調べているみたいだけ。

ネットの匿名掲示板での反響は、これまた更に加速していた。新世界の神が降りて来たと崇める人。殺して欲しい人をリスト化する人。ただこの事態を面白がっている人（これがおそらく9割ほど）などなど。

一部のWebサイトでは犯人特定のための推理考察を載せている所もあった。あまり期待せずに眺めていたが、意外と核心についているのも多く結構参考になる。こっちとしても人が死ぬ原因、殺害方法は知っているのだが、殺した犯人自体は分からないのでこの情報はしばらくお世話になりそうだ。

このサイトの管理人が言うには

犯人の情報源は主にインターネット。厳密には信用している情報源がインターネットだということ。これは死んだ人物の傾向から推定できる。死亡した人物はテレビや雑誌ではあまり取り上げられていないが、ネット上では悪く言われている人物であること。逆にマスコミには悪く言われている人物はほとんど死んでいないことを見ると、ネットの情報を強く信じている傾向があると判断できる。

さらに思想はネット右翼… かどうかは分からないがそれに準ず

るものを持っていること。死んだ人間が主に在日系、もしくは東アジアの特定の国を賞賛、支援するような発言を行っているような人間が多いこと。逆に在日を排斥するような発言をしているような人物に対しては、犯罪歴があっても殺していないと言う事。要は純日系のヤクザには手を出していないみたいだ。企業人も何人か死んでいるが、全てネット上で在日系だと噂される人物ばかりだ。

これらの事から、犯人は学生、もしくはニートの可能性が高いということだ。社会人の可能性が低いのは殺人の手間を考えての物である。また世の中を変えるにしても、政治に関わる人物を一辺に殺していることから、そっちの知識には疎い、つまりあまり考え無しに殺害しており、精神的に未熟というか浅はかなところがある…とまで書かれてある。

思想云々に突っ込む気は起こらないが、少なくとも学生かニートの可能性が高いというのは支持したいところだ。ネットゲームをこっぴどくやり込める人間だというのだから。主婦の可能性だって捨てきれないけどさ。

しかし、こんな事態が表立って知られるようになって2日目でもう世間は他殺という線を考えているんだな。少し感心した。これだけの騒動だし、漫画の影響も多少なりともあるんだろうけど。

だがこれを受けて、自分は標的にならないと勝手に安心してきつてこの事件を面白がったり、問題解決ではなく、犯人の人格否定から入るような人達を見るのはあまりいい気分がしない。結局大半の人は自分は外野にいるから安全だという考えが元になっているから、そんな事をほいほい発言できるのだ。こっちがその気になればいつでも誰でも殺せるのに。当事者としてはかなり複雑な気分である。

周囲に全く期待できないというわけでは無くなったが、このネットゲームが原因だということに辿りつけるのは果たしていつになることやら。

でも気づかれたら気づかれたで、俺らも疑われる可能性があるんだよなあ。証拠も糞も無いけど、やってないというアリバイも無いし。下手したらプレイヤー全員連行という事態もありうる。それは勘弁してほしいところだ。となると、やはりこれは自分たちの手で解決するべきことなのだろうか…

自分が死ぬか、殺人犯の容疑をかけられる…

この最悪の2パターンだけは絶対に避けたい。

さてさて、どーすっぺ…

とりあえずは今日のレベル上げに付きあってくれる人を掲示板で募ろうか。まあどうせ他の人も同じことを考えているだろうから、それに便乗すればいい。

昼何時から何時まで、夜何時から…といった具合に各人の都合に合わせて、常時募集がかかっている。ゲーム自体のクランとかフレンド機能が不完全なため、ここの掲示板がその役割を果たしているわけだ。

今日は昼1時からの部にするか。サイトさん、A s e l l i aさんにいい子さんなど顔なじみもいるようだしな。自分も参加しますってレスを… ポチっとな。

今のとこ俺含め6人… パソコンのスペックもまあ大丈夫だろう。

俺のレスが画面に表示されると同時に、また新しいレスが下に表示される。一瞬、誰かと投稿がかぶったかな？ と思ったがそれはA s e l l i aさんのもの。

A s e l i a「なんかヤバいことになってるぞ！ 公式見てみる！」

ヤバいこと…？ 公式サイト…？

『本日は特別に全プレイヤーに経験値3倍ボーナス！ 難解なダンジョンに苦戦しているその君！ このチャンスを見逃すな！』

『特殊クエスト「クリスタルの導き」を追加！ ダンジョンに挑戦した回数に応じて、クリスタルの発掘ポイントをいくつか提示させます。世界中に散らばる発掘ポイントのどこかに「A・R・クリスタル」は眠っているぞ！ 早い物勝ちだ！』

………

………

…

運営め。

ここにきて 一気に 殺る 気なのか？

サイト「まずいんじゃないのかこれ!？」

にいい「でも止めようがないよ?」

櫛坊主「公式の掲示板が物凄く盛り上がってるぞ。今日はプレイヤーが激増する予感」

くろね子「折角、最近は飽き始めた奴らが増えて来たのに…」

A s e l i a「まさか俺達の対応を見て運営が本腰入れて来たとかじゃないよな?」

マジなのか…? 本当に俺達は向こうの世界でも監視されていて
… ひたすら町に籠り続ける俺達に運営が業を煮やしたとしたら…

夕風(管理人)「みなさん、公式で凄いことになってますけどどうしますか?」

サイト「夕風さんは絶対にプレイしないでください。事情をある程度知っていて、かつゲームに取り込まれていない人は他にいませんから」

A s e l i a「明日は死人が増えそうだな畜生!」

「冗談じゃないぜA s e l i aさん! まだ黒い疑惑のある悪人候補ならともかく、死ぬのは何の犯罪も犯してない一般人だ。それも

ほとんどが若者。こんなことあつてたまるか！

れんちえふ「いや待て。これは逆にチャンスでもあるんじゃないのか？ 今晚取り込まれた奴を一人でも多くこっちの仲間に取り引きずり込めば、運営共に対抗できるかもしれん」

サイト「頭数は増えますけど同時に多くの人を危険に晒すかもしれませんよ？」

くろね子「かと言ってこの状況は止めようがないだろ。 意見は目的はともかく人命救助としては一番現実的だ」

櫛坊主「だったら向こうの世界で待ち構えて、うろたえている奴に片っぱしから声を掛けまくるしかないな。メンバー全員に拡散しよっぜ」

にいにい「それと今の内に思いつきりレベルを上げといった方がいいと思う」

れんちえふ「とにかく今は確実にやれることをやるぞ！」

…れんちえふさんの意見は一見正しい。

正しい… が、大事な事を見落としている気がする。

向こうの世界に取り込まれた人達が下手にダンジョンなどに入ることによって、命の危険に晒される。これだけは絶対に避けたいし、彼が提案したように注意喚起することで防ぐことは出来るだろう。

だが、取り込まれた人達が向こうの世界に付いてどう思うのかが問題なのだ。

おそらくかなりの御新規さんが流れてくるだろう。彼らが世界の仕組みを知り、殺人願望が表層化する輩が出る可能性も無いことは無いのだ。寧ろそれを一番警戒するべきではないだろうか。俺達はまともだが、今晚連れて来られる輩も全員そうだとは限らない。

…考え過ぎだろうか。このことをみんなに言うべきでしょうか？
Gillyさん…

32話 殺る気満々じゃないですか（後書き）

「製作者」なのか「制作者」とするべきかで迷っていたり。

あと本作は作者の思想が当然の如く入っていますが、政治的な物や人種問題についての論調においては全てフィクションであることを強調します（迫真）

33話 これは不味い気が

薄らと開けた目に入って来るのはぼやけた光景。耳に入るのは大勢の人間の喧騒。肘にはいつものひんやりとした木の感触。前後に揺れ動く頭。

次第に微睡みから覚め、俺は夢の世界へ入る。

「……さん。…エル…さん！」

若い男の声…って、もう主は知っている。

「ああ… YASUさん。すみません、ちょっと寝てました…」

目の前には、最近は御無沙汰だけいつものパーティー。YASUさん、Pon太さん、まるちーさん。やっぱりこの四人が何だか落ち着くメンバーだ。今日もお変わりなく。

YASUさんとPon太さんがやたらと鬼気迫る表情をしていること以外は。

「シエルさん！ あなたはどうなんですか！？」

「…どうしたんですか？ 二人とも」

「あなたも意識がキャラクターの中に入ったんですか！？」

俺はまだ虚ろさの残る目でただ一人戸惑う、まるちーさんの顔を見る。

「さつきから二人とも変なんですよ。いきなりここはゲームの中の世界だとか、私はそうでないのかとか聞いて来て……」

なるほどねえ……。二人も、か。気が付くと三人分の視線を一手に引き受けている。

みんな俺の答えを待っているみたいだ。

「まあ……。詳しいことは『俺』も知らないっつーか、調べている途中なんですけど……。今分かってる事だけお話しますよ。」

俺は今日になって取り込まれたであろう二人にこの世界について話した。結構内容が多いので時間がかかったが、彼らも所々で顔を顰めつつも大体理解してくれたようだ。それと彼らは十分信頼に足る、というか変な気を起こさないだろうと思ったので、現実世界の出来事と合わせて二つの世界の繋がりについても教えてあげた。ただ一人、未だに意識が取り込まれていないまるちーさんには冗談半分にしか聞こえないのだろうが。

そして案の定、啞然とするYASUさんとPon太さん。仕方ないね。

「シエルさんはもつと前からこんなことに？」

「俺はこれで五回目ですよ。今ではもう慣れたもんです」

俺は柄にも無く経験者の余裕をかます。あくまでもこっちに来たら死ぬリスクが格段に上がると教えた上で、彼らの不安を取り除いてあげようという配慮に基づいてだ。

取り込まれた初日は慣れない世界と体に戸惑ってしまうだろう。

そんな中で自分と同じような境遇、そしてこの世界のことをよく知っているガイド役の存在は何よりも心強い。そしてその分、精神も安定する。こっちとしても指示が送り易くなるのだ。

今となつては俺が必死にG i e e yさんを引きとめたのも懐かしい。まだ一週間も経ってないんだよな。ここ数日は時間が立つのが随分と遅く感じる。実際に睡眠時間を無くして活動しているようなもんだしな。

「と、とにかく、町の中にいれば安全なんだよね？」

獣人のP o n太さんが不安そうな目で尋ねて来る。さつきから妙にしゃべり方に違和感があるし、中の人は女性なのかな？

「少なくとも俺達は今までそうやって問題無く過ごしてきたので大丈夫ですよ。この後、同じく取り込まれた人達みんなが集まろうという事になってるんですけど」

これは仲間内の一人、れんちえふさんの提案だ。今晚はゲーム世界へ精神トリップする人たちが続出すると予想されるため、終始仲間集めに従事してほしいとのこと。さらに新しい仲間をノツイミカーラの町（要は今いる町）の中央広場に集めて、集会を開いて団結力を高めようというらしい。

まあ考えとしては悪くは無い。自分たちの仲間の規模を知っておけるし、これだけの味方がいるという一種の安心感も容易に覚える。さらに集団心理で変な気を起こす人を押さえる効果も狙っているらしい。ここら辺は日本人ならではだな。

「いや」 最初はどうなるかと思ったけど、シエルさんがいて本当に助かりましたよ」

これだけの話を聞いて少し安心して緊張が解けたのか、YASUさんがいつもの（チャット上の）和やかな雰囲気になる。PON太さんはやや不安も残っているようであったが、軽く頷いていた。ただ一人、まるちーさんは要領を得ない表情だった。しゃーない。

「私には何が何だかさっぱり… 現実世界とかゲームがどうだとか…」

「まるちーさん。世の中には知らなくていいことも沢山存在するんです。俺からしたら、まるちーさんの立場は物凄く羨ましいんですから」

俺は渋い声色（でも少女声）で、まるちーさんを無理やり納得させる。彼は終始首を傾げっぱなしであった。

今のところ命の危険の無いまるちーさんと別れ、俺達三人は町の広場へと向かう。ゲーム画面そのままの光景を目の当たりにした二人はしばしば足を止めていた。これは無理も無い。ゲームの中に入れるなんて、子供から大人まで共通している夢、妄想なのだから。

しかし昔のヨーロッパ風の街並みに、住んでるのはほとんど日本人だからな。毎回思うがこのアンバランスは何とかしてほしい。どうしてこのゲームの中にコピーされるのは日本人限定なのだろう。ヨーロッパの人とかを入れたほうがもっと雰囲気出るだろうに。単に容量の問題だろうか？ この町だけでも滅茶苦茶広いしな。

日本人のコピーが存在するということは、この世界も今の日本くらいの規模があると思ってい。一億ン千万は確実。ゲームの登場人物もいるからそれにちょこつと+ があるくらいだ。もちろん冒険者たちの集う町・拠点はここだけでなく他にもある。この町が序盤からお世話になり、クエストの大半もここの冒険者ギルドから受

けるので、みんな利用しているだけだ。本稼働になったら色々追加が入るんだろうけど。

…そうすると、気になって来るのは現実世界の悪人を殺している奴らがどうやって、こっちの世界に存在するコピーを探し出して特定しているかだな。こっちには流石にネットとか使える端末の様な物は無いし…一つの町にある程度集約されているとは言え、これだけの人数からお目当ての人間を探し出すなんて気が遠くなりそうだ。こちらの世界に来れるのは現実世界で寝ている時だけだから、いつまでも留まる事は俺の経験からいって不可能だし。時間的にはせいぜい12時間が限度か。その間にほぼピンポイントで50人以上を殺害しているということになるわけだけど。

うーん… 顔や性格以外にも何か共通点とかあるのかな？ そこから割り振れば…

G i l l e y さんはおそらく複数犯だと言ったけど、だとしたらその人数も気になる。この世界に取り込まれた人は、こちらでは確実に数を把握できないし。数人規模ならともかく、向こうも何十人もいるとしたら… あまりその先を考えたくないな。

「シエルさん。ちょっといいですか？」

歩きながらずっと考え込んでいたので、Y A S U さんの声に少しどきりとしてしまう。

「私もこの世界の事はまだよく信じられないんですけど、一つ気になったことがあって」

「何ですか？」

「方法は良く分かりませんが…　こんな事態を生みだしている犯人がいるっておっしゃいましたよね？　そして今のところの最有力候補はゲームの製作者だということも」

「確信はないですけど、それが一番可能性が高いかと」

「『デバッガー』…　とかはないんですかね…？」

「実際にプレイして調整とかを行う人の事ですか？」

「はい。この現象が起こったのは6日前っておっしゃいましたし、試験稼働版でプレイヤーの反応を最終調整代わりに使って話も出てますけど…　製作者側のデバッガーが全くいないとは思えないんですよ。実際にプレイヤーに交じってやっているという話もよく聞きますし」

デバッガーはアルバイトがほとんどだという話は聞くけど…　でも製作側の人間だ。少なくとも製作者に近い人間だ。彼らならレベルも高いだろうし、こっちの世界に来ていることも十分に考えられる。

「状況が状況ですし、いたとしても簡単に見つけられないとは思いますが…」

「いや、でもいい線いってると思いますよ、YASUさん。みんなにも話してみます」

正直捕まえる方法とかはさっぱり思いつかないが、もし特定できれば何か情報を吐かせることも出来るだろう。いない可能性もあるだろうし、かなり難しいとは解かってるけど。このまま闇雲に情報

を集めるよりは…

「あっ…！」

「どうしました？ シエルさん」

「い、いや。何でも無いです！」

俺は一瞬どうしてみんなこの事に気づかなかったんだろうと思い、そして反省した。俺は本当に単に気づいてなかったただけなんだけど、多分他の人も何人かはその考えに至り、敢えて発言しなかったのではないだろうか。理由は今の俺だったら何となく解かる。

だとすると… この集会は大丈夫なのだろうか？ 一波乱起きそうな気がする。寧ろ何で今までそれが起きなかったのか不思議なくらいだ。他の人もちゃんと考えた上でのことだったんだ。Gillyさんに頼り、色々と分かっていたつもりになっていた自分を急に腹立たしく思う。

でも、今からじゃどうにも… こんな事態には慣れていない。

34話 これだけをまとめるには(前書き)

リアルが忙しくて更新遅れ気味

34話 これだけをまとめるには

「ようシエル。その人達は…」

広場でまず出迎えてくれたのは Aselia さんであった。傍から見ると凜とした美人女騎士だというのに、中の人の関係でややだらしなさが前面に出ている。仲間内からも男口調が勿体ない人物だと言われているくらいだ。でも男は男だし。

「俺がよく組んでいるパーティーの人達です」

三人で軽い自己紹介を行っているうちに、俺はぐるりと辺りを見渡す。中央広場はレトロな石畳の地面に、広場の真ん中には町の子供たちの遊び場と化している噴水と、いかにもゲームの中の広場のテンプレともいえるべき所である。広さも東京ドームくらいはありそうだ。東京ドーム行ったこと無いけど。

ゲーム内でも待ち合わせの場所としてよく使われているため、冒険者の姿も結構見かける。その中のどれだけが、こっちに意識を取り込まれた人なのやら。

「…今んとこ、今日の新人りはあんたら合わせて30人くらいかな」
ちょうど同じことを考えていた所に Aselia さんの言葉が耳に入る。

「30人もですか？ 今までのメンバーの同じくらいじゃないですか」

「しかも今の時点だ。集会まではあと2時間以上あるし、もっと増えるだろうな。今20人くらいで町を回っている最中だしさ」

Aseiliaさんは噴水の淵に腰掛け早くも寛ぎ体勢に入る。周りをざっと見渡す限り顔見知りの人もいないし、この人が留守番つてとこか。単に人に声を掛けるのを面倒臭がつているだけかもしれないが。

「まあ時間までたつぷりあるし、そこら辺でのんびりしといて構わないぜ」

「では時間まで、私たちも他に取り込まれた人を探すのに協力させて貰えますか？」

責任感の強そうなYASUさんらしい台詞だが、Aseiliaさんは首を振って制止した。

「ゲーム画面だと見慣れてるかもしれないけど、初めてだと結構迷うぜこの町。広さが尋常じゃないからな。それにあんたらはまだ状況を上手く説明出来ないだろ？ 噴水の周りの奴らはみんな同じ新入りだしさ、そいつらと交流でも深めててくれよ」

単に俺がこの人のことを穿った見方をしているだけなのかもしれないが、新入りを気遣うようでどこか適当な物言いのようだ。YASUさんとPON太さんは少し困ったような表情をするが、彼は意に介す様子は一切見せない。

「あ、シエル。お前とはこれから少し打ち合わせをしたいんだが」

「打ち合わせ？ はい、いいですけど……」

横目で二人が顔を見合わせて軽く頷く姿が見える。彼らも A s e l i a さんの意図を何となく了承したらしい。二人共、ここら辺は流石に大人だ。Y A S U さんと P o n 太さんは、この場を離れ噴水の周りに集まっている冒険者達に話しかけていた。

「ちつと印象悪くしたかな？」

離れた二人を見て A s e l i a さんが軽く苦笑いする。

「分かってて言ってたんですか…」

「まあいいさ、仲間はこれから腐るほど増える。お前の仲間とはいえ、誰も彼もと深く付き合うなんて面倒くさくてしょうがねえや」

それって、色々ダメな人の台詞だよ A s e l i a さん。この人は根っからの性格が悪いとかじゃないんだろうけども… 多分。現状を考えて、他の人に悪印象を与えるのは得策では無い気もするが。

「それで？ あの二人を遠ざけたってことは何か大事な話でも？」

「おう、話が早い。お前はこんなことになる前から知り合いだし、間違いなく『シロ』だから言えることなんだけどさ…」

シロって何だ。何だか物騒な気がしてきたぞ。

彼は二人が近くにいた時とは比べ物にならないくらいの真剣な表

情になり、又ツとこちらが思わず身を引くくらいに顔を近づける。

「俺の仲間が殺された」

「えっ…!？」

耳元でぼそりと呟かれたのは、あまりにも唐突な上に色々と省きまくっている台詞。言わば核心を先に言っちゃうアメリカ的な？とにかく穏やかな事では無いのは確かだ。

「えっと… 殺されたって、誰が？ 誰に？」

俺は周りのことを考えて小声で尋ねた。A s e l i aさんも周囲にこの話が漏れないようにキョロキョロしながら話を続ける。こういう話は他に人がいない所でやった方がいいと思うのだが、それだと余計変に疑われるってことか？ 幸い噴水の音で声は少し通り難くなっている。

「お前は多分知らない奴だ。俺のこのゲーム始める前からのネット仲間だな。掲示板のメンバーには入っていないが、俺個人とはこっちに来てからも色々付き合いがあった。昨日までサイト達にも言うてなかったんだけどな」

「どうして俺達の仲間にならなかったんですか？」

「早いうちから他人があまり信用できなくなっていたせい、かな？ 多分。お前だってG i l l yとかいう訳解からん人がいるだろ。お互い様だ」

互い様… か？ 事情は色々違う気もするが。

「どうやって殺されたって知ったんですか？」

「昨晚4人で町を歩いている最中に殺された現場に出くわしたんだ」

「町中で殺されたってなら犯人は……」

「それは分かん。俺達が現場に付いた時は時既に遅しだったよ。右肩から左腰にかけて真つ二つ。そいつは鎧も着てたし、鋭利な切り口から見ても冒険者……恐らくはファイターであることはほぼ間違いないって言われてたな。……ああ、安心しろ。お前やG i l l e yとかいう人は微塵も疑っちゃいない。現場は互いに剣で一線交えていた感じの惨状だったからな。ソーサリーやシーフはすぐに容疑者から外れる」

何とも複雑な心境だが、とりあえず俺と付き合いの長い人物の中に容疑者はいなくて少しほっとする。もちろん自分が疑われてないことも含めて。

しかし、剣で一戦交えた、か。何でそんな事態に？ こっちの世界で死ぬことは、現実でも死ぬことだ。初見でもない限り、自らの命を危険に晒すようなことは普通しないと思うが。

……いや、違うな。一つの仮定が当たれば当時の現場の状況を簡単に組み立てられる。

「……それは本当に冒険者がやったんですか？」

「少なくとも、そいつはレベル47のファイターだ。この町のモブや低レベルのキャラにそう簡単にやられるような奴じゃない」

「モンスターという線は…」

「これだけ大きな町、しかも町の真ん中の一角だけで起こったんだぜ？ モンスターならもつと大騒ぎになっているさ。それに被害者だつてもつと出ているだろうし。人に化けられるモンスターでもいたら話しは別だけど」

確かに今のところそんなモンスターの存在は確認されてないし。それに人を襲うにしても町の内側でやるなんてそれこそ意味が分からない。変幻自在のモンスターとか考え出すとキリがないが、動機や周囲の状況を考えると人間の仕業だという結論に達してしまう。ちようどこの世界では謎の連続殺人事件真つ盛りだしな。

「目撃者とかはいないんですか？」

「それらしき人を含めて殺されてる。まだ年端もいかない男の子とかな。おまけに近所で一家丸々殺害されたつていう事件があつたらしくて、さらに医者の話ではそつちの方が先に殺されたみたいで…」

「…姿を見たから殺した」

「そう思つよな」

「はあ〜」とA s e l i aさんは遠い目をしながら溜息をつく。

気がつけば犯人が人でないという僅かな可能性に望みを託す自分がいる。あくまでも比較としてだが、知能犯のモンスターがやったという一辺倒の考えを持てたらどんなに気持ちが良いことか。

何のために人を殺す必要があるのか。今となつてはその動機がある程度推測出来てしまうのが何とも虚しい。Gillyさんが言っていたな、人を殺すことに慣れてしまつたらつて。

一度やつてしまうと歯止めが利かなくなる、か。

今の状況を考えればこんな考えを持った人間がいてもおかしくないのだ。いや、確実にいる。俺だつてこっちの世界に取り込まれたのが自分だけだったなら、こっちから世の中の蛆共を成敗してやるうなんて行動を起こしたかもしれない。

でも他に同じ状況の人が、しかも大量にいたとなれば話は別。あまりにも簡単に完全犯罪を起こせる方法を複数の人が持つていているということは、常に自分も命を狙われ続ける一人になるという事だ。犯人もそれが分かつていないわけがないだろう。慣れると同時に引っ込みがつかなくなっているのかもしれない。

「でもどうしてそんなことを俺にだけ？ そんな重要な事だつたら……」

「容疑者は腐るほどいる。新入りの奴にそんなこと話してみろ。即パニックになるぞ」

ああ、なるほど。一応この人なりに色々考えてはいるんだな。寧ろ俺をそこまで信用してくれてありがとうございます。

「今日の集会：下手な事を言い出す奴がいたら一気におじゃん、どころか、一転して最悪の状況になるんだ。だからお前には早いうちに釘指しと思うって」

「確かに、疑心暗鬼にでもなつて味方同士でいざこざが起きるよう

になったら…」

「そゆこと。つーか、集会企画したれんちえふって奴ほんと空気読めねーよな。俺らのメンバー以外にそう思ってる奴絶対にいるっつーの」

ああもう少し見直したそばから、この人ぶっちゃけすぎ。でも気持ちだけは分からんでもない。今まで味方と絡むのは少人数ずつだったからよいが、これだけ大人数になるとあまり伝えたくない情報を隠すのも難しい。相手の胸中も分かり難いし。

これまでの俺達は互いに100%信用しているというわけでもないが、つかず離れずの微妙な距離感を保っていたわけだ。探り合っではいるが、決して表には出さないという関係を壊さないようにしていた。

強固な結束は強い力を発揮できるが、その分崩れた時の代償も大きい。

「ということはAseliaさん。これはさっきのYASUさんの推理なんですが…もしかしたらこの世界にはデバツガーとかもいるんじゃないかと」

「言、う、な、よ？ 少なくとも集会中は」

やっぱりっすか。

34話 これだけをまとめるには（後書き）

そろそろ話を盛り上げたいなあ

35話 これは…最悪だ…

この世界基準で午後3時くらいの町の大広場。

広場の中心の噴水の周りには大量の冒険者たちが集まっていて、周囲のモブ一般人の注意を引いていた。冒険者というのは一応この世界の価値観では一般人の（僅かな畏怖も含めて）憧れでもある立場ではあるのだが、ここに来ている人達は皆周りを気にして落ち着かない。今日という日から、百戦錬磨の戦士も中身はただの一般人になっているのだから。

俺は後から来たサイトさん達とも合流し、集会の運営側の準備をしていた。具体的に言えば関係者の誘導とか。寧ろ部外者を遠ざける仕事の方が多かったが。だって総勢100人近いもんなあ。こんな真昼間から何事だと野次馬が集まるのも無理はない。

「シエルさんお疲れ様。はいこれ、差し入れよ」

後ろから声つと、この艶のある女性の声はにいにいさんだ。彼女は紙コップのような容器に入った飲み物を差し出してくれた。中身は…桜桃色の液体。一体何のジュースだろう。

「甘酸っぱくて結構いい感じよ。アセロラ？　みたいな感じ」

側面に付いているストローを取り（もう突っ込まない事にする）、軽く氷をかき混ぜながら飲んでみる。うん、何も聞かされずに飲むと表現に困るが、濃いめのアセロラドリンクという言葉が結構的を得ていると思う。この酸っぱさが先程からモヤモヤしている頭の中

をいい感じにリフレッシュしてくれる。流石はリアル女性のいにいさん。

「いやゝ美味しいです。ありがとうございます」

「どういたしまして」

少し前の方で喧騒が大きくなる。どうやら集会の発案者のれんちえふさんが前に立ったみたいだ。その他古参掲示板メンバー何人かで人数と名前の確認を取っており、数えやすいようにきちんと整列まで促している。何だか中高の時の体育を思い出すな。

「そっといえばシエルさんもあの話聞いたんだよね…」

集団行動をぼんやり見ている横からいにいさんが語りかけて来る。彼女の視線も同じく前を向いている。アバターは美人だが、美人って何となく感情が読みとり難しい気がする。

「A s e l i aさんの言ってたあの殺…死体を見つけたって話ですか？」

「ええ、本当に酷かったわ… A s e l i aの知り合いもそうだったけど、近くに倒れていた男の子なんて… 女だから血を見るのは大丈夫だと思ってたけど、あの惨殺体はもう無理。未だに目に焼き付いてこの夢が覚めても頭の中から離れないの…」

いや、多分それは俺も無理だと思います。少年の惨殺体とか実際に見たらトラウマものだわ。それを会話に出せるだけ凄いのと思いますよにいにいさん。

「私さ…現実では俗に言う『喪女』ってやつだから、こっちに来てからこんな美女になって、男の人から一杯声をかけてもらって、それを軽くあしらったりして…前にも言ってたけど少し楽しんじゃってたのよ。如月さんも死んだっていうのに…」

まあ俺だつてこの体でG行為やってたくらいだし。外に出ると危険、町の中にいると安全、そう思えば現実の自分とは違うこの体で色々やってみる気持ちは分かる。

「ここはやっぱり現実とは違う所だから…」

「そう。でもこの世界に入り込もうとすればするほど現実を思い知らされるのよね…」

取り込まれたのが一人、もしくはほんの少数ならそこはファンタジーとなる。だが、同じような境遇が何人も出てくると、たちまちそこには現実世界のルールが持ち込まれる。生まれて育った世界の文化、習慣、思想を急に変えることは出来ない。ずっとこのままでいられるなら話は別だが、毎日、しかも強制的に行き来しなければならぬ。頭の中から現実が消えることは絶対にない。

「俺も、やっぱり女の子にはなれないなって思いますよ。どうせだつたらイケメンのアバターのほうが、こっちの女性にモテモテでもっと楽しめたかなーって思うくらいです」

「それだとかつちの世界では楽しめるけど、朝起きて鏡の前の自分の顔を見た時の絶望感といったら…」

「う…」

なるほど、これがこの人の言っている現実を思い知らされるって奴か。変身願望はあくまでも願望で留まるべきなのだ。コスプレとかくらいで。一日の半分ずつを別の肉体、さらに都合良く変えた人格で過ごすとなると、どっちが本当の自分だか分からないようになる。もちろん、普通の人間なら劣っている方の自分を次第に認められなくなっていくだろう。そして自分の理想を詰め込んだキャラクターと同化していく。しかし、そこは決して現実では無い。

「結局、男の人が好きなのは『にいにい』であって、私自身じゃないのよねー」

こんな自虐的な嘲笑すらも絵になる彼女の整った顔が今日は酷く歪んで見えるような気がした。…いや、歪んでなんかいない。これが本来の人間という生き物の顔だ。美しいとか、可愛いとか、惚れるとか、そんな物を超越した暖かみ・安心感というか…これが本来のあるべき姿なのかもしれないとも思い知らされる。

「え〜！ すいませ〜ん！ ちょっと静かにお願いしま〜す！」

辺りにツンデレ委員長長風の良く通る声が響いた。黒髪ロングの姫カットの少女、あれはくろね子さんだっけか？ こっちで見たのは初めてだ。彼女（多分彼）の声と共に、辺りの喧騒は一斉に収まる。5列横隊に整然と並んだ姿恰好も様々な冒険者の姿。後方から見ているこちらにとっては偉く滑稽に見える。みんな日本人なんだなあ。

その後噴水の淵の上にれんちえふさんが昇り、一段高い所から集まった人達をぐるりと見渡す。やや緊張した面持ちながら、よく通る声で新しく集った人達に現状と、この掲示板同盟（仮）のことにについて話し始めた。もちろん、この世界と現実世界の繋がりに関し

ても。その時は更に真剣味が増しているようであつた。

「……ですので、皆さんはくれぐれもこの仕組みを使って殺人などを起こさないようにしてください。少なくともこれは決して完全犯罪と呼べるものではありません。この事態を引き起こした何者かによつて、私達の行動が監視されている可能性もあるのですから」

子供たちに念を押すかの如く、れんちえふさんは何度も悪事には一切手を貸さずにまずこの状況を何とかする方法を考えていこうと繰り返した。新入りの人達も表情こそこの位置からでは見えないが、特に私語もないので割と真剣に聞いているのだらう。

「……はい、私からは以上ですが、何か質問などはございませんか？」

説明が一通り終わり、れんちえふさんも一息ついていた所で、聴衆の中からすつと手が挙がるのが見えた。今の俺の身長が低いせいもあるのか、容姿は他の人に隠れてわからない。

「はい、なんででしょうか」

「俺達の行動が監視されてるかもしれないって言つてたけど、それだったらこの集会とかも見られてたりする可能性もあるんじゃないか？ 確認しとくけど、みんなで手を組めば絶対に安全が保障されるんだよね？」

男の人の声だったけど、少し語尾が震えているようにも思えた。

「はい、少なくとも今のところは。だけど絶対に安全とは保証できません。現実でも絶対に交通事故に遭わないってことは言いきれないでしょ？ 気を付ければある程度の安全は保障されますが」

「事故で死ぬくらいのリスクも当然あるわけですね？」

他の人が言葉の先を言う。それに対してれんちえふさんも黙って頷く。

すると今度は挙手もせず他所から声上がる。

「でも、実際に人を殺しまくっている奴もいるんだろ？ そいつらに命を狙われたりとかしねーのかよ？ 口封じとか言ってるさ」

「それを防ぐために、大勢で同盟を組むわけです。向こうが何人いるか知りませんが、これだけの数がいれば迂闊に手出しできない。そういう状態を作りたいんです」

れんちえふさんは毅然とした態度で応じる。まあ言ってることも正しい。手出し出来ない、というのが自分達と同じ境遇である人しか適応されないのが痛い。

「でも逆に組んだせいで、闇討ちとかされたりしないの？」

「その可能性は…否定できません。しかし少人数で勝手な行動を取るよりは安全だと思いますが… 現に今まで被害者もないわけですし」

隣でいにいさんが声を洩らしながら複雑な表情をする。…ああ、れんちえふさんにはまだ言って無かったんだな。彼女達のパーティー限定か。大勢で組めば危険は減るだろうが、口封じで殺される可能性は大いにある。この事を言ってよいものかが悩みどころだ。

御新規さん達の中でややざわめきが起こってはいるが、手を組む

ことに否定的な声は聞こえない。彼らにとってはまだ右も左も分らない状況なので、とりあえずはみんなと一緒にいる方が安全だと結論付けたのだろう。俺が同じ状況だったらそうする。

そんな中でまた一つ手が挙がる。

「この状況を何とかする方法を考えるって言うてたけど、何か見込みとかあんの？」

「現在の所、製作者側にこのゲームを止めさせようって話は出ていますが…」

「それで本当に解決出来るのかよ？」

最後に手を挙げた男はやや反発気味というか、周りの人たちをあまり信用できないでいるような感じがした。少し口調も乱暴な感じだ。

「大体こういう状態を引き起こしているのが本当に製作者だとしたら、こんな大勢に決起されたら困るんじゃないのか？俺だったら、そうなる前に普通何とかしてあんたらのような連中を黙らせると思っけどな。監視されてるかもしれない…んだろ？」

男はさらに語句を強める。

「それによつ、あんたらこんな集会なんて開く手間があつたら何でそうなる前に俺達がゲームをやるのを止めなかつたんだよ」

「私達は色んな所でこのゲームを止めるように言っています。しかし、実際は警察沙汰にもなつたりして上手く伝える事が出来なくて

： 当人にでもならない限りゲームの中に入るなんて話信じてくれませんか」

「俺はよくこのゲームの雑談掲示板とか利用するけどそんな話見たことなかったぞ？ お前ら本当に伝える気あんの？ 色んなサイトで拡散とか、町中でデモったりとか、もっと色々出来るじゃないか」

「それがゲームに対するいわれの無い誹謗中傷として片っぱしから処理されてしまうのが現状なんです。だからそのためには大勢で協力することが必要なんです。大勢でゲーム差し止めの声を上げれば、世間も無視することは出来ないでしょう？」

「今の時点で世間に狂ってるって言われるのをビビってるやつらが、会社に抗議とか本当に出来んのかよ？ 人数ってせいぜい数十人から百人程度に増えるだけじゃないか。大して変わんねえよ」

不毛なやり取りはしばらく続いた。周りも茫然としてその様子を眺めている。

「何かあいつ感じわるー」

隣でににいさんが呆れたように呟く。

「一部正論も交じってますけど、要は単に煽ってるだけですもんね。ここで言う必要も無いし」

「絶対現実だと荒らしとかやってる奴よ」

煽りを入れている奴は文句を言っている割には新たな解決策を提示しようとする気配は無い。単に自分が巻き込まれた事に対する腹

いせをぶつけているような気がする。れんちえふさんのみんなをまとめるという行為は解決策にはなっていないかもしれないが、対応策としては簡単に批判出来るものではない。

「私達に協力するかどうかはあなたの勝手です。強制する気はありません。ただ、皆さんの不安を無闇に煽らないでください」

「あんたらの言ってることとやってる事が一々矛盾してるからそれを指摘してやってるだけじゃねえか。それによっ…」

男は一息おいて吐き捨てるように言った。

「あんたらの中、いや、この中にゲームの製作者が交じってる可能性とかもあるんじゃないのか？ レベルが上がればこっちに来れるんだろ？ 当然作り手もテストプレイとかやってるだろうしな、いない方が不思議だ。まさかそんな事も考えていなかったなんて言わないよな？」

「それは…！」

俺の位置から見える古参組の表情が一気に曇るのが見えた。駄目だ。これ以上言わせたら不味い。危険察知と人の不安を掻きたてることはまた別物。そういう事はある程度信頼関係が出来てからでないといと…

気が付けば聴衆のざわめきは消えていた。新規の人達は皆口をつぐんでいる。他の古参の人達も事態を收拾しようと動きを見せようとしていた。

(……………?)

一瞬、俺の頭上から風を切る音がした。俺が上に気を取られていた瞬間、隣から聞こえたにいいさんの擦れた悲鳴で我に帰る。その直後、大きな水音が周囲に響く。

辺りは騒然となっていた。そしてれんちえふさんの姿も見えない。

「伏せろおおーっ！」

A seliaさんの怒号が飛び、全員が一斉に身を屈める。俺の頭上からさらに風を切る音が何本も聞こえてくる。身を地に付けた瞬間、目の前ほんの3mという所の石畳を抉るように何かが突き刺さる。

これは…矢？ どこから飛んできた？ 後ろ？

「プロテクションフィールドッ！」

プリーストの誰かが、俺の少し後方に物理防壁を展開する。俺はすぐさまその魔法の「壁」で矢が弾かれる様を目の当たりにする。

「畜生！ どこから撃って来やがった！？」

A seliaさん与其他何人は武器を構え、戦闘態勢に入っていた。俺も物理防壁を信頼し、ウィザードロッドを構える。距離が分からないなら一応フレームレーザーか？

…だが、次の矢はいくら待っても飛んでこない。こちらが位置を割り出す前に逃げられたのだろうか。

「テルミさん！ 一応まだ防壁は貼り続けてくれ！ いつ飛んでくるか分からない！」

「れんちえふは！？ 回復魔法で治せないのか？」

「…駄目です、効きません。即死…だと思います」

「蘇生魔法とかねえのかよ！ くそっ！」

俺はおぼつかない足取りで噴水まで向かう。怯える人を掻きわけて行くと、その場で茫然と立ち尽くすサイトさんを見つける。彼の足下にはマントのような布を上半身に掛けられたれんちえふさんと思われる人物が横たわっていた。

「サイトさん… れんちえふさんは…」

「鼻から、上…」

彼はそれ以上言わなかった。でもそれだけで俺は十二分に理解出来た。

噴水の水の一部が赤く染まっている。更に水面に浮かぶ肉片のような物がその惨状を物語っていた。

35話 これは…最悪だ…（後書き）

更新間隔がちょっと空いてしまいました。

同時に字数もどんどん増えてます（笑）。

始めから読んでくれている人はもう気にしないよね！

36話 宣戦布告というやつですか（前書き）

投稿が遅れて本当にごめんなさい（焼き土下座）

36話 宣戦布告というやつですか

「ちょっと！ みんなどこに行くつもりですか！？」

周囲が騒然となっている中、くろね子さんの必死な声が聞こえてくる。

「俺は…抜けさせてもらいます。あんな風に狙われたんじゃないでしょうか……」

「私も。組む方がかえって危険な気がしてきました……」

「……………」

彼女（彼？）の質問に答えるのはまだいい方で、多くの人は無言で逃げるようにしてその場を去って行った。くろね子さんは口惜しそうに、文字通り地団太を踏む。ヘタレ属性の女の子は割と好みだが、今はそんな事を考えている場合ではない。

「こんな状況になることが撃つて来た奴の狙いって……こっちに来たばっつかじゃそんなこと考えないか」

後ろからサイトさんが呟く声が聞こえる。彼は先程からかがみ込んで、虚ろな目でれんちえふさんの遺体をじっと見つめていた。

「おまけにこの中に製作者がいるかもしれないなんてぶちまけられたからなあ。おい、そろそろ防壁を解除するから、あんましばやばやするなよ」

A s e l i aさんがやって来てサイトさんの肩を叩く。サイトさんは遺体の前で手を合わせて軽く黙とうすると、立ちあがってA s e l i aさんに小さく「大丈夫だ」とだけ言う。

「…で？ そのことをぶちまけた本人は？」

「どさくさにまぎれて逃げられちゃったよ」

A s e l i aさんが肩をすくめる。だが、表情は少し暗いままだ。あまり好んでない人物とはいえ、目の前で悲惨な死に方を見せられたら誰だってそうなるのは当然だが。遺体は冒険者ギルドに連絡して引き取ってもらおうようにすること。とりあえず俺達はすぐにここから引き上げたほうがよさそうだ。

幸いだったのは俺達が集まる掲示板のパスワードをみんなにまだ教えていなかった事。よってここから外れた人達はあの掲示板を除く事は出来ない。情報共有はあくまでも信頼の証でもあるのだ。悪く言えば互いが互いに監視出来る状態、それが掲示板メンバーであることの暗黙の了解でもあった。

「これからどうするんですか？」

「とりあえずどこかに避難して次の方法を考えましょう。それに、大勢でいる方が安全だと考える人はそのうちきつと出てくるはずですよ」

×ぼんさんも浮かない顔を解けずにいたが、気持ちには既に次のやるべき事に向かっていているようだ。後ろの方で防壁を貼ってくれたテルミさんがこちらが軽く注意を促し、そして光の壁が消滅する。まづは、とつとこの場を離れたほうがよさそうだ。

「だな、避難場所は…ちょっと狭いけどいつものところにするか」

「了解です」

ちょっと狭い、いつものところ「宿屋アートマー」だな。20人入れるかどうか分からないが、他の人も大部屋を借りてるので分けて入れようとのこと。その場を立ち去る前にざっと広場を見渡してみたが、冒険者と思われる人影は見当たらない。寧ろ俺達の他に人っ子一人いない。モブの見物人含め、もう既にみんな逃げ出した後か。

大勢の人が集まる場であんな惨事を見せつけたとなれば、かく乱効果は十分すぎるだろう。もしかしたら、この集まりにいちやもんをつけた人は矢を撃つてきた奴の仲間かもしれないし、あの煽りも俺達を互いに疑わせるためにうった芝居なのかもしれない。…今更こんな事を考えても後の祭り、か。

俺達はやや小走り気味に広場を離れ、町の中央通りに向かう。こならモブキアラの人通りも多いし、隠れる場所も多い。逆に闇討ちもやり易いかもしれないが、複数で適度に固まって動けばひとまずは安心だ。

「しかし、あんな簡単に殺つてくるとはな…」

周囲を警戒しつつも、A s e l i aさんが眉間に皺を寄せながら苦々しく言葉を吐く。いつもは妙に楽天的かつ皮肉屋な人だが、流石に今回の出来事は堪えたらしい。

「おそらく、こっちで散々殺人とかやっている奴だろうな… もしくは俺達をこの世界に引きずり込んだ張本人か…」

サイトさんの意見には概ね同意する。これまで想定に留まっていた俺達に敵対する存在が、ついに明確になったのだ。これからは奴らに対しての対応も考えていかなければならない。少なくとも敵は俺達が大勢で組むのを望んでいない。となると、あまり頭数には自信が無いのか、それとも俺達を協力させずに何かさせたいのか：

「今考えても仕方ありませんよ。とりあえずは戻って一息ついてからにしましょう」

よくもまあ一人目の前で殺されたというのにこんな風に冷静でいられるものだ。自分含めて。現実世界で人が死ぬとやるせない気持ちになるが、こつちの世界だとどうも現実味が薄れる。その反動で朝起きたらまた頭がモヤモヤするんだろっけど。

みんな同じことを思っているのだろう。

それ以降、俺達は宿に到着するまで終始無言になっていた。

ほぼ同時刻。

宿屋アートマーの一室にカーテンの隙間から外を覗き込む男がいた。銀色の甲冑に身を包み、黒い短髪の一見爽やかな剣士。彼は一通り外の状況を確認すると、緊張を解くかのように胸を撫で下ろし、窓から目を離して木製の椅子に座り込む。

「何だか…とんでもないことになりましたね…」

彼の目先にいたのは茶褐色の体毛に身を包んだ獣戦士。雄々しい体格とは裏腹に彼の体は縮こまり、ベッドに腰掛けながら軽く震えてすらいた。

「ごめんなさいYASUさん… 私一人で逃げ出したりなんかして…」

獣戦士から出る声は、顔のイメージ通りに低く野太いものであったが、しゃべり方は弱々しく、そして女々しいものであった。そのあまりのアンバランスさに軽く戸惑いつつも、YASUは目の前の仲間を何とかしてなだめようとしていた。

「いえ、あの場から逃げたのはPon太さんだけでは無いですし。それに私だってあなたについて行く形になりましたからね。…あんなことが目の前で起こったら誰だって逃げ出したくなりますよ」

YASUは軽く笑ってみせるが、すぐに逆効果だと気づき、口を閉じる。

あの惨劇。

彼らの頭上を鋭い衝撃が走り、眼前に立っていた人物の額を直撃。矢は男の頭部を易々と通り抜け、辺りには赤黒い脳漿が飛び散り、男はそのまま物言わぬ肉塊と化してしまった。

この間わずか数十秒。しかし、彼らにはその時の映像がコマ送りで頭の中に焼き付けられていた。

「この世界で死んだら現実でも死ぬって…本当、でしょうか…？」

P o n太が震えるような声で言う。

「私には分かりませんが、現実で怪死事件が起こっているのは事実ですし、この事が本当に原因なら全ての説明がきます…」 シエルさんも言ってることですし…」

もしも、これがただの夢でこっちの世界でどんな悲惨な死に方を迎えたとしても、現実では何事も無かったかのように朝を迎える可能性も… それは淡い期待に過ぎなかった。

彼らは始めからいきなり情報を与えられ過ぎた。自分自身で身を持って知った情報がほとんど無い。現実で目が覚めたら元の世界に戻れるという救いのある話でさえ、完全に信用する事が出来ないでいるのだ。ただただ、今後の不安だけが彼らの頭を支配していた。

「P o n太さん、私は思うんですが… やはり今はシエルさん達と協力した方がいいと思います。あの集会を襲って来た人達の動機もまだ明らかではありませんし… またいつ襲って来るかも分かりませんからね…」

「…組もうとしたから襲って来たんじゃないですか？」

「それだと逆に我々が組むのを恐れている、という捉え方も出来ません。明確な動機は解りませんが、このまま二人でいると安全という保証もないんですよ。だったら、まだこの世界に慣れている人達と一緒にいた方が…」

組んだ方がいいのか、そのままの方がいいのか。どちらとも言えない。今は不確かな考えを積み上げることしか出来ない。ただ信じられるのは目の前で起きる現実のみ。

「…そうですね。大勢とは言わないまでも、せめてシエルさんとは…」

Ponn太は力なく答えるが、先程の震えたような声ではなかった。

「ええ、決して長い時間ではないですけど、今まで一緒にやって来た仲ですから」

Ponn太の後押しを受けて、YASUの言葉にも勢いがこもる。ようやく彼本来の雰囲気に戻って来たようであった。

「よし！ そうと決まれば、早速でもシエルさんを探したい所ですが…」

「どうやって探すんですか？」

YASUは少し考えた後、すぐに何かをひらめいたかのように頷く。

「確か上の階は大人数で泊まれる部屋でしょ？ もしかしたら彼らもこの宿屋を利用するかもしれません。…いやゲーム内のこの町の宿屋はここだけですから可能性は結構高いですよ。入る時に名簿に名前を書きましたよね？ そこから割り出せるかもしれません」

「別の名前で泊まっていたら…？ 現に私は偽名使いましたし…」

「あー…… ま、まあ、可能性は無きにしもあらずですよ！ 早速他の人のが見れるか調べて来ます！」

あくまでも前向きなYASUを見て、思わずPonn太も笑みがこぼれる。

「本当に助かったわ… YASUさんがいてくれて… 自分一人だったら、きつと今頃パニックでずっと震えてたと思う…」

「Ponn太さん… 女性なんですよね？」

Ponn太は少し陰しさの取れた顔でゆっくり頷く。

自分はまだ同じ男の体だからいいが、その獣の体、しかも 肉体では色々と不便というか、気持ちが悪いだろうとYASUは気の毒に思った。低く野太い声で女口調というのも滑稽であるが、それ以上に別の人間を演じるのが大変そうだと同情を禁じ得ない。

「でもYASUさんばかりに頼ってられないわ。私も、シエルさん達の言う通り朝になって元の世界に戻れたら、マスコミにこの事を伝えようと思うの」

「マスコミですか… 確かに世間は変死事件が多発してるし、証拠が無くても話題に取り上げて貰えれば状況が変わってくると思いますが… 信じて貰えるでしょうか？ そもそも既に他の皆さんがやられているみたいですし」

「報道側に知り合いがいるのよ。彼なら私の言う事がある程度信じてくれると思う。証拠は掴めなくてもゴシップにでもなれば…」

YASUは大きく頷く。

この事態を何とかするにしても、取り込まれた人間だけでは人数

が少なすぎる。まずは現実の世界の人達にこの状況を知ってもらえれば、「この世界に取り込まれていない味方」を作ることが出来るかもしれない。

「それは妙案ですよ」

「でも、まずは元の世界に戻らなきゃ…」

「そ、そうですね…」

現実世界での行動方針は決まったとはいえ、急に手持ち無沙汰になつてしまいYASUは少し落ち着かなくなる。部屋は一人用にしては割と広いため窮屈感こそ無いが、男女がテレビも何も無い空間に二人というのは互いに少し気まずさを感じさせた。

やがて少し居たたまれなくなったのか、YASUは再び立ち上がり入り口の方に向かう。

「…ここで、このままじつと待つておくのもなんですし、今からフロントで客が確認出来ないか見てきます」

「大丈夫ですか？」

「宿の中を少し見て回るだけです。すぐに戻ってきます。あ、でも一応鍵は閉めてくださいね」

そう言つて微笑みながらYASUは部屋を出て行く。

部屋に一人残されたPon太は、ドアの鍵を閉めた後、大きく息をつきベッドに倒れ込んだ。手や頬をいくら力任せにつねってみても、夢から覚める気配は一向にない。股をまさぐると、現実の自分

には無い物が付いていて強い戸惑いを覚える。こんなことを続けている訳にはいかないと、すぐに手を頭の後ろに回し、仰向けの姿勢でぼんやり天井を眺める。

（シエルさん達が言っていたように、本当にこの世界が原因で現実の人間が死んでいるとしたら… 悪用する人が出るのは当然ね…でも…私はそんなこと…）

P o n 太は、いや、白岩由貴子はごく普通の専業主婦であった。幸い男運には恵まれ、給料のいい新聞社に勤める男と結婚する事が出来た。夫婦仲も割と円満、姑問題も特になく、小学生の息子も大人しい。彼女はそれなりに、だが、何か満たされない生活を送っていた。それを埋めるかの如く家事の合間に始めたネットゲームだが、いつの間にか彼女の生活の一部となっていた。30過ぎになってようやく日々の楽しみを見つけた矢先の出来事である。

（このことが外に漏れれば大騒ぎになるでしょうね。ちょうどあの人もほどほどに正義感はあるし。これで犯人がわかったら… 表彰ものかしら？ いや、下手すれば私も変に疑われるかもしれないわね… どちらにせよ、ゲームで死ぬなんて馬鹿馬鹿しいわ…）

自分が折角見つけたささやかな楽しみ。面倒くさい御近所付き合いなど忘れ、素性を隠して外の人とふれあえる機会。それを邪魔するなんてとんでもない。ゲームの中の住人に慣れるなんてまるで夢のような話ではあるが。

そんなことを考えていると、部屋の戸をノックする音が聞こえる。

（誰！？）

P o n 太は思わず身構えて武器に手をかけた。

『P o n 太さん？ 私です』

ドアのノックの主はY A S Uであった。P o n 太は肩の力が一気に抜ける感覚を覚えた。

「Y A S Uさん、どうでした？」

Y A S Uはその問いに答える間も無く、ややばつの悪そうな表情を浮かべながら部屋の中に入って行く。何やら顔をキョロキョロさせて何かを探しているようにも見えた。

「一体でどうしたんですか？」

Y A S Uは屈んでベッドの下も探り、顎に手をかけて何やら考えるような仕草を見せる。

「下に行ったついでに何か買おうと思ったんですが、財布を忘れてしまったみたいで… どこに置いたかな… もしかして落としたのかも…」

「？ どんなのですか？ 私も探しますけど…」

P o n 太も布団をひっくり返して手伝おうとする。Y A S Uは生返事をしながら淡々と自分の荷物の中身を出していく。

「そういえばP o n 太さん… 報道関係に知り合いがいるっておっしゃってましたけど、本当に信用なんてしてもらえますかね…？ やっぱり少し難しそうな気がします…」

つい先程まで手を上げて賞賛していたのに、YASUは急に訝しげな口調になる。

「大丈夫ですよ。実は私の夫の事なんです。名前は出せませんが、とある新聞社の報道副部長で… 最近の怪死事件のことも凄く気にしてたから、紙面には載せなくても裏で調べて貰う事が出来るかも。向こうも今までお手上げ状態でしたし…」

「なるほど」

瞬間、人の熱が消えたような声に、Pon太は違和感を覚えた。

彼女の本能が得体の知れないものを感じ取り、男の後ろ姿を凝視する。YASUは「あつたあつた」とゆっくりと財布らしき袋を取り出して、にこやかに振り向いて立ち上がる。その表情を見てやっぱり自分の気のせいか？ と、ほっとした瞬間。

「……………え？」

ふっ、と目の前の男の姿が消える。何拍か置いて自分の胸の衝撃に気づく。

「あ…………？」

男は自分の目下にいた。彼が右手を引くと、赤黒い液体のついたナイフが彼女の眼前に晒される。そして、遅れて彼女の痛覚が起動する。

「う…！ あ、あ…………？」

息が、吸えなくなる。

自分の胸から次々に血液が噴出し、思わず両手を当てる。

「夫の稼いだ金でのうのうと生活し、自分はネトゲ三昧か。いーね、主婦って奴は」

目の前の男から、嫌悪感たっぷりの見下したような低い声が叩きつけられる。

「……………」

もはやそんな言葉すらも彼女の耳には届かなくなっていた。床に蹲ったまま、声すら出せない。息をしようにも気管に次々に血液が流れ込んできて空気をせき止める。口からも血が漏れ、乞うような目で男を見るが軽く足蹴りされる。

（な…ん、で…？）

「キメエんだよ、ババア」

今度は男の剣が彼女の脳天に振り下ろされ、部屋の中に鈍い音が響く。頭蓋骨に刀身が引つかかり、それを引き抜こうと変に動かし、たせいで、更に頭部は醜く歪み脳の破片が引き裂かれたように辺りに散らばった。

「うえっ… ま、まあ、現実では平和的に病気で死ぬだろうしな…」

男は足元の血まみれの剣をその辺に適当に放り投げ、血まみれの服装のまま急いで部屋を出る。ちょうど廊下を通りすがっていた清

掃員に何事かという目で見られたが、彼女を突き飛ばしそのまま便所へと駆けこんだ。

「あ…YASUさん？」

宿屋の受付でちょうど冒険者達が顔を合わせる。男はほっとした表情で、名前を読んだ魔法使いの少女を迎えた。

「シエルさん！ よかった！ …あ、いや、すみません。勝手にあの場から逃げ出したりして…」

申し訳なさそうにYASUは頭を下げる。冒険者の戦闘にいたxぼんもあの状況なら仕方ないと返す。

「本当に身勝手な頼みだとはわかっていますが、やっぱりあなた達に同行させてもらえませんか？」

xぼんはシエルのほうを振り返ると、彼が頷くのを確認してYASUに握手を求める。

「やっぱりそーゆーもんなの？」

後ろにいたAseliaが小声でサイトに問いかけるが、彼も目を瞑りながら軽く頷いた。

「本当に… ありがとうございます。…こうしちゃられない、実

はP o n太さんも一緒なんですよ。彼女も呼んで来なきゃ」

一行はまた少しずつ人が集まって来そうだと、やや複雑な気持ちの入り交じった安堵を覚えながら、彼の部屋へと向かった。

36話 宣戦布告というやつですか（後書き）

話の途中での人称変更はやりたくなかったのですが…orz
これが一人称主体の最大の欠点ですなあ…

【番外編2】 俺の知らない所で

それは衝撃的な集会襲撃事件の夜のこと。

アカシックドミネーターの世界における西部：ギャドラクの町。まだクエストもほとんど実装されておらず、冒険者達にはあまり馴染みのない町であった。

その住宅街の一角に古ぼけた小さな店がある。唯一真新しい看板には工房と書かれてあるが店主はほとんど店先におらず、本当に商売になっているのか疑しい。たまに夜遅くまで灯りをつけたまま店が空いている時があるらしいが、これは単に店主が消し忘れているだけだとか。近辺の住人からも少し変わった人が住んでいるともしばら世間話のタネになっている。

この日の晩は店先はちゃんと閉められており、何事もない平和な夜であった……が。

店の前に背の高い男が立っていた。体はやや痩せ形、服装から冒険者だと分かるがそれにしては軽装過ぎる。服飾装備において金属が占める面積は非常に少なく、また目立った武器のような物も持っているようには見えない。短い金髪の上にはバンダナを巻き、余計なものを一切晒さないその装備。判り易いくらいに盗賊であった。

辺りは人通りが少なく静まり返っており、店の前で何かを確認し、顎を掻いている男を見て咎めるような者はいない。傍から見たら今にも盗みに入ろうとする姿だというのに。

だが、そんな予想を裏切るかのように男は店のドアをノックする。軽く、ではない。ノックというよりは叩くという表現の方が近いかもしれない。木製のドアが鈍い音を鳴らすが、店主が出てくる気配

は一向に無い。こんなことを繰り返すこと10分。

男はとうとう痺れを切らしたのが腰に身につけている道具袋から、針金の様な物を取り出し、ドアの鍵穴に差し込む。流石は本職とも言うべきか、ものの数十秒もしないうちに鍵は開いた。

「入るぞー」

ピッキング行為をやっておきながら挨拶、おまけにドアを内側からノックしながら堂々と男は店の中に入って行く。

店の中は灯りが付いておらず、時折床に落ちているガラクタのよなものに男は何度か足を取られそうになる。だがすぐに目が慣れたようで、男は灯りを点けることもなく、家の中をひよいひよいと回って行く。部屋に入っても周りをキョロキョロ見渡すだけで、物を取ろうとする気配は感じられない。

やがて、僅かに光が漏れている地下への階段を見つける。男は軽く頷き足音一つ立てず、階段を下りていった。

「よう」

「……：Gillyか。よくここがわかったな……」

階段を下りた先は何やらガラクタの山。しかしその空間は下手すれば上の坪面積よりも広いかもしれない。ガラクタの奥には首に手ぬぐいを巻いた職人風の若い男が座っていた。

彼は突然の来訪者の顔を見ると少し肩を落とし、再び周辺に散らばっている工具を取り、目の前のガラクタをいじり始める。

「実際苦勞したぜ、あんたを見つけるのに5日もかったしよ。ま

さか自分で工房開いているとはな… こんなシステムもこのゲームにはあるのか？」

「いや、これは俺がこつちの世界に来て譲り受けたものだ…」

G i l l yは目だけで男の了解を確認し、適当に丈夫そうなガラクタの上に腰をかける。

「で？ 何の用だ」

「決まってるだろ。この世界についてだ。お前なら色々知ってそうだと思うてな」

G i l l yは腰の道具袋から紙巻煙草を取り出し口にくわえる。

「止めてくれ。ここには引火性のブツもある」

「…そりや失礼」

既に手に取っていたマッチを袋に戻し、火の付いていない煙草をくわえたままでG i l l yは体勢を低めた。

「色々聞きたいと言ってたな。何で俺なんだ」

「そりやなんてったって、あんた製作側の人間だろ？ ミノルさんよ」

ミノルと呼ばれた男は手を止め、そのまま手元のガラクタを見つめながら無言になる。

「戦闘では全く役に立たないクリエイターなんて職業をここまでレベル上げて、おまけにアイテムの内部修正値まで知ってる時点だなあー」

G i l l yの視線が部屋の中を泳ぐ。

「…ふう、製作側の人間なのは認める。だが、俺はただのデバッグ作業のアルバイトだ。『会社側の人間』ではない。当然この現象についても何も聞かされていない」

「ふーん？　じゃあ会社の人間はこの事を知ってそうなのか？」

「既にバイトの何人かが申し出ている。だが向こうは知らぬ存ぜぬだ」

「……」

G i l l yの視点が止まる。ミノルはG i l l yの手元を監視するようにじつと見つめる。

「ただ…俺と同じアルバイトの奴も何人か姿を消している…ついでに、言うなら会社側のデバッガーもだ」

「同じ製作側でも容赦しないってか？」

「いや…そもそも作り手も本当に気づいてないという可能性もある」

G i l l yもミノルの視線に気づき、煙草を口から飛ばし腕組む。

「デバッグの仕事って会社に泊まり込みとかでするんじゃないの？」

「もちろん、現に俺はそうだ。だが、一般家庭のサーバー状態やプレイヤーの生の意見も聞くということで外部のバイトも何人かいる。今のところ、会社の中で死んだ人間はいない。会社側のデバッグーもちょうど家に帰ってから急に出勤してこなくなったしな」

「んじゃ、内部で人間が死ねば向こうも信じてくれるってことだな」
次の瞬間、二人は己の「獲物」を構え互いに向け合う。

Gillyは小型のボウガン。ミノルは一見ガラクタのようだが、銃ともとれる代物。

「冗談はよせ、Gilly」

「俺としては冗談のつもりなんだがな。ただし、返答によってはうっかり手が滑っちゃうか、も」

シーフとクリエイター。互いに能力値は戦闘専門の4職業には遠く及ばない。互いの武器が発射されれば、ただでは済まないだろう。その事もまたお互いの承知の上であった。

「…言うておくが、俺は本当に何も知らされていない。俺が死んだところで何か解決するとは思わない事だ」

「向こうが知っていようがいまいが『脅し』くらいにはなる」

Gillyは冷たくも重い声でそう言い放つ。彼のボウガンを握

る手は微塵の震えもなかった。それに対してミノルの獲物は銃口が定まらず、必死に狙いを捉えようとしているのが見え見えであった。

「……」

「……」

互いに無言。物音一つ無い地下室。

地下の湿気もあってか、ミノルの額と手は次第に汗ばみ始めていた。次第に息も隠しきれないほど荒くなっていき、銃のぶれも目に見えて大きくなっていく。Gillyの引き金を引く指と銃の狙い両方に気を向けねばならず、目の動きも落ち着かなくなっていく。

「…冗談もほどほどにしないと… 撃つぞ… 本当に…!」

「そうか、じゃあ止める」

Gillyは鼻で笑いながらあっけらかんとボウガン下げる。数秒遅れてミノルも銃を下し、大きく息をつく。

「お前が何も知らないのは本当みたいだな。もし知っていたら、何の躊躇も無く俺を撃ってくるはずだ」

「つたく…!」

Gillyはミノルの足元にボウガンを放り投げる。それを見てミノルはまた一つ大きな溜息をつき頭を垂れる。

「お前がこつちの世界で他のプレイヤーに干渉しようとする気持ちはよく解かる。なんたってロクな戦闘手段がないからな」

「ああ… 互いにな」

彼らがパーティーを組もうとしなかったのは、単に人を信用できなかったからだけではない。もしもの時、不測の事態が起きた時に身体能力の差で大きく後れを取るからである。誰かが裏切るにしろ、何者かに襲われるかにしろ、真っ先に狙われる、やられるのは自分だと考えた上での単独行動であった。

「知ってるか？ 今日、町の広場で100人規模の集会があったらしいぜ？ みんなで協力してこの状況をなんとかしようってな」

「小耳に挟んではいる」

「んで、何者かが集会の主催者を大勢の目の前でぶっ殺した、と」

「…そいつは初耳だ」

額と手の汗をぬぐいながらミノルは答える。

「そこで一つ尋ねたいんだが、製作側のデバッガーは何人いる？」

「社員が3人いたが、1人おそらく死んで今は2人… 会社に泊まり込みのアルバイトは俺ともう1人… 外のバイトは5〜6人くらいいたと思うが果たして何人生きている事やら…」

「そんだけいて未だにこの状況が知れ渡っていないのも変な感じだ

な」

製作側の人間は多くて10人程度。それだけの数がこの世界に來ているとなると、誰か1人くらいは進言、もしくは他のプレイヤーに名乗り出てもいいものである。

「社員の2人は他の仕事と兼任してるからレベルはそこまで高くない。恐らく30もいってないと思う」

「ってことは、今この状況を知っているのはバイトだけか…？」

「俺と同じく寝泊まりしている奴は間違いなく取り込まれている。俺に必死に聞いてきたくらいだしな。俺は知らない振りを通しているが」

Gillyは再び腕を組んで考え込む。

「Gilly、そんな事を知ってどうする？ まさかこの現象を止めようとかするつもりか？」

「…出来たら、それが一番いいんだろうけど。俺自身はこの現象がどうやって引き起こされているかのほうが気になるけどな」

ミノルの問いに、Gillyは不敵な口調で答える。

「知った所で俺達のような連中が止められるなんて思わない事だ。…現に止めたくない、止まって欲しくないと思う人間も表れ始めている…」

「こつちの世界から、現実の人間を殺している連中の事か？」

ミノルはゆつくり頷き、頭を宙に泳がせる。

「俺はこっちに来てから何だか余計に現実を見せつけられた感じだよ…」

「何だよ急に」

「結局、人の上に立って好き放題やってる人間も、下で苦しい生活を強いられて、不満を言っている人間も、本質的には何も変わらないってこと」

「…そうか？」

「同じだよ。能力や権力を持てば誰だって好き放題やる、逆に無かったら苦しんで不平不満や愚痴を口にする。人の立ち位置が変わろうとも世の中は何も変わらない。努力なんてものは、その立場を入れ変えるための物でしかない… 世の中が変わるとかはその枠組みの中でしかありえないってさ」

「……………」

「だから、俺個人はこんな世界もあっていいと思う。現実での弱者が強者に対して好き放題できる世界。現実では会社の部下を首を簡単に飛ばせる上司も、こっちの世界では部下に簡単に首を飛ばされる… いや、もっと多くの人を取り込んで欲しいくらいだ。そして思い知って欲しい。自分達は、いつでもこいつも同じ性分の人間だって事をさ」

「御託は結構だが、それもお前個人の一思想に過ぎない。そして、

他の人間がそれに付き合ってやる道理も無い」

「ま…それもそうか…」

G i l l y に批判されつつも、ミノルは自分の言いたい事を言い切ったのか妙に清々しそうな表情であった。

「まあ、お前がこの世界を何とかしたいなら出来る限りのことは協力するよ。俺だっていつ死ぬとも限らんわけだしな。但し、あくまでも出来る限りだ。この身を危険に晒すようなことは一切するつもりはない」

「それでいい、十分ありがてえよ。互いにこの世界では日蔭者同士、上辺だけでも仲良くやっていこうや」

G i l l y も意地の悪い笑みを浮かべる。

「んじゃ、ついでにもう少し教えて欲しい事があるんだが」

「ずい、とG i l l y が体を前に倒すと同時に、ミノルが手を前に出して制止する。」

「それは構わないが、その前にこちらも一つ聞きたい」

「何だよ？」

「G i l l y、お前こそ一体何者だ？」

「そんなことか、と言わんばかりにG i l l y は鼻息をつく。」

「別に。わざわざ言うようなもんでも。ただのゲーム好きだよ」

「『ただの』じゃ、ないだろ。さっきのボウガンを構えた時の全く震えを見せない手といい、そんな駆け引きを行える度胸といい…もし俺があそこで銃を撃ってたらどうするつもりだったんだ？」

「終わった事をいくら話しても仕方ないだろ？」

Gillyは両手を上げるが、それでもミノルは引き下がらなかった。

「いや、いくらこっちの体の方が身体能力が高いと言っても、精神はそのまま、中身は一般人なんだ。俺は高校時代ライフル射撃をやってたから解かる。精神のブレは何かを構えている時のような、体本来の重心が崩れた時に表に出てくるもんなんだ。『動かない時』なら特にな」

「なるほど、道理で震えている割には銃の構え自体はサマになっていたわけだ」

「話を逸らすな…！　　というかそんな事を言ってる時点で…」

今にも投げつけんとはかりに工具を握り締めるミノルの姿を見て、はいはいとGillyは余裕を見せながらなだめる。

「ま、確かに俺は一般人じゃないかもしれんが…」

「少なくともそのメンタルはスポーツ選手とかのそれじゃないな。警察… 軍人… はたまたはヤクザ… 何の経験も無しに、微塵の動揺を見せずに人と銃を向け会えるなんて一種の異常者だろ」

「はは、その可能性もあるかもな」

ミノルの物言いも別に気にしてないと言わんばかりに、Gillyは笑う。だが、すぐに顔付きが再度真面目なものになる。

「悪いがこの話はここまでだ。その侘びと情報提供の礼と言っちゃあ何だが、お前にも大事な話を教えてやろうと思う」

「…何だ？」

少し警戒色を出しながらもミノルは耳を傾ける。

「この現象はいつまでも続くもんじゃない。お前も下手な事をせず
に大人しくしていたらそのうち抜け出せるだろうよ、多分」

「…どうしてそんなことが言える？」

Gillyは軽く勿体ぶりながら間を置いて答える。

「前例があるからな」

ミノルは目を見開いて思わず身を乗り出した。

【番外編2】 俺の知らない所で（後書き）

番外編その2。

Gillyさん主体のお話でした。

会話が多くなると途端に情景描写がおざなりになってしまいますね…

どうでもいいですが、筆者も一応ライフル射撃経験者です。

立射限定ですけど、酷い時は心臓の鼓動で銃身ブレますからね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9899w/>

アカシックドミネーター

2011年11月17日21時39分発行